
仮初め伝説

一日千秋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮初め伝説

【Nコード】

N2476I

【作者名】

一日千秋

【あらすじ】

終わりの見えた世界で、
終末が近づく世界で、
人々は、何を思い、どう生き抜いたのか。

王、王子、騎士、貴婦人、スパイ、医者、画家、詩人、音楽家、魔法使い、エルフ……。様々な人物が織りなす歴史の全てを、今から息子に伝えよう。

西の彼方を忘れぬために――

第一話 はじまり。そして空振る出会い。（前書き）

長いです。終わり見えません。いえ、終わりは見えていますが、そこに至るプロセス的なものが長すぎて霞がかかっています。作中では何十年って時間が流れるので、登場人物の数も半端ないことに。しかし、いつまでもあたたかく見守っていただけたらという願いを込めて、「初投稿」させていただきます。なんだか「初登校」の気分です（滝汗）

第一話 はじまり。そして空振る出会い。

仮初めの世界を望んだ人々がいた

仮初めの世界に生きた人々がいた

『——そして、世界は終末へ向かう——』

第一部「青は藍を語りき」

<プロローグ>

西の彼方に、私の曾祖父は忘れ物をしてきた。
忘れ物と言っても、実体のあるモノじゃない。

——記憶。

曾祖父がその地で生きた、大切な大切な十年間。
私が子どもの頃、ときどき曾祖父は私に言った。

“——忘れてはいけないよ。あの海の向こうで、立派に生きた人々のことを——”

ほとんど抜け落ちていた曾祖父の記憶を掬^{すく}ったのは、私の祖父、つまり曾祖父の息子だ。

なぜ祖父が、という謎が残る。

祖父が生まれたのは、曾祖父がこの国に来てから十年以上も経つてからなのに。

…けれど、私はこのごろ解り始めている。

曾祖父や祖父は長生きだ。そして、不思議な力を持っている。
能力は劣るが、父も、…私も。

そんなわけで、私は祖父の話してくれる昔話を信じているのだ。
国がどうしても隠したがる、その地にまつわる話。

箝口令が敷かれてから百余年。あまりにも長すぎる禁忌。

しかし今から私は国に背いて、息子にその話を伝えようと思う。

西の海を眺めながら伝えられた、そして伝えられる、長い長い物語を。

「…さあ、ここに座って。そう、海を眺めて——」

息子は青い瞳を輝かせながら、私の指示に従った。

潮風が、海に夕日を誘い込む。幻想的な、その眺め。

「いいかい、今から話すことは全て、本当にあったことなんだ」

語り口が祖父に似ていたのだろうか。私の声を聞いて、息子は少し笑った。

「昔々、あの海の方こうに、十二の国がありました——」

ああ、曾祖父？…生きているよ。

何しろ祖父の話によると、曾祖父は『クォーターエルフ』らしいからね。

第一章<序>

静かな雨が降っている。少年が二人、ジューン王国の国境に立っていた。

「…兄様…僕たち、ここで暮らすの…？」
「…そうだよ…」

x

——時は星陰暦一〇三〇年。星十二王国に、戦乱の嵐が吹き荒れた。

ことの発端は最北の国、ディクセント王国の王の崩御。

次期国王には戦争好きで有名な若き王子が即位し、あるう事が隣国のジャニユアル王国を侵略、勢いに乗って、その隣のフェブラル王国までも占領した。

そのまた隣の最東国マーチ王国は、ディクセント王国と不可侵条約を結び、残りの8王国を制圧すべく戦争に加わった。

この惨劇に黙ってはいなかったのが、最南の国、ジューン王国。

武術と芸術に秀でたこの国は、隣国メイ王国、ジュライ王国、その隣オーガスト王国と友好条約を結び、ディクセント・マーチ両国に宣戦布告した。

一〇三五年まで続いたこの戦いを、『アルゼの戦い』という。

物語は『アルゼの戦い』の四年後、一〇三九年から始まる――

<――>

よく通る声で、近衛兵が告げた。

「陛下！ジュライ王国シェリダン伯爵家の生き残り、ウィリアムと

名乗る少年が謁見をと申ししておりますが、どのように」

ジューン王国の国王アレキスは耳を疑った。

ジュライ王国シェリダン伯爵家といえば、先の戦いでお家断絶したはずだ。

当主のジョルジュは自分の目の前で戦死しているのに。

——そういえば彼には二人の息子がいたな……。行方知れずだったが、生きていたとは。

「よい、通せ」

アレキスは思案をめぐらした。長男が生きていたとすれば、息子アランと同じ年のはずだ。

三十五歳になる壮年の王は、わずかな緊張と期待を感じていた。見る者を魅了する長い銀髪が、自身の手によって緩く結ばれた。

やがて、濃紺の髪に深い青色の瞳をした少年が通された。白いシヤツをきちつと着て好印象だが、しかしどうも、伯爵家の子弟の服装からはズレている。

傍らにコート、荷物、剣を置いて、少年は膝をついた。

「シェリダン伯爵家ジョルジュの息子ウィリアム、父の遺言によりジューン国王立騎士団に入団したく、参上いたしました」

ハキハキとしたその口調、その端正な顔立ちは、ジョルジュにそっくりだった。

「そなたがウィリアムか。年は…16ではないか？」

はい、そうです、と少年は答えた。

品の良さがただよっているが、それだけに服装とのアンバランス感が拭えない。

「父ジョルジュが若い頃、ジューン王国の恩を受けたと聞きました。どうしても恩返しがしたいと考え、騎士団でなら、私の長所が活かせるかと思います」

「何か他にも理由があるのではないか？話してみなさい」

それ以外の理由も含まれているように思わせたのは、暗い瞳。父親の若かりし頃と比べると、一番目を引く違いだった。

彼は少し迷ってから、遠慮がちに話し始めた。

「…実は、弟のサリアは絵を描くのが得意なのですが、その…、今は生活するのが精一杯で、

画材を買うお金がないのです。私が働いて稼げば、弟は今十一歳ですが、いずれ、絵で生活できるかと…」

少年はそれきり黙って、目を翳らせた。たしかに、気品のわりにやつれている。

気の毒に思ったアレキスは、もう一人、重要な人物のことを思い出した。

「…そうだ、そなたの母は…、ヘレネはどうした？」

少年は動きを止めて、唐突にうつむいた。表情は、確認できない。

「――亡くなりました。父が亡くなった次の日に、命を狙われた私を庇って」

「…そうか」

質問を予想していたのか、少年は落ち着いた声でサラサラと言った。が、それがまた逆に痛々しい。母の死が少年に暗い影を残したのは言うまでもなかった。

察するに、四年間かなり苦勞をしてきたのだらう。十一歳で両親に死なれ、弟を養うために働いて働いて…。

「そなた、二十歳未満の者は戦場に出られないことは知っているのか？」

二十歳まで、給料は成績の良い者にしか支給されないことも？」「はい、存じております。寮生活になることも、弟には話してあります」

――ん？話してありますって、弟、大丈夫なのか。

「…そなたの弟は今どこに？」

彼は少し考えて、

「今は…多分このカストル城のスケッチをしながら私を待っていると思いますか…」

アレキスはその弟（兄同様すっかりしていそうだ）に会ってみたくなった。

「そなたの弟に会いたくなった。城の周りにいるのなら、すぐに探せるだろう」

そう言うと、アレキスは宮廷魔法使いのヴェオラムを呼んだ。

宮廷で王と騎士団の団長に次ぐ権力者の魔法使いは、落ち着いた様子で現れた。

元々は黒だった髪は、長年の苦勞で白くなっている。逆に藍色の瞳は、年を増すごとに深く知性的な光を宿すようになった。黒い口―ブからのぞく手は、年齢の割にしっかりしている。先の王が、最も重用していた人物だ。

「ヴェオ、彼の弟を探し出してほしい。城の周りにいるはずだ」

すると突然、少年が口を開いた。

「あ、あの…今すぐ呼び出せますよ…」

言いながら、少年は二、三秒目を閉じる。妙な静寂が、生まれた。

――刹那、これまたジョルジュによく似た紺髪少年が、スケッチブックを持っていきなり現れた。

彼は見た目と同じように可愛らしい声で、

「シェリダン伯爵家次男サリア、ただ今参上いたしました。お呼びでしょうか？」

……え、なに今の。

アレキスは呆然と立ちつくしていたが、ウィリアムはアレキスの

反応を予測していたらしく平然とし、サリアは半ばおもしろがっているように見受けられた。かたや老魔法使いはというと…。

「ほお…なるほど、頼もしい」

事態を把握できていないのはアレキスだけだ。誰がどう見ても、そうだった。

「あ…え…？つまり、なんなんだ」

その問いに申し訳なさそうに答えたのはウィリアム。

「あの、陛下…言い忘れておりましたが、弟のサリアは魔法が使えるのです」

——ああ、OK。先に言っておこうね、そういうことは。

「そうだったのか…。サリアとやら、その絵も見せてくれないか」

サリアは少々迷っているが、兄が「いいじゃないか」と微笑んだので、おずおずと絵を差し出した。その絵は、黒鉛一色でおおまかに描かれていたが。

——上手い。

ただそのものを忠実に描く上手さではなく、見る者になんらかの感動を与えるものだった。絵が生きているとも言っのだろうか（城が生きているという表現はおかしいが）。

…神はサリアに二物を与えちゃったんじゃないの。

「これは…素晴らしい。正直、こんなに素晴らしい絵を見たのは初めてだ」

アレキスは絵をベタ褒めだ。一目惚れと言っても差し支えなかった。

王に手放して褒められた本人は、とても嬉しそうに言った。

「光栄です、陛下。最も得意なのは人物画ですが」

こんな才能を貧困なんかで埋もれさせるのはもったいない、王がそう思うのは必然だった。

「サリア、そなた、この城で宮廷の画家として生活しないか。

画材の心配はいらないし、いつでも兄に会える。会いたいときに会えばいい」

一瞬の、間が空いた。

「ハ、ハイ！！働かせていただけるのでしたら、喜んで！！！」

サリアはそう叫んだ後、かなり身長差のある兄に抱きついた。

「ウィル兄様！僕、絵を描かせてもらえるって！！働かせてもらえるって！」

弾けんばかりの弟の笑顔に、ウィリアムも久しぶりに心から笑えたようだ。

「陛下、何とお礼を申し上げたらいいいのか…これで、兄弟共に恩返

しができます！」

アレキスにとって、その光景はとても希望に満ちたものであった。

——この弟想いの彼なら、我が息子の良い友人になるのではない
か——

×

その後、サリアはカストル城の東塔アトリエに部屋が与えられる
ことになり、謁見の間にはアレキスとウィリアムが残った。

「さて。話はウィリアム、そなたに戻るが、所属は戦闘課希望か
？」

「はい。幼い頃より、父から剣を習いました」

アレキスとジョルジュは戦友で、ジョルジュが剣の達人だったこ
とをアレキスは知っていた。そしておそらく、彼の息子もまた——。

「よろしい。では、成績で寮の班を決めるから今から簡単なテスト
をしてもらう。」

彼について、騎士団入団係のところまで行きなさい」

王が合図をすると、長髪の少年案内人が出てきて、「荷物をお持ち
します」と言った。

ウィリアムは一瞬、何が起こったのか分からないという顔をして、

「——っだ、だめです…っ！自分で持ちます！」

もう笑うしかないアレキスは興味ありげに聞こえるよう振る舞っ

た。

「なぜ、だめなのだ？」

「いえっ、あの…王家の方にマントを持たせるなどっ…」

ウィリアムは、自分が何を言っているのかわからない様子で、混乱しているように見えた。

「…ハハハっ！父上、瞬殺でしたね」

案内役、もとい、ジューン王国王子アランはカツラを脱いで笑った。

輝く金髪が突如あらわれ、ウィリアムの驚くまいことか。

「俺はアラン。まさか、見破られるとはな。なんでわかった？」

ウィリアムは王子の名を名乗った少年を穴があくほど見つめて、

「…え。いや、物腰などが、なんとなく王族の方のような…気がして」

「そうか…？全員に同じようにやったんだが」

アレキスは銀の長髪だったが、アランは金の短髪にスカイブルーの瞳をしていた。

王は自分の判断が正しかったことを知り、安堵した。

「フ…合格だ。アラン、彼を例の『X班』に案内してやれ」

「はい、父上！」

回廊に、二人の足音がこだましている。

うまい具合にジューン国王に会え、兄弟ともに居場所を与えられたウィリアムは飛び上がらんばかりに嬉しかったが、妙なテストに合格したらしい自分がどうなるのか考えていた。

大理石の床を歩きながら、ウィリアムは下僕姿のアランに尋ねた。

「あの、アラン様。X班とは、なんですか？」

途端に、アランが吹き出す。

「ぶふっ…、アラン様！？冗談はよしてくれ。アランでいい」

「えっ…、でも…」

アランは立ち止まってから振り向いて言った。

「もちろん公式の場ではマズイが、プライベートのときは敬称略、いいな」

有無を言わせぬ眼差しだった。下僕姿が玉にきずというやつか。

「それに、敬語を使うのもナシだ」

「はい…じゃない、わかった…。で、X班というのは？」

「フフ…今にわかる。もうすぐ着くさ」

アランは気さくで、話がとてもよく合った。

城の美しい中庭を抜けるとき、アランが言った。

「へえ…、じゃあ、弟君は宮廷の画家になれるわけか。それはすごいな。俺もその絵を見てみたい」

アランがそう言つと、ウィリアムはポケットから懐中時計を取り出し、内蓋の絵を見せた。

「――父と母。俺がジュライ王国で働き始めた頃、泣きながら描いていた絵だ。

たまらなかった…。騎士団に入ろうと思ったのは、弟のためでもあるんだ」

「…生きて笑っているようだな…」

そう言つて、アランは声を落とした。

「弟君は魔法も使えると言っていたが、人の記憶を探ることも…出来る…のか？」

「あまりやりたがらないけど…、一応出来る。なぜ？」

顔を曇らせ、アランは答えた。空の明るさとは、かなり対照的だ。

「亡くなった母上の肖像画…、ないんだ、一枚も。父上が、相当悔やんでおられた。

俺の記憶の中の母上なら…」
「わかった。頼んでみよう」

×

そのあとまた明るい話題に戻った二人は、カストル城の北西にある双翼寮に到着した。

「おはようございます、アラン様！新しい御友人ですか？」

「ああ、ウィリアムという。例のX班最後の一人が決まったと寮長に伝えておいてくれ」

「ほう、X班ですか…！！」

門番の双子兵士は興味深そうにウィリアムを見た。さすが双子、息がピッタリだ。

複雑に絡み合うツタがデザインされた鉄柵が開かれ、二人はかなりの敷地を誇る双翼寮へと足を踏み入れた。

丁寧に刈り込まれた芝生。二手に分かれて敷地の奥まで並び立つ、全部で八棟の寮。

マント姿で行き交う少年達。ウィリアムの事前調査によると、みんな二十歳未満だ。

アランは迷わず一番左手前の建物へ近づいていく。ぎこちない「おはよう、アラン」の声がかかるところを見ると、どうやら今年度入団する者たちのようだ。

アランは一々嬉しそうに、挨拶を返す。入団ありがとこの意を含んでいるように思えた。

チヨコレート色の扉を開けて入った寮の中は、全体的に青で統一されている。

エントランスホールを少し進んでアランは右に曲がった。

それに続こうとしたウィリアムがふいに左を見ると、小さな扉と受付のような窓口がある。

「アラン、ここはなんだ？」

「ああ、寮長の部屋だ。この双翼寮全てを管理しているエッフェル・

アトライドっていう、

怖い怖い奴の部屋だよ。怒られないように気をつけな。食事の好き嫌いとか特に厳禁！」

わずかに縮こまったウィリアムを気にせず、アランは歩き出した。

「ここが会議室。生徒はあんまり使わないけど、教授役がたむろつてたりするかな。

風呂は一階の一番奥。ああ、食堂は別館だから班員に教えてもらえ。ここが階段で……」

自他共に認める方向音痴のウィリアムが、混乱し始めている。

——ここ？そこ？どこ？こつち？あつち？どつち？？？

「ウィル、大丈夫か？ちゃんと覚えたか？ま、班員に教えてもらえばすぐ慣れるけどな！」

「…お、おう」

自信なさそうに返事したウィリアムを元気づけようとしたのか、アランはウィリアムの腕引っ張った。

「——さ！こつちから各部屋になる。お前は1年、？組、X班。通称1-？-X班だ」

「いちいちえつくす班…か」

「学年は省かれることが多いから、まあ？-Xで通じるだろうよ。

二階は？組、向いの棟は？、？組が入ってる。覚えたか？」

「…あ…また今度、な。おいおい、じっくりと」

「だあああ……」

ウィリアムは片側に扉が並ぶ廊下で、何人かの団員（おそらく同年齢だろう）とすれ違った。

「よう、アラン！新入りか？」

「ああ、ウィリアムだ。1-?-X班に決まった」

「へえ、X班…！騎士団へようこそ！お互い頑張ろう！」

廊下の扉には、1-?-A、1-?-B、1-?-C…と大きく書いてあった。

「これって1-?-Z班まであるのか？」

「ああ。あ、でも1-?-Zは特殊でな。契約退団制クアンテを採ってるやつが入るんだ」

「クアンテ？」

「国内外の貴族の子弟とかが、20歳になったら退団するっていうやつ。兵士として

戦場に出る可能性は低いが、貴族の教養的な感じで勉強しに来るんだ。授業料払ってな」

アランは屈託のない笑みを浮かべて、

「ウィルの父君もそうだったらいいぞ？退団後も、ちよくちよく顔出してたけど」

「へえ…。知らなかった」

「ん、待てよ」

アランが腕を組んでウィリアムを見た。何やら真剣な顔だ。

「ウィルは…ジュライの貴族だよな？伯爵様だよな？クアンテ採らなくて大丈夫か？」

「え？あ、え？ああ、どうなんだろう。よくわかんないけどいいんじゃないのか」

「ジュライの国王と話つけてきた？ジューンの騎士団入るって」

「いや、会ったこともないけど」

「……」

胸飾りをいじりつつアランは黙り込む。まずいこと言ったのだからかと、焦るウィリアム。

1-?-K班の前でアランは立ち止まり、ゆっくり振り向いた。緊張している顔だった。

「ウィルは…ジュライの王族に、会ったことがない？」

「ああ、全然」

「…」

アランはまた進みだして、振り向かないまま小さくつぶやいた。

「…なら、よし」

「…？」

ウィリアムには「なら、よし」の意味がいまいち理解できなかったが、「なら、帰れ」などという最悪のパターンでなかったことに安堵する。

しばらくまた歩き、アランは大きく1-?-Xと書いてある扉の前で止まった。

「なあ、『例のX班』って、どういうことだ？」

「今年の1-?-X班に限ってた。成績、性格共に優れた人物とでもいうのかな…」

そう言ってアランは扉を開けた。

——まぶしい。廊下が薄暗かった分、正面の窓から差し込む日光が目にしみた。

「１－？－X班の諸君！ご希望通り最後の１人は戦闘課だったぞ。ジュライ王国出身の、

ウィリアム・シェリダンだ！……………って、あれ？」

寒色系の部屋には、誰もいなかった。

第一話 はじまり。そして空振る出会い。（後書き）

うひー。ここまで誰か読んでくださっているのでしょうか。

ぶっちゃけ、大学受験を控えた高校三年生でありますので、更新が不定期すぎます。

大学に受かったらいっぱい書くぞー！と思っていましたので、今のところはグダグダ。

こんな幼稚な文章にも、感想やアドバイスをいただけたら幸いです。

第二話 会えたけど何だコイツ？（前書き）

主人公の受難（？）が始まるのでした。

第二話 会えたけど何だコイツ？

<二>

アラン曰く、

『だああカラぶった！悪いウィル！俺は城に戻らなきゃいけないから、班員探し頑張れ！』

—— 一人ですか。

『見つけるべきは三人！一人は絶対に向こうからお前を見つけてくれる。』

なにせアイツは情報通だから……』

—— 意味分らないです。

『そいつが残りの二人も見つけてくれると……思う！』

「……思う、ねえ」

情報通の誰かさんが自分のことを見つけてくれるらしいので、ウイリアムは方向音痴を嘆きながらブラブラ歩いていた。

（いやそもそも、部屋で待っていればよかったじゃないか。アホだ俺。

一人じゃ部屋に帰れないなんて——）

「……ッ！」

突然感じた視線。思わず振り返って、8月という盛夏の日差しに目をつぶってしまう。そうしているうちに、視線は途絶えた。

「……?」

辺りを見回してみるが、青い青い芝生の上を歩いている者はいない。食事時になったのかなんなのか、例の食堂（別館）へ消えてしまったようだ。

——あれだよ、ほれ、班員に教えてもらって行くところ！未知の世界！

「……そういえば腹減ったなあ」

今朝出てきた宿屋の朝ご飯はおいしかった。すつごく。もう一泊しようものなら、追加料金はえーとえーと……

「——いや待て、それ以前に、多分城壁の外に出られない」

方角って何。おいしいの、ソレ。

どっち行ったら城の外かもわからないとか、終わってる。

「まず双翼寮の塀を越えて……それはイケる。双子の門番探して柵を伝っていけばいい。」

それからめっちゃ綺麗だった庭を探して、アランお勧めの裏道から城の中入って、それで階段上って行って、上手く謁見の間に行って、初老の近衛兵に城門のところまで案内してもらってっていう一連の行動巻き戻しを……っ!？」

また、視線。確実に見られている。

嫌な感じはしないが、一方的に見られているのは少々緊張する。

父の形見だった長剣は、部屋に置いてきた。どう考えたって、城壁内部で帯剣する必要なんて無いだろう？

と、判断した自分を呪いたくなるウィリアムである。

「マジ勘弁してくれ…、誰だ…？」

ダラダラと歩きながら、ウィリアムは声を発した。
大きな木を見つけて、その幹に体を預ける。日陰に入りたい気分でもあったからだ。

「なんでゲンナリしてる？」

「！！？」

降ってきた。声が。上から。

葉っぱが生い茂る、木の上から。

「なっ——」

「あれ？反応が薄いぞ？」

——ザッ

降ってきた。人が。上から。
葉っぱとともに、木の上から。

「よう！ウィリアムとか言ってたっけ？よろしくなっ」

「！！！！？」

「お前はこれから俺たちの班長になるんだ！そう恐怖におびえるな
ってえ！」

そう言ってニコニコ笑っているのは、フェミニンルックの少年だ
った。

葉っぱの付いた長い金髪に、素朴な茶色の瞳。細身で身軽そうだ。
いや、絶対に身軽だ。

フリルの付いたシャツから覗く手は、少女のようにほっそりして
いる。ズボンを着いていなければ女の子に間違われても仕方ない。
頭が小さく顔は奇麗に整っていて、ドレスとか着たら確実に貴婦
人になれるだろう。

なれるだろう、とか冷静に判断している時点で、ウィリアムはそ
う怯えてもいないのだが。

「まーまー仲良くしよう！俺のこと探してたんだろ？見つかったよ
かったな？」

「…ええと？」

「俺はキュリアス・ツール！キュリーでいいぞ！お前はウィルでO
K？」

「…あ、ああ」

キュリアス
好奇心が強い…だと？何て名前なんだ、コイツ。

待て、なんで俺の名前知ってる？班長？？情報通って、この木登
り少年が？

「聞きたいことが沢山ありそうだな？いいぞいいぞ、質問はいい。
情報量が増える」

「あー…、えー…」

「何で名前知ってるの？つつか、班長ってなんのこと？っていう感じだろ」

「まあ」

キュリアスと名乗った少年はうーんと背伸びをして（なんか猫っぽいな）、

「悪いが情報元は教えられない！」

「つてオイ！」

「俺にもわからなくてな！情報の方から俺の耳に入ってくるんだ…」

「あああ、ハイハイ」

「信じてないだろ！？」

「あー、うー」

キュリアスのペースに巻き込まれそうになって、ウィリアムは必死にスルー作戦をとった。

——うそだろ。こんなのが四年間を共に過ごす班員だつて？

「ハハハ！まあいいや。で、ウィルはジュライの伯爵様なんだって？」

「お前何で知って」

「——俺はジューラのツール子爵家当主！でもクアンテ採ってない。お前と一緒に！」

「ああそう」

「ちなみにスパイ課な！」

聞かなくても分かっていたような情報だった。これで「ちなみに医師課な！」とか言われた日には、間違っても怪我なんてできない。

スパイ課は、表向き無いことになっている。裏の課なのだ。
こんなスパイ見習いがあるなら、違う意味で公表できないだろうか。

「なんか評価低いな。なんでだ？お前が班長なのはお前が戦闘課であることが悪いわけで、俺にあたられても色々困るっつか…。
とりあえず、他に戦闘課がいなかったことを嘆き悲しめ？」
「はああああ！？」

なんなんだ。コレ、なんていじめですか？
こいつに任せて大丈夫なんだろうか。

ウィリアムの心配をよそに、キュリアスは颯爽と走りだした。

「悲しみ終わったか？なら行くぞウィル！残りの二人に会いたいのさ！」

下手すれば置いてきぼりを食らいかねない。ウィリアムはあわて、芝生の上を駆けだすのだった。

第三話 激走 ノンストップな出会い

<三>

——静寂、は、簡単にぶち壊された。

ウィリアムが連れ込まれたのは人気のない道場のようなところで、タン、タンと謎の音が聞こえる。

キュリアスは目的人物以外に人がいないのを知ってか、ズカズカと中に入って行った。

「おーい！ヘル！いるのは知ってるから顔出せYO！」

「…なんだその呼びかけ。静かなところでは静かにしろよ」

ウィリアムのあきれた声に続いて、遠くから深いバリトンが響く。

「あゝ、悪いなキュリー。俺、昼飯パスで！エルと二人でどうぞ」

「やだな、そんな野暮ツちいことと呼んだりしないぞ俺は！」

「じゃあなんだって？」

そう言って野外へ続く扉（スライド式だ！？）から屋内に入ってきたのは、ちよつと目を引く長身の少年だった。

髪は明るい茶色の巻き毛、瞳は深いブラウン。バシッとキマっている服装は、貴族が着ていそうだけでもシンプルな白いシャツに、乗馬ズボン。

上品な立ち振る舞いからして、本当に貴族のお坊ちゃんという感じだ。

——安心感っていうか安定感っていうか、なんだコイツ？
キュリアスのアホさと全然違うじゃねーかああ。

キュリアスはいきなり真剣な顔になって、

「…ヘルには重大なお知らせがある…」

「見ればわかるよ、新入りか？」

「シリアスな雰囲気に乗ってくれよ！」

「あー、はいはい」

どうやらこの少年もスルー作戦のようだ。気が合うかもしれない、とニヤケるウィリアム。

少年は急ぐことも慌てることもせず、ゆったりと歩いてきた。
そしてウィリアムを見つめながら嬉しそうに、

「…もしや…、っていうか絶対にお前、戦闘課だろ？」

「ああ、わかる？」

「——ヤッタアア！」

少年がいきなり駆けだして、ウィリアムの両手をしっかり握ってきた。

意味不明な行動に驚いているウィリアムをよそに、少年はニコニコ笑って言う。

「よろしく班長！俺はメイ王国出身のヘルベルト・カーター！参謀課だ！副班長だ！」

「えええと？」

「いやあ！最後の一人が戦闘課だなんて超ラッキー！俺は班長なんてごめんだ！」

「ヘル、こいつがフリーズしちゃってる！」

「おお悪い！」

ヘルベルトという少年はウィリアムの手を離し、息を整えながら両腕を背中中で組んだ。

「取り乱して悪かったな、ちょっと嬉しくて。班長になる奴の優先順位が決まってるんだけど、戦闘課が最優先なんだ。次いで参謀課。うわあ、お前が戦闘課でよかった！」

「なあヘル、邪魔してごめんだけど、コイツに名乗らせてやらねえ？」

「おおそうだ！名前なんだって？」

——早馬に乗っているかのような疾走感。速度MAX。やばい、息切れがする。

「ジュライ王国出身のウィリアム・シェリダんだ。戦闘課…で、班長？」

ウィリアムは息苦しさを抑えに抑えて、どうにか言葉を絞り出した。

その様子を見たキュリアスが言葉を継いで、

「ジュライの伯爵様だ。得意なことはノーリアクションとスルー攻撃！」

「へえ！スゴいな！」

「——いや違うし」

どうしてツッコミ担当になってるんだろう、とか、マジで4年間こいつらと一緒にかよ、とか、ウィリアムには絶望するポイントしかない。

前向きに行こうと決心したウィリアムは、ヘルベルトに向かってたずねた。

「ちなみに、そちらさんの得意なことは？」

「俺か？俺は……」

ヘルベルトは腕組みして視線を宙に浮かせ、

「——チェス、弓術、馬術、本の速読、暗記、暗算、古代語、えーとそれから……」

——どこのお坊ちゃんすか。

「町の居酒屋でのウェイターとか得意だぞ？『いらっしやいませ』とか言つて」

「それ得意技？」

「お客さんに振りまく笑顔は、得意技の域だと思う！」
「……そうすか」

キュリアスが「メイの伯爵様は意味分かんないことするなあ」とつぶやいた。

やっぱり貴族なんだ、こいつも。

クアンテ
契約退団制を採っていない、メイの伯爵……。ん？

「メイのカーター伯爵って……めっちゃ権力持っていないっけ？クアンテ採らないのか？」

「え？」

「だああウィルもヘルも生臭い話はやめろ！あと一人が俺たちを待ってる！」

なぜかキュリアスが焦ったように割り込み、話が中断された。

「っておいキュリー！」

「悪い悪い！でもあと一人が可哀そうだ！早く行こうぜ！」

「なんだ、エルにはまだ会ってないのか？ちよつと待て、弓を片づけてくるから」

ヘルベルトが野外扉の方へ歩いていく。

ウィリアムは責めようと思ったキュリアスがいないことに気付き、道場の外へ出る。

「キュリアス？」

「——あと一人！あと一人ッ！」

キュリアスは快晴の空に向かって、「あと一人」コールをしていたのだった。

第三話 激走 ノンストップな出会い（後書き）

伏線で、なんですか。食べられるものですか。

第四話 賭けっこじよう、そっじよう

<四>

エル、というのがどういう奴なのか、ウィリアムは想像しないことにした。

キュリアスは「よし、最後はドクターを迎えに行こう!」と言っていたから、

医師課の奴だろうとは推測できる。

推測はできる。想像はしない。無駄に期待して、後悔したくない。

「さあて? エルはどこかな?」

キュリアスが鼻歌交じりにスキップし、ヘルベルトはウィリアムと並んで歩いている。

「俺が思うに、エルは寮にいる! 部屋に戻って、独りぼっちを嘆いてるはずさ!」

キュリアスがそう言うので、三人は寮まで戻ってきた。

さすがに暑い。天高く上った太陽が、ウィリアムの青みがかった紺髪を焼いていく。

キュリアスの金髪は日の光を跳ね返しているような気がした。彼を見ているとまぶしい。

「…なあヘル、キュリーっていつも跳ねてるのか?」

「あ、ああ。そのくせ足音はしないから、なんか矛盾してるけどな」
「へえ…猫かよ。意味不明なやつだ」

「初めからあのテンションだったろ？俺に会った時もそうだったんだ。」

『やーよろしく！ヘルでいいよな？参謀課への引き抜きおめでとう！』とかなんとか」

ウィリアムは芝を踏みしめながら、

「参謀課への引き抜き？」

「あれ、引き抜き制度を知らない？俺、もともとは戦闘課を希望してたんだ」

キュリアスはすでにチョコレート色のドア（以下、チョコドア）を開けて中に入っている。

少し速めた歩調につられたかのように、ヘルベルトは早口に言った。

「入団面接が終わったあとにアランの意味不明テストをクリアしたら、アランに

『ヘルは参謀課に転課ね。副参謀長による引き抜きが掛かったからって言われてさ』

「え、なんかそれスゴくね？」

「面接をどっかで見られてたっていうのがアレだけど、でも選ばれて嬉しかったな…」

遠い眼をしたヘルベルトが、ドアの取っ手に手をかけた。

両開きのチョコドアを左側だけ押し開けて、——ヘルベルトは入

ろうとしない。

それどころか一步下がった。ウィリアムにぶつかりそうな勢いだ。

「ん？どした？」

「…」

キィイと若干錆びた音を立てて、チョコドアの左側だけが開く。その奥には寒色でまとめられたエントランスホールが見えたが、まだ誰もいない。

「おい、ヘルベルト？？」

「…そこにいるんだろ、キュリー」

「え？」

ウィリアムが疑問の表情でエントランスを見つめると。

開いていない右側の扉から、金色の髪がヒョコリ見えた。

続いて、バツの悪そうな表情をしたキュリアスが顔だけ出す。

「…ちつ、バレたか」

「二度もひつかかるわけないだろ、ドアホウ」

「そこは空気を読んでさ、ウィルを先に入れようと画策するところであって…」

「残念だったなあ。俺は優しいんだ」

ヘルベルトはキュリアスの本体がある右側のドアをわざと押し開け、

「——ぎゃああ！？」

キュリアスの悲鳴に満足したのか、意気揚々と足を踏み入れた。

キュリアスは後続の二人を驚かそうと待ち構えていたらしく、両手には花瓶から抜き取った花々を持っていた。それを角っぽくして「ばあ!」と言いたかったようだが、実際に彼がやってみれば花飾りをつけた女の子にしか見えないだろう。

「おいヘル! 顔に傷いったらどうしてくれる!？」

「エルに整形してもらえ」

「いやだ! 逆立ちしたってあいつ以上の美形にはなれっこない!」

どうやらエルというのは美形の医者らしい。

——って、なんだよそれ？

「ウィル、早く入れ。もうアホなおどかしは無いから安心していいぞ」

「あ…、ああ」

×

さっそく気を取り直したキュリアスは、なぜかクルクル回りながら廊下を進んでいく。

北窓となっているこの廊下は、寒色も手伝ってひんやりとした空気を持っていた。

1 - ? - R班のあたりでキュリアスが突如振り向いて、

「なあ! エルが部屋で何やってるか当てっこしねえ!？」

——ちょ。

「うわ、何か賭けたりするのか？」

——ヘル、そこはスルーだろ！俺、エルってどんなやつか知らないのに！

「賭けるとするなら、そうだな…、プライドにしよう！」

「プライドオ？」

「お、おれパスしていいか？」

遠慮がちに言ってみたウィリアムは、キュリアスの流し目に嫌な予感を募らせた。

キュリアスは軽いステップでウィリアムに近づき、満面の笑みになる。

「パスしていいわけない」

「なぜに」

「それはホラ、班長の自覚的な」

「意味不明なんだけど」

「わかってもらうつもりは、ない」

——パンツ。

キュリアスが大きな振りで手をたたき、高らかに言い放つ。

「俺は物思いにふけていると思うね！机に座って！」

ヘルベルトが少し考えて、

「俺は読書中だと踏んだね。ベッドの上で」

いよいよ焦るウィリアム。行動と、その場所も指定しなければならぬようだ。

うーうー考えたあと、ウィリアムはやけクソっぽく一言。

「——ベッドで昼寝してる」

「よし、出そろったな！^{フライド}矜持ガタガタの罰ゲームは、エルに決めてもらおう！」

グダグダ話しているうちに、大きく1-?-Xと書いてある扉の前に到着した。

なぜか、無駄に緊張が走る。

初めて会う『エル』という美形の医者（仮）への期待が、ウィリアムの意志に反して膨らんでいた。抑えつけるだけ無駄か、と思ったウィリアムは、キュリアスがドアノブをひねる光景に吸い寄せられていく。

——開けた。

――閉めた。

「……キュリー？」

「キュウリ？」

「キュウリ言っな、ヘルベルト」

キュリアスは頭を抱えて、

「あの馬鹿エルめ……ッ！」

第四話 賭けっこしよう、そっしょう(後書き)

『エル』は何をしていたんでしょうね？

第五話 四人が寄れば、1 - ? - X

<五>

――閉めた。

「……キュリー？」

「キュウリ？」

「キュウリ言うな、ヘルベルト」

キュリアスは頭を抱えて、

「あんの馬鹿エルめ……ッ！」

「あ？部屋にはいたのか？」

「いたけど……！」

「なんだよ！？もったいぶるな！」

ヘルベルトがキュリアスを半ば押しのける様にして、扉の前を陣取る。

固く結ばれた口から、その緊張が読み取れた。そしてゆっくりキュリアスを見て、

「……俺たちみんな、罰ゲーム決定だったか？」

「……ああ。いや、でも俺が一番正解に近いんじゃない？机に座ってたから……」

どんよりと曇るキュリアスの声。自信を無くすように消えていっ

たそれが、ヘルベルトの左手に力を籠らせる（ヘルベルトは左利きのようだ）。

——ドアノブに、手を、かける。

——開ける。

——勢いよく閉める。

と、中から叫び声が。

「ぎゃあああああ！？お前ら、なんてことをしてくれる！！俺に何の恨みが！？」

「——ツツツなんか聞こえたけど！！？」

ウィリアムがヘルベルトをつかんで言った。半泣きで。

ヘルベルトは蒼白になって、

「やばっ——、壊しちゃったか！？」

「壊すって何を！？」

「アイツの繊細なアートを！血と汗と涙の結晶をだ！」

「何だよそれ！？」

「吹けば飛ぶように散ってしまっ、ガラスのような作品をだああ！」

決死の覚悟でウィリアムが扉を押し開ける。
しかしさっきのヘルベルトと同じく中には入らずに、扉だけを部屋の中に突撃させた。

「——& % # \$ ■——!!」

なんか謎の黒髪少年が、大量のカードが散らばる机で泣き叫んでいる。

顔には横長黒ぶちメガネ。服装は………なんと白衣だ。どう見てもお医者様。
美形かどうかは判断しかねる。顔をグシャグシャにして、カードと戯れているから。

「俺のトランプタワー十段記録達成を目前にして！この仕打ちは何だ！！！！？」

すっかり怯えてしまったウィリアムは、突撃していったドアノブを引き寄せた。

——ドアが閉まる。

——ささやかな静寂。

「…ああ…オーケー。あれが最後の一人ね？」

ウィリアムが魂の抜けた声で言うと、ヘルベルトが慌てて言った。

「ちが…、違うんだウィル！いつもはあれよりマシなんだ！」

キュリアスも真面目な顔で、

「泣きやめば分かるさ！あいつが普通の馬鹿だっていうことが！」

——バンッ

扉が、部屋の中へ連れて行かれた。犯人はどう考えても『エル』で。

つまり、彼が扉を開けてこちらに来るということで……——！

「うわあああああ！？」

「やばい！逃げろ！」

「鎮まれ！鎮まれエル！」

三人が逃げ腰になったところで、『エル』がまくし立てる。

「だれが普通の馬鹿だって！！？俺の三十分間の集中を返せよおお！！！」

「違う！壊したのはヘルであって、俺じゃない！」

「初めに意味不明な行動をとったのはキュリアスだろうがっ！」

「……—もうお家帰りたい」

すると『エル』は急に黙りこみ、ウィリアムに視線を注いだ。

身長が同じくらいだったので、視線をかわすには横を向かなければならなかった。

「えーと……誰だっけ？」

「——班長だ」

ヘルベルトがそう言い切って、部屋の中に置いたウィリアムの荷物を指さした。

「あの荷物見たらすぐ、新メンバーの存在に気づくだろ？」

「おお、そう言えば」

『エル』が急激に冷静になってきた。

涙の跡を拭う時にメガネを外した彼は、かなりのハンサムだった。目鼻立ちが綺麗なのだ。本人は無自覚のようだが、淡い淡い青の瞳

に、目が引きつけられる。女性ならすぐにも惚れてしまうだろう。
ウィリアムはもちろんノーマルなので、妙な感情を抱くことはないが。

「そうかそうか、班長つてことは戦闘課だな？」

「あ、ああそうだ」

彼は大きく息を吸って、

「——よろしく、班長！俺はエラル・ジュピター。医師課で、外科・内科問わない。

適当にエルとでも呼んでくれ」

意外に普通の自己紹介だ。さっきの狂人はどこへ行ったのだろうか。

そんなことは少しも表に出さず、ウィリアムは冷静を装った。

「えと、よろしくエル。俺はウィリアム・シェリダン。ウィルでいい。戦闘課で、班長」

「ウィリアムかあ、いい名前だな。神話から取ってるだろ？」

「わかるのか？」

「ウィリアム剣の神つつつたら有名だしな」

ますますさっきの狂人がいなくなる。

ただの「良い奴」が形作られ、混乱するウィリアム。

ヘルベルトがこそつと、

「（こいつ、多重人格だから。慣れれば面白い奴だぞ？）」
「（…へ、へえ）」

なんだかんで、1―？ - X班の四人が揃った。

生涯を通しての親友ができたことを、ウィリアムはまだ知らない

「こいつらの班長、俺に務まるかなあ？」

第五話 四人が寄れば、1 - ? - X（後書き）

とりあえずここまで更新してみました。

明日からまた、受験戦争に浸からなければいけないのか…。

ちなみに、トランプタワーは私自身の特技であったり。

第六話 光、水を掬（すく）いて <1>

<六>

入団式があるまで新団員は家に帰ってもよかったが、1 - ? - X
班は無欠員だった。

帰る場所がない、というのがウィリアムの理由だったが、他のメンバーが帰らない理由は謎だ。

聞く必要はないと自分に言い聞かせ、ウィリアムは幼稚な好奇心を抑えた。

自分も、なるべくなら聞かれたくない。

両親は亡くなりました、家は焼けました、なんて、口にもしたくない過去なのだから。

「うわああ、ヒマだ！エルよ、何か面白いことしてくれ！」

キュリアスが二段ベッドの下段で言う。上段で読書をしていた、エラールに。

エラールは真剣な声で、

「なんだよ、面白いことって。トランプタワーの秘儀でも伝授してやろうか？」

「——や、それはいい」

キュリアスがしょんぼりと断った。

トランプタワーのことについてエラールに語らせると、終わりが見えないのだ。

つい数日前も、

『いいか、トランプ五十四枚でタワーを作ろうとすると、五段までしか作れないんだ！

これポイントだ！六段に挑戦したならば、カードが三枚足りないという、

うわああああ、あと三枚あれば完成するのにいい的なもどかしさに襲われる！

頂点なしの、不格好な二つ角^{ツインホーン}タワーが完成してしまうからだ！！おとといの十段挑戦には、三セット分のトランプが必要だったわけであつて…』

顔がかつちよいいだけに、不自然にもほどがある光景だった。そんな顔でなに語ってんだコノヤロー、とキュリアスが怒鳴ったのも分かる。

「ヒマだよ…ヒマだ…。何か面白いこと——ッおおそつだ！」

キュリアスが飛び起き、部屋の反対側にあるもう一つの二段ベッドへ跳び寄る。

上段でぼんやりしていたウィリアムは、兎か蛙が近づいて来たような錯覚に囚われた。

「ウィルの弟に会いに行こうぜ！？今すぐに！アポなしで！」

「はああ？」

「行こうぜ？なあ？行こうよ——」

キュリアスはウィリアムの顔を見るためにぴよこぴよこ飛び跳ねている。

——お前は駄々っ子か。

下段で一人チェスをしていたヘルベルトが興味深そうに、

「ウィルに弟？いるのか？」

「ああうん、まあ」

「——東塔アトリエで絵、描いてるんだと！」

「お前なんで知ってr」

「これはもう、行くしかないよな!？」

部屋の反対側でエラールが本を閉じて、

「昼食前にちよろつと行ってみよう。俺も会ってみたいし」

「おお！珍しく俺の意見が通った！」

ヘルベルトがチェス駒を片付け始めた音がする。どうやら彼も行く気だ。

ウィリアムはため息をついて、

「仕方ないな…、お前ら、暴走するなよ…?」

その発言にキュリアスがすかさず、

「いやだな、ウィリー坊やが強がっちゃってる！弟を一週間も放っておいたくせにな！」

一人じゃ東塔に行けなくて、ここ数日悶々としてたんだろうがっ

「！」

——何で知ってる！？

「行こうぜ行こう！道も教えてやるから、しっかり覚えるYO！」

×

空が曇ってきた。風向きが変わって、涼しくなったような気がする。

「…雨だよ…、絶対くるぞぉ…」

キュリアスのつぶやきに、ヘルベルトが応えた。

「城から寮生食堂に向かうとき、濡れるかもな」

「——最悪」

キュリアスがテンションを落とす。お得意のスキップもなくなった。

湿った風が頬をかすめる。

どうやら、ずぶ濡れでの昼食も考慮しなければならないようだ。

双翼寮は城の西に位置しているため、四人は西の小口から城に入った。

東西に長い口の字型をしている四階建ての castell 城は、一階と二階に十字の渡り廊下がある。屋根と柱しかないので、雨の日や風

の日はあまり使えないそうだ。

『（ご先祖様には悪いけど、色々和大失敗しちゃってるんだ、この城！

雨天無視、採光ミス、移動不便の三点セット！眺めはいい！眺めだけはいいい！）』

アランはコツソリそう言っていた。

渡り廊下のために四つに区切られてしまった中庭は春夏秋冬の季節ごとに花が植え分けされていて、8月下旬の今は夏、そして秋の花々が盛りだ。

ウィリアムはシェリダン家の家紋である桔梗ききょうしか認識できなかったが。

一階の渡り廊下を東へ渡りながら、ウィリアムはつぶやいていた。

「庭に出たら、廊下を真っ直ぐ行く……、十字路では曲がらない……」

エラールが言葉を継いで、

「そして城の東小口に突き当たるまで直進だ。そこからカックン右折して階段を上り……」

すれ違つメイドたちが、四人を見てお辞儀をしていく。

身分を示しておくなら、

メイド＜騎士（生徒）＝門番＜騎士（団員）＜貴族＝宮廷魔法使
い＝騎士団団長＜＜王族

という感じだ。

しかし、いくつか年上だろうと判断できる女性から敬われるって
気まずい。

ガキっぽい自分を思って、申し訳なくなってしまいうィリアムだ
った。

同年代らしいメイドもいるが、それはそれで恥ずかしい。

逆に、軍服姿の騎士団員たちを見たら立ち止まって一礼。

貴族っぽい人がいたら、とりあえず一礼。

ご婦人がいたら、必ず一礼。

「…って、立ち止まる頻度多くね!？」

キュリアスが世界の真理に気付いたように叫ぶ。

「…ぜんっぜん進めないな」

ヘルベルトが世界の真理を嘆くようにつぶやく。

「メイドさん達より楽^{ラク}だろう?。」

エラールが世界の真理を悟ったように言う。

ウィリアムには、世界の真理を気にするひまがない。すれ違う人々を目で追っているのだ。

呆れ顔のヘルベルトが言った。

「ウィル、動くものを目印にしてるから迷うんじゃないか？」

「え、マジで??」

「絶対そうだろ。方角オンチなのは生まれつきみたいだけど」

「その、『コイツ救いようがねえな』って言い方やめてくれよ。ちよつとは気にしてるんだ」

「あれ、そりゃ悪かった」

そう言っただけで苦笑いし、ヘルベルトはウィリアムの肩をポンポンと叩いた。

×

黒雲がいよいよ雨を落としそうだと、というときになって、四人はやつとのものでカストル城の三階東廊下を歩いていった。

東廊下のちょうど真ん中あたりで、窓とは反対側の壁に螺旋階段があらわれる。暗がりに沈んだそれは、一見しただけでは存在がわかりにくい。ウィリアムなら、確実に見落としてしまいそうな出で立ちだ。

「こんなところに階段…?」

「さあ上るんだウィル！この上にお前の弟がいるぞ！」

キュリアスに背を押され、ウィリアムは暗い階段スペースに足を踏み入れた。

やたら緊張する。エラールに会ったとき以来だ。

——あああ、一週間も放っておいたから怒ってるだろうなあ……っ！

カッン、カッン、カッン。

小気味よい音が、塔に響く。

全員が階段を上り始めると、音は重なり合って上に昇っていった。

ヒンヤリとしたレンガが外の暑さを防いでくれている。

過ぎしやすい。少なくとも、階段スペースは。

「……なあキュリー、階段……長くね？」

「文句言わずに上った上った！アトリエは五、六階ぐらいの高さにあるんだ！」

「げえ！？グルグルのろのろ、そんなに上るのかよ！？」

「弟君はちゃんと上ってるはずだぞ？」

ウィリアムは顔をしかめて、

「んなわけない。あいつ、運動不足の代名詞みたいなやつだから」

「……っ、弟君ウケるな！なんだそれ！？」

「きつと魔法か何かでパパッと瞬間移動さ……」

「——魔法お！？」

下でヘルベルトとエラールが驚いた声を上げる。

キュリアスは例によって知っていたらしい。へえ、便利だな、と落ち着いている。

少々息が切れてきた。しんどい。扉が見えてきた。もうすぐだ…

——バンッ

注意して見ていた扉が、唐突に開かれた。

第六話 光、水を掬（すく）いて <1>（後書き）

文章がダラダラしているのは、そういう仕様だと思ってください。
r z

伏線ってどうやったら上手く張れるんでしょうかね？

第七話 光、水を掬（すく）いて <2>

<七>

「サリアを……、リグラリア宮廷魔法使いに？」

立ったまま、澄んだテナーでアランが問う。

横の王座には父親が座っているが、思案顔のまま何も言わない。だから息子の自分が出張って聞いたのだ。

「ヴェオ、それって色々と急じゃないか？」

それを聞いて深々と頭を下げたのは、現在の宮廷魔法使い。父親の生まれたときからこの宮廷で重宝されていた人物だ。

国事会議が終わって貴族達が退出するのを見計らい、先の提言をしてきた。

「今すぐにとは申しておりません。ただ私の後継者は決めておかれた方がよろしいかと」

ヴェオラムはスラスラと言い放って、顔を上げた。皺の刻まれた、彫りの深い顔だ。

「私がいつまでも現役でいられるとは限りませぬゆえ……」

アランは思わず笑ってしまふ。

「なに自分を過小評価してるんだよ？五歳年下の騎士団団長なんか、
いつも剣を

振り回してるじゃないか！その上、軍を指揮して、大声あげて、
馬で走り回って…」

ヴェオラムは遠い目で肩をすくめ、

「私は彼のようなタフガイではありませんので」

「うおっ、タフガイとか言っちゃうのか」

「それに、人生五十年の時代です。五十五の私は、生きすぎており
ます」

「別に良いだろ。もっと欲張れよ」

「——ヴェオ、理由はどうでもいい。お前がまだピンピンしている
のは知っている」

アランとヴェオラムのやり取りを眺めていたアレキスが、いきな
り声を発した。

威厳に満ちたスカイブルーの瞳が、細められる。

「ただ、一つ聞いておきたい。…——彼は、『水』なのか？」

「…陛下」

「ただの『水』属性ではなく、『水の精霊師』なのかと聞いている」

ヴェオラムは真剣な表情でアレキスに向かい、深く息を吸った。

「なぜそのような……」。魔法の残り香は確かに『水』でした。
ですが…『水』は大勢いますし、彼はまだ幼すぎます…」

「——今まさに、『光』が『水』を掬^{すく}おうとしていることに気付かぬか？」

声を落とすアレキス。

何かに気付いたように、ハッと口をつぐむヴェオラム。

——静寂。

「……だとしたら少しおかしいですよ、父上」

テナーが響いた。暗い響きを持った、声。

「……一段が抜けています。いきなり二段目……『光 水を掬^{すく}いて』で
すか？」

ヴェオラムが困った様子で、

「殿下も、私が『光の精霊師』だという前提で話を進めるのはお止めください」

「ヴェオラム以上にレベルの高い『光』なんて、世界中どこを探してもいないね」

アランがピシャリと言う。

さきほどまで朗らかに喋っていた少年とは、まるで別人のように。

「第一段『炎の下で』が既に終わっているのか、

もしくはこの状況が二段ではないということになるけど――、

…『水』の現れるタイミングが絶妙すぎる…」

アランはそれからブツブツ何かをつぶやき、急に微笑んで顔を父親に向けた。

スカイブルーの瞳は笑っていない。

気温が、下がった。暗かった空間を照らしていた燭台の灯が一斉に消える。

「――父上、調べものをしてきます。三時からの公務には戻りますので」

笑顔を張り付かせたまま次はヴェオラムの方を向き、

「ヴェオ、調べものの邪魔はしないでくれよ。――したって無駄だから」

そして国事会議の間を去ろうとする。

扉へ向かいながら、場の支配者であるかのように言い放った。

「――サリア・シェリダンの件はしばらく保留。王は手出し無用。リグラリアは待機」

扉の手前で振り返り、一礼する。顔を上げたとき、アランの面影はどこにもなかった。

「——では、また後程」

少年が去ったあと、雨が降り出した。

唇をかんでいたアレキスは、その音で我に返る。

「…ヴェオ、灯りが消えてしまったな。点^つけてくれ」

「陛下…」

「…不甲斐ない。手出し無用、か。——まあそれも…」

アレキスは顔を右手で覆った。ため息が漏れる。

「——息子を入質に取られているなら、仕方ないな——」

第七話 光、水を掬（すく）いて <2>（後書き）

シリアスって、こんなのですかね？

第八話 光、水を掬（すく）いて <3>

<八>

「——兄様!!」

塔に響くボーイソプラノ。

扉を開けて飛び出してきたのは、天使…のような格好をした、弟。格好だけだ。可愛い顔は怒りでフグのように膨らんでいる。

——なんだその、白くてフリフリした衣装。

所々に絵の具が付いているところを見ると、どうやら作業着のようだ。

「何してたの兄様!? 場所がわかんないなら、呼んでくれれば飛んでいったのに!」

文字通り、魔法で「飛んでくる」ことは予想していた。

だから、呼ばなかった。

この弟、野獣達がうじゃうじゃしているところに来させたら危険なのだ。

「ああもう、そんなところでグズグズしてないで早く上ってきて!」

駄々っ子キュリーと同じように、サリアが狭い踊り場で飛び跳ねた。

揺れる。階段が揺れる。やめて、壊れる。兄様、落ちる。

「つてオオ!？」

後ろから小突かれた。

キュリアスだ。満面の笑みのまま言う。

「ウィル? あんな可愛い弟をよく一週間も放っておけたなあ?
これからは禁欲^{スティック}ウィルと呼んでやるよ、喜べ」

駄々っ子キュリーにそう言われて、突き落としてやるつかとさえ思う。

それができなかったのは、下からヘルベルトの声が聞こえたからだ。

「ちょ、ウィルの弟、可愛すぎる」

「おいそこ! いらん発言しない!」

さらに下からエラールが、

「あの子、俺と同じニオイがするぞ!」

「は!?! どこから!?! それは絶対にナイ!?!」

上から声が落ちてきて、

「どうだっていいから早く!?!」

「ああああ」

——兄として、班長としての「威厳」ってどこにあるんだ——!?!?

×

「さあみなさん、入ってください！いつも兄がお世話になってます
」

可愛さ爆発の歓迎に、踊り場一面がメルヘンの世界に変わる。
空気がピンク色になった。雨の音が心なしに遠ざかったように感
じる。

兎とか飛び跳ねてそう、とウィリアムは顔をゆがめた。

「キミ本当にウィルの弟なのか！？雰囲気違いすぎるっ！」
「抜け駆けするなよエルの馬鹿！俺キュリアス！キューリーでいいぞ
！」

「ごめんなー、変なのばっかで。あいつら放っておいていいから」
「一人だけまともなヤツ演じるのやめろよヘル！主に変人なのはエ
ルだ！」

「ちよ、俺の評価下げるのやめろ！この騒がしい女の子はスルーで
いいからな！」

「俺は男だああー！」

「サリアから離れるドアホウが！！暴走すんなって言っただろう！？」

「キミの兄さんは短気だな？」

「寮に帰れキュウリ！！」

「誰がキュウリじゃ！！」

「兄様、お友達の悪口はいけない！」

「違っぜ、よく見るサリア！お友達じゃなくて野獣だから！」

「あれあれ？ウィル、夕日に誓った友情を忘れたのか？」

「そんなん誓った覚えなし！」

——なんでこんなに狭い踊り場で、足踏みなんだよおおお！！？

×

金髪の少年が冷たく微笑んでいる。

カストル城の大図書館に、暗く沈んだその姿。
ふと見ただけでは、それがこの国の王子であることは分らない。

少年がいるのは『伝説・伝承』の棚。人は滅多に近寄ることがない。

その証拠に、本棚に隙間無く詰められた本には分厚い埃がかかっている。

唯一、少年が開いている黒い本だけを除いて…。

「なありグラリア…、どこかで『王子^{わたし}』の声は聞いているんだろう？
今から東塔で待ち合わせと行こうじゃないか。「終わり」を動かしてやる…」

それから少年は薄く、薄く笑って、

「…『封印の剣族』に『水の精霊師』。ジューンは面白い兄弟を得た…。」

ジュライには悪いが、もうシェリダン兄弟を手放す気はない」

誰に言つでもなく一人つぶやいて、少年は暗い外を見やった。

西の、彼方。ジューンの兄弟国ジュライ。

「リーズ、お前がうかうかしているせいで、世界に歪みがでてしまった。」

やる気がないなら、私に全て任せておけ。そうだな、あと二代繋いだら……—」

少年はさらに切れるような笑みを浮かべて、

「——そのときには容赦なく、この世界を終わらせてやるっ」

第九話

光、水を掬（すく）いて < 4 >（前書き）

第九話 光、水を掬（すく）いて <4>

<九>

——それは、数年前からよく起こっていたこと。

気付いたら見覚えのないところに居たり、身に覚えのないことをしていたり。

今日もそうだ。さっきまで国会会議の間にいたはずなのに、気付けばそこは大図書館。

特に本を開いていたわけでもなく、勉強をしていたわけでもない。

そんなことが何回か繰り返されるうち、慣れてしまった。

初めは不安に駆られたが、主治医に相談しても原因は不明のまま。

父に心配をかけるわけにもいかず、ヴェオラムの手を煩わせるのも気が引けた。

世継ぎとして、国民を不安に陥れるのはさらにバッドな気がする。

『アラン王子、ご乱心か!?』なんて新聞の一面トップは遠慮したい。

「……こういうのを夢遊病っていうのか……。あれ、白昼夢だっけ……。ん、どっちも違うな……。トランス……。そう、トランスだ……!」

まあ、いま問題なのは病名じゃないんだけど。

x

——歩く。

目的は分からない。ただ、歩く。

二階北西にあった大図書館を出て、東西にのびる渡り廊下へ来た。自分の足がどこへ向かおうとしているのか、サッパリ見当が付かない。

「…いやいや、どう考えても濡れるだろ…」

装飾柱だけで壁がない渡り廊下はすでに水浸しだ。

墨をぶちまけたようにドス黒い空からは、雨が斜めに落ちてくる。

国事会議に出席してただけあって上等な衣装を着けている身としては、百二十パーセント通りたくないルートである。

しかし自らの意思に反して、これでいいのだ、というように足が動く。

「…ちょ…。この胸飾り、お気に入りなんですけど…」

生ぬるい風に混じって大粒の水滴が頬を打つ。

さっそく、自慢の金髪から水が滴り落ちてきた。

ひたすら暗い足下で、水がはねている…。

「俺の靴…、…お気に入りの革靴…」

ズボンの色に合わせた黒い革靴に、無情にも汚れた水が染み込む。

——冗談。

「最終手段はエリオルに診てもらうしか無いな…。

でも『王子がご乱心なのだよ』とか診断されたら、俺終わりだあ

…」

カストル城は東西に長い長方形だ。つまり、まだ渡り廊下が終わらない。

「なんで正方形に wasn't たんですか、ご先祖様…」

上等な白いシャツがぐしょぐしょだ。ひどい。これはない。
メイドに見つかったら、騒がれること間違いなし。

足は止まる気配がなく（もちろん今停止されても困るが）、東へ向かっている。

そう、今日は特別おかしな日なのだ。

何をやってたか思い出せないのには慣れた。慣れざるを得なかった。

しかし今は、それに加えて身体が言うことをきかない。

「…何がしたいの、このからだ…」

雨の中を独り行進しているとは言っても、見た目はぜんぜん凛々

しくない。

これじゃ、ただの気が触れたパツパラパー王子じゃん。

エッフェルの鬼寮長にバレようものなら、一ヶ月間ニンジン料理の刑だな。

『何をしている馬鹿者。権力の重みに屈して、ついに発狂したか…?』とか言つて。

「無理、無理、ニンジンだけは勘弁…。あれは食べちゃいけないモノだ…」

うわ、鳥肌っ。ニンジンの威力、半端ねえ。

まわりつくような風が気持ち悪い。

全身びちょ濡れのせいで、テンションが急降下だ。

「なんだよ…この操り人形状態…」

——情けないって、こういうのを言うんだろっな。

第十話 光、水を掬（すく）いて <5>

<十>

「こんなところで立ち話もなんですから、どうぞ、部屋の中へ！」
無邪気な様子でサリアはそう言い、四人を踊り場から部屋へ案内した。

「僕の生活スペースと作業場が一緒になってるので、少しゴタゴタしてますけど…」

サリアが恥ずかしそうに笑った。青い瞳が細められ、はにかんだ笑顔に華を添える。

天真爛漫とは、彼のためにある言葉のように思えた。

キュリアスがこっそりとウィリアムに耳打ちして、

「（ウィルの可愛い要素、全部弟に持って行かれたんじゃない？）」
「（いや余計なお世話だし）」

ウィリアムが虫を払うかのような仕草でもって、キュリアスを制する。

サリアが開けた扉の奥には、何とも可愛らしい一室が。
部屋自体は木を使った普通のものだが、家具のサイズがやや小さめなのだ。

家具の全てが真新しいので、特注なのだろう。

ウィリアムは、国王がサリアを実年齢以上に幼く見ていたのだと思った。

ベッドなんか、ヘルベルトが寝たら太腿より下がはみ出しそうなくらいだ。

可愛いのはそれだけではなかった。

なんと部屋全体が、ほぼ白色で統一されている。

布団やカーテンは、よく見たら「ああ、色付いてたの」ぐらいに色が薄いもので。

「ここは天使の部屋です」と言われても、信じて疑わないだろう。

サリアは作業着の色も手伝って、完全にその天使部屋と同化していた。

「ようこそ！リニューアルされた東塔アトリエへ！」

サリアが後ろで手を組んで言った。ちょっと背伸び気味だ。

無意識に可愛い動きをしまつらしい。ウィリアムは気が気でなかった。

「リニューアル？」

ヘルベルトが問い、国内出身のキュリアスが答える。

「カストル城にある四つの塔……——つまり東塔アトリエ、西塔天文台、

南塔音楽室、北塔研究室は、それぞれ宮廷画家とか星読みとか、専門の役職に

就いた者だけが管理できるんだ。それまでは無人で役目無しの場所なわけさ。

前任者がいたときのまま部屋が残されてたってことだろ？」

「はい、そうです！以前ここに住んでいらっしやったのは女性だったそうなので、

ちよつと部屋の内装を改造してもらいました！」

ウィリアムは、この有様のどこが「ちよつと」か、と言いたい気持ちを抑えた。

これまた国内出身のエラールが思いついたように、

「そう言えば塔に誰かが入るのつて、久しいな。何年ぶりだ？
アセス

宮廷画家はしばらくいなかったし、他の塔は未だ無人のまま…。

『アルゼの戦い』以来の大拔擢じゃないか」

キュリアスが「確かにそうだな」とうなずくを見て、ウィリアムは口を開いた。

「…大拔擢つて…。ただの画家だろ。

騎士団団長に異例の昇進とかじゃないんだから、そんな大げさに言わなくても…」

「——ふふ、弟の才能に嫉妬すんな」

腕組みしながら、キュリアスが不敵な笑みを浮かべた。

「ウィル、お前さ、『宮廷^{なんたら}』の権力なめんなよ？」

「はあ？まさか政治の実権握ってるとか？」

サリアの指示に従って、ウィリアムが丸椅子、他三人がベッドに落ち着く。

ふかふかのベッドに座ったキュリアスは半ば楽しそうに、

「ふふん、残念ながらそこまでの権力はないが…」。

『宮廷なんたら』は王族居住区への出入りが自由なんだ。

つまり、どういうことか分かるか？頼み事は王族に直接言えばいいんだよ！

天文台に最新の観測道具を入れたければ王様にお願いすればいいし、

音楽室に最高級ピアノを入れたければそう言えばいい！なんて素敵なんだ！」

「——ああ、そりやすごいな」

ウィリアムは、弟がそんな「お願い」をしているとは到底思えなかった。

——だって、俺の弟だもんな？？

「ボクも王様にお願ひしましたよー。一生分の画材…」
「ゲボアッ」

ウィリアムが見えない何かに貫かれる。それこそ、サリアの言葉が槍となったようだ。

背もたれ無し的小さな椅子から転げそうになりながら、

「…サ…サリア…？王様に何を頼んだって？」

「え？一生分の画材。スケッチブックとかカンバスとか切らしたく

ないし……」

「なんて畏れ多いコトをッッッ」

ベッドの三人組が腹を抱えて笑うのを見ながら、ウィリアムは独り頭を抱えるのだった。

第十一話 光、水を掬（すく）いて < 6 >（前書き）

わけわかない会話ばかりしてますけど、
ずーっと先の方に繋がる重要ポイントなので。

数十話先まで読んでいけば…意味が分かるかと。

第十一話 光、水を掬（すく）いて < 6 >

< 十一 >

「お待ち…してありました…」

そう言うしかない。余計なことと言わない方がいいだろう。

「待ってた？俺を？」

全身ぐっしよりの王子は、緋色の絨毯の上に足跡を残しつつ言葉を吐き出す。

近づいてくる様子からは、国事会議の間で見せたような独裁的態度は見られない。

ただ、どうにも機嫌が悪そうだ。

「なんだ…俺をここに呼んだのはヴェオか…。
ちよつとは誘導ルートを考えてくれよ…。びしょ濡れだぞ…？」

明らかに、何らかの誤解が生じている。

私を東塔^{（こゝろ）}に呼んだのはそっちだろうと言いたいが、権力的にそうもいかない。

どうやら真正銘、本物のアラン王子のようだ。

とすると、私が魔法で王子を東塔に呼びつけたということになるのか。

——そんな誘導魔法、存在しませんか。

「で…？東塔に呼んだってコトは、リグラリア候補について父上の許可が？」

「……………」

王子が水をポタポタ落としつつ問いかける。拭うのはとっくの昔に諦めていたらしい。

父君はあなたの命令で、手出し無用のはず——
とか言つとややこしくなるから、話を合わせておくか。

「はい…。とりあえず本人に意思確認を…」

リグラリア
「宮廷魔法使いと宮廷画家の掛け持ちかあ…」

もちろん前例はない。

だがこの国は前例に囚われるような国ではないので、貴族の反発も少ないだろう。

一番問題なのは…

「…ウィルが何て言うかな…」

「…そこなのです、殿下。ちょうど今、兄の方もアトリエに居るようで…」

弟思いの兄が、首を縦に振るか——それが一番の問題だ。

アセス

宮廷画家の衣装は純白の作業着。リグラリア

宮廷魔法使いの衣装は漆黒のローブ。対照的すぎる役職であるだけに、兄としては反対したところだろう。

それにリグラリアは、戦場に出ることも避けられない。

弟のために自分が兵士となることを志願した兄だ。
きつと、何が何でも反対してくる。

あの少年の反対を押し切ってまで、サリア・シェリダンを宮廷魔法使いに

する必要があるのだろうか。私は一体、何に拘っているんだ……

「――『光 水を掬いて』」

冷水を浴びせられたような感覚。

冴え冴えとした王子の笑みが殺気すら発している。

国民を魅了する王族的美貌が、今はナイフのようだ。

「……グズグズしてないで、早く行こうか。リグラリア……」

この状態の時は決まって、アラン・ジェミニの意味はない。

本人には、この状態になっていた記憶すらない。

「……最近、『表』に出ていらっしやる頻度が増えたようですが？」
「お前も感じているとおり、『終わり』の足音が聞こえてくるからな」

ここに現れたときより大人びた表情をして、王子は語る。

「そう心配そうな顔をするな…。シェリダン兄弟との交渉にあたっては

ちゃんとアラン・ジェミニを返してやる。

私では『水』に王子の異変を気付かれるだろうし…」

王子は含み笑いをして、私に一瞥をくれた。

「お前が三十年前、当時の王の中にいた私の存在を見抜いたように」
可笑しくてたまらないとも言つように、王子は含み笑いを続ける。

「決心がつかないのか、リグラリア。何を躊躇^{ためら}う？

予言に臆したわけでもあるまい。私が推測するに、第一段は既に終わっているぞ。

お前が『水』を掬いたと思ったのだ。これは動かしがたい事実だな？

『炎』と『氷』のように、お前達も自分の意思で行動してみる。それが予言に繋がっていくなら、二人とも精霊師であるのは間違いない。

運命に、抗うな。無駄な足掻きは世界を歪ませることになる。

さあ、二段を始めよう——」

言うだけ言って、王子は螺旋階段へ向かう。一分の隙もない、その動き。

私は勇気を振り絞って、

「…ですから、私は『光の精霊師』などではなく…」

「——え？何か言ったか？」

螺旋階段の手前からこちらを窺うのは、アラン・ジェミニだった。水を滴らせ、素っ頓狂な顔でもう一度口を開く。

「あれ、行かないことにしたのか？そう言えば何の話をしてたっけな？」

ああ、ウィルのことか。父上の命令なら仕方ないから、ウィルは俺に任せろ。

ヴェオはサリアに直接交渉、って戦略でいいか……」

カンカンと階段を上る音と、王子の声だけが聞こえてくる。

「うわ…ウィルを口説くの、なんか自信ないな…。絶対に一波乱あるぞ…」

凍っていた空気が解かされたような気がして、私は静かに足を踏み出した。

第十一話 光、水を掬（すく）いて < 6 >（後書き）

アラン王子、暴走してますな。

第十二話 光、水を掬（すく）いて <7>（前書き）

今回のメニュー

会話：8割

暴走度：高め

シリアス要素：有るようで無い

意味不明な会話が苦手な方はブラウザバック
↑

第十二話 光、水を掬（すく）いて <7>

<十二>

『リグラリア 宮廷魔法使い』

それは国権の第三位ナンバースリーにあたり、王と騎士団団長に次ぐ役職。貴族でさえ、リグラリアの行動においそれと口出しすることは出来ない。

三十年前に当時のジューン国王アルフォート・ジェミニに見出され、ヴェオラムはその地位に就いた。

権力が欲しかったのではない。そんなものに、ヴェオラムは興味がなかった。

ただ、「力」が欲しかった。友人を救う力が。

結果として、ヴェオラムはその友人から命を狙われることとなる。

「作戦を言うぞ……。いいか、あくまで<候補>だからな。思わず<後継者>とか

口走るなよ。ウィルが絶対につく掛かってくるだろうから……」

螺旋階段を先行するアランが静かにつぶやく。

二人は無意識に足音を忍ばせており、雨が塔を叩く音だけが響いている。

「しっかし、ヴェオも物好きだなあ…。なにも、あんなに小さな子をリグラリアに

することないだろ？成長して大人になったとしても、はたして魔法で人を傷つけ

られるようになるんだろうか…？」

「――『水』属性の彼に期待しているのは癒しの力です。人を殺める術を、

教える気は毛頭ありません。前線に出そうとも思っておりません。後方で、軍医達の手助けになればと思ひまして…」

「おいおい、それ早く言おうよ。てっきり俺は、サリアに人殺しをさせるとばかり…」

「申し上げておきますが、『光』や『水』は攻撃力に欠けますので殿下のお考えになるような働きは期待できません。

殿下が戦場に赴かれる際は、そのことを十分考慮なさってください」

「…あれ？でもヴェオは『アルゼ』で最前線の守備に就いてたんだろ？」

父上はどうしてヴェオをそんなところに？」

「あれはマーチ王国の宮廷魔法使い、ラツェル・クロウを攻略するためです。

彼は当代屈指の『闇』使いですので…」

「ああなるほど…。『光』と『闇』の相殺効果が…――」

言い終わらないうちにアランが立ち止まった。
そして強張った表情でゆっくり振り向いて、

「——まさかヴェオ、『炎』と『水』の相殺効果を狙ってるんじゃないだろうな…？」

「……………」

「待て、待て待て。それはかなり酷だぞ？ いじめに近い！
サリアとあのオークレッド・シャドナを戦わせるのか！？」

「…声を落としてください。誰も戦わせるなどは申しておりません。
ん。

ただ、奴の魔法は『水』に一切効かないので…」

「だからって、サリアはない！
あいつはヴェオの友人だったんだろ！？ 自分で何とかしろよ！」

「私が彼の前に顔を出すと、彼は問答無用で私を殺そうとしてきます。
す。

おおかた、＜ジューンのリグラリアを殺す＞という契約魔法を
デイクセント政府に結ばされたのでしょうか。気の毒な奴です。
私を殺しても、『ジューンのリグラリア』である者を殺し続けなければ

いけないのですから。そうになると、私の後継者はもっと気の毒です。
す。

しかし『水』なら、少なくとも魔法で殺される心配はない…。
そうか…、だから私は『水』に拘っていたんだ…」

「勝手に悟りの境地に至るな！俺を置いていくな！

いやだ！俺、ウィルの説得パスする！『危険すぎる役職にサリアを就かせるから、

そのための覚悟よろしくな！』とか死んでも言えるわけないじゃん！？

ちょ、一度引き返そうぜ！ほら、早く下りろ！」

「そのように露骨な物言いをするものではありません。貴方はこの国の王子……」

「エッフェルみたいな説教はやめてくれよ！？聞きたくない！」

「ハア……。エフが聞いたら悲しみますぞ……」

「あの『賤の鬼』が悲しむだって！？んなことがあったら明日は槍が降る——」

「——アラン様っ！」

王子の表情が凍り付く。塔に響いた、ボーイソプラノのせいだ。

ぜんまい仕掛けの人形の如く、アランは機械的動作でアトリエを見上げた。

ヴェオラムも冷や汗をかきつつ王子にならう。

「どうして濡れているんですか！今、タオルをお持ちしますね！あ、それから王妃様の絵は今日の午後に納品のはずでしたが——

「？」

サリアの可愛い声が途切れて、深青の瞳がヴェオラムをとらえる。

「…あれ？そちらの方は確か…」

アランが拳を握りながら、ヴェオラムに語りかける。

「（…ヴェオが引き返さなかったせいで、見つかったじゃん！？）」

「（仕方ありません…。殿下、腹をくくってください）」

「（俺さ、嵐はなるべく避ける派なんですけど！？）」

「（なんですかそれは？早く上らねば怪しまれますぞ）」

「（雨風ならまだしも、ウィルの雷が落ちたら俺死ぬかも！？）」

「（側にハイレベルの『水』がいるので、滅多なことでは死んだりしないでしょう）」

「（そういう問題じゃない！！精神的ダメージが致命的だってことだ！！）」

目の前に続く螺旋階段が、アランには処刑台へ上るそのように思えるのだった。

第十二話 光、水を掬（すく）いて <7>（後書き）

この二人、こんなに会話ばかりさせるはずじゃなかった…orz

第十三話 光、水を掬（すく）いて < 8・上 >（前書き）

< 今回の登場人物 >

王子 魔法使い 天使

兄（主人公・影薄い）と少年たち（ほぼ空気状態）

< 今回のメニュー >

謎は一切解明しないよシリーズ完結（前半）

シリアス要素：無いようであつと有る

第三者視点なので、誰が何考えてるか全くわかりません
（↓そこがミソだったりする。そしてさらなる謎を生む）

第十三話 光、水を掬（すく）いて < 8・上 >

< 十三 >

風の音。雨の匂い。カオス 異様な空気。

宮廷魔法使いを前にした1 - ? - X班員は、その圧倒的な威圧感に黙りこくる。

険しい…と言うよりも、何か苦いものでも食べたのだろうかと思わせる魔法使いの顔が十六歳の少年たちを大人しくさせているのだ。

その隣でタオルを持った天使が世話を焼くのは、この国の王子のハズ。

国民から愛されるその王子がなぜ着衣水泳したかのようにグッシヨリなのかは、誰にも問いただすことが出来ない。

僕の出で立ちに触れないでください、と本人の顔が言っているから。

ご想像いただけるだろうか、この不自然な空間を。
この、悲惨な人口密度を。

「ごめんなさい……なんかスペースが足りなくて…」

天使が王子を拭きながら、気まずそうに言う。

本当にそうである。誰も何も言わないが、この部屋は今、狭い。

大人が六人。天使が一人。

この塔は画家のためのアトリエであり、決してパーティー会場ではない。

「…や、やだなサリア、気にするなよ…」

俺とヴェオが、『突発的訪問がしたい！』っていう衝動に駆られただけだから…」

若干裏返る、王子の声。

引きつる、王族スマイル。

国民からの支持率低下も避けられないその醜態。

「突発的訪問？それはまたどうして？」

無邪気ながらも先の尖った、ストレートかつ凶器級の問いかけ。

と言っても、その斬撃を食らったのは王子と魔法使いだけなのだが。

「どっ、どっ、どうして…！？え、えと…どうして…だっけな、ヴェオ？」

横にいた魔法使いに向かって、王子が焦りながら努めて明るく言った。

暗に、「お前がこの件の言い出しっぺだろ！説明しろ！」と伝えているのだ。

王子本人は気付いていないが、これはこの空間においてかなりの無茶振りである。

魔法使いはいきなり振られたことに動揺したのだろう、
ビクついたのちに小さい椅子から勢いよく立ち上がった。

「——どうしてなのか分からない、それが突発的訪問というものだ」

沈黙

まるでむせび泣くかのように、両手で顔を覆う王子。

自分の発言に、みるみる青ざめていく魔法使い。

納得した様子で微笑む天使。

頭にクエスチョンマークを装着し始めた少年たち。

「…あ、じゃあ、アポ無し訪問がしてみたかったですね？兄様たちもなんですよ！」

ニコニコ笑いながら、天使が両手を叩く。無邪気極まりない。

この天使、空気は読めるが対処の仕方を知らないらしい。

そこで身につけたのが、A K Y——A（敢えて）K（空気）Y（読まない）の術だった。

兄が何か言いたそうな顔をしたが、混乱した空気に気圧されて発言をやめる。

「うわあ、二組がかぶっちゃったんだ…。どうしたらいいかなあ…？」

そう言いつつ、天使は東窓のそばに座っていた兄に視線を送る。こちらで暗に、「ねえ、すごく狭いんだけど」と伝えているようだ。

視線を受けた兄は、やや間をおいてからベッドの上の班員に向かって、

「…じゃあ…俺たちはこの辺で帰るか。もう昼食の時間だし」

この兄、空気は読めるし対処も無難である。

しかしそれが常にいい結果を招くとは限らない。

今回の場合もそうだ。

なぜなら魔法使いに続いて王子まで立ち上がって、

「——ま、待つんだウィル！帰るな！ここは通さないぞ！」

とか、扉の前で両手広げて叫ぶから。しかも、かなり必死になつて。

「え、いや、でも俺たちがここに居たら狭い——」

「——俺はウィリアム・シェリダンに話があるんだッ！」

王子、なにやら覚悟を決めたご様子。

しかし会話の流れから考えるとおかしい発言だ。彼は天使に、会いに来たはずで。

それに気付いた兄は怪訝そうな顔をして、

「は？サリアに用があるんだろ？？」

「俺はお前に用がある！頼むから俺の決心をくじかないでくれ！」

「????…大丈夫か、アラン…」

兄は気の毒な者を見るように、王子を見つめる。本来はすごく失礼な行為である。

だが王子は気にしない。ウィルの表情が怒りでないならそれでいい、という感じだ。

王子の真剣な様子を見て、魔法使いが一步踏み出す。

ひたすら長い呪文を唱える直前、というわけでもないのに、魔法使いは深く息を吸った。

そして老成した深い声で、

「…サリア・シェリダン、そなたを私の弟子にしたいのだが」

おめでとう！ちゃんと言えたね！

王子が母親のような眼差しでもって、魔法使いを賞賛する。

「僕を…弟子に？魔法の？」

「——そうだ。そなたの使う魔法、見たところ自己流のようだ？」

「はい…。物心ついたときから適当に使ってました…」

兄が焦ったように何か言いかけ、やめる。

そのわずかな行動にも、王子は冷や冷やだ。

「そなた、猫と話が出来たりしないか？」

「できますよ」

「猫は好きか？」

「好きですよ」

「猫が欲しくはないか？」

「すつごく欲しいです」

「私の飼い猫が子どもを産んだのだ。そなた一匹、引き取らぬか？」
「え！？いいんですか!？」

「黒猫なのだが」

「黒いの大好きです！欲しいです！！」

「なら、そのうちここに遣わそう」

「ありがとうございます！」

脱線気味に、勝手に進んでいく会話。

入り込めない16歳の少年たち。

拍子抜けしている兄。その兄から目を離せない王子。

「そう言えばそなた、自分の能力がどの程度のレベルか知っているか？」

「…いいえ」

「そこのケチな呪術とは比べものにならんほどに、ハイレベルなのだが」

「ええ？まさか…」

「謁見の間で初めて会ったとき移動魔法を使っただろう。あれはかなり高度な技なのだ」

「あれが…？」

「そしてそなた、癒しの魔法が一番得意なのでは？」

「え、わかるんですか？」

「魔色が薄い青だったのな…。そなたは『水』属性の魔法使いだ」
「…属性？『水』？あなたは何なのですか？」

「…私か？私は『光』だ。探索魔法を得意とする」

「『光』…！え、その属性って、どうやって決まるんですか？」

「その身に宿る精霊で、な。そなたには水の精霊オンディーヌが宿っている。

故に、そなたは『水』の能力に秀でるのだ。つまり、癒しの力なわけだが」

「精霊が宿る！？じゃあ、あなたには光の精霊が？」

「まあ、そういうことだろうな」

「すごい！すごいです！」

「そなたがハイレベルだという証拠に挙げた移動魔法だが、あれは風シルフィードの精霊の力による。

レベルが上がれば、自分の属性以外の精霊も使えるのだ」

「そうなんですか！？僕、何も知らないまま使ってた…」

「私の弟子となるなら、他にも色々教えよう。新しい技も、魔力の制御も。」

魔法…——精霊の力は、使い方を誤ると己の身を滅ぼすことに繋がるからな…」

「…うーん…」

やっと、ここでやっと、天使は兄の顔色を窺い始めた。

恐る恐る、とでも言うのだろうか。顔を伏せた状態で、目だけを兄に向ける。

兄弟の正しい力関係が、ようやく見えた瞬間だった。

「…に、兄様？…ウィル兄様はどう思う？」

両手で白いタオルを握りしめて、天使が無駄に可愛さを込めた声で言う。

兄は妙に感情を殺した話し方で、

「サリアはどうしたい？」

「兄様…、兄様は反対なんだね」

「サリアの将来に関わる大事なことだ。サリアが決めればいい」

それから兄は深青の瞳に力を込めた。

「父上も、きっと反対しただろうけど」

王子が場の中央から顔を背けて、声は出さずに口だけを動かしている。

やばい、やばい、やばい、——と。

「よく考えてみるサリア。自分のことを知るのは大切かもしれないけど…」

王子の緊張は、最高潮に達する。

「——お前は4年前を、忘れてないよな？危ない目に遭ったろ？父上が心配していたとおり、魔法が使えるってバレたら利用されるんだぞ？」

「兄様、利用だなんて、そんな…」

「現に今、わざわざ王子と宮廷魔法使いが訪ねてきているじゃない

「か
…兄様…！」

天使が何かに気付いたように声を荒げた。

第十三話 光、水を掬（すく）いて < 8・上 >（後書き）

< 8・下 > 予告

「――陛下を、試したの？ 僕を謁見の間に飛ばせたのはそのため？」

第十四話 光、水を掬（すく）いて < 8・下 >（前書き）

いつもよりちょっと長いかも。

第十四話 光、水を掬（すく）いて < 8・下 >

天使が何かに気付いたように声を荒げた。

「――陛下を、試したの？ 僕を謁見の間に飛ばせたのはそのため？」

兄が沈黙という手段で肯定を示す。

それを感じ取った王子は顔面蒼白となって何かつぶやき、魔法使いは兄の内面を見透かそうとするように目を細めた。

「……ひどいよ……にいさま……！」

天使が潤んだ瞳で兄を見つめる。

兄は悪びれた様子もなく、飄々と言つてのけた。

「……ひどい？ 何が？ ひどいのはお前を利用しようとする人間だ。^{やつら}見てみる。お前の能力に目を付けて、やっぱり接触してきた」

「――陛下は僕のこと利用したいなんて思つてないよ――！」

「……さて、どうだか……」

兄は冷めきつた目で王子と魔法使いを見遣り、二人に向かって口を開いた。

「……弟子と言えば聞こえはいいですけど、……つまりは宮廷魔法使いの後継者に、」

「ってことですよ？違いますか？」

禁止ワードをあつさり出されてしまったのが衝撃となって、王子の顔が強張る。

そんな王子を庇うように魔法使いが歩み出した。

「——いかにも。いずれ私のあとを継いでもらいたいと思っている」

兄も天使を庇うように歩み出て、

「言っておきますけど、こいつ、虫一匹殺せませんよ。戦場では全く役に立たないです」

「別に殺しは期待していないし、私もそのような仕事は任されない」

「へえ……。じゃあ、あなたは何を任されるんですか？」

「兵の位置と規模の把握、軍に紛れるスパイの発見、それと行方不明者の搜索だ」

「あなたも利用されているクチですか」

天使が非難の声を上げながら兄の腕を掴むが、あつさり払われる。

それを見た魔法使いは目を細めたまま語気を強め、

「そなたの言う『利用される』の定義は何だ？

騎士団ではその労力を『利用される』のではないのか？それは別に構わないと？」

魔法使いの視線には睨みすらもっている。

対する兄も負けてはいない。

「騎士団では自主的に力を提供しますから、それは『利用される』には含まれない…。」

俺が言いたいのは、本人が望まない役職に無理やり就かせるな、ということですよ」

しばらくの沈黙ののちに、天使がまた兄の腕を掴んだ。
今度は、ゆっくりと。

「…ねえ兄様、ぼく、この人の後継者になりたくないなんて言っていないよ」

「――」

兄が振り向く。さっきと違って、掴まれた腕を振り払おうとはしない。

しかし驚きと失望の入り交じった表情を浮かべ、

「…サリア、自分が何を言ってるか…、ちゃんとわかってるのか？」

その声は育ち盛りの少年というより働き疲れた大人のようだ。
青い瞳が翳り、端正な顔が曇っていく。

「少なくとも、断ることしか頭がない兄様よりはわかってる」

傷ついた顔でそう言うと、天使は兄の横を抜けて魔法使いの前に出た。

向かい合う黒と白の衣装。対照的であり、それだからこそ一揃いのような印象も受ける。

雨の足音がしばらく重いステップを踏んだあと、天使は顔を上げた。

すぎるようなその顔に、魔法使いの硬かった表情がゆるむ。

「…僕の魔法は、誰かの役に立つことができるでしょうか？」

魔法使いは静かに間を置いて、穏やかな声でももむろに答えた。

「——ああ。私はそう確信している」

天使はずっと握っていたタオルをさらに強く握りしめ、おぼつかない声を震わせる。

「…僕の魔法が、誰かを傷つけたりすることはありますか？」

顔を伏せたところを見るに、天使にとっては答えを聞くのが恐い問いらしい。

天使が抱えていた一番の不安要素、とでも言おうか。

魔法使いは迷子を見つけた時のように、天使と目線を合わせるため膝をついた。

「…そなたの魔法、人を癒しこそすれ傷つけることはない。安心しなさい」

「…ほ、んとうに？」

「ああ」

兄がため息をついて、自分の丸椅子にもどった。
機嫌が悪いときには無意識にふくれ面になるようで、その姿には
愛嬌もなくてはなない。

天使は魔法使いと向き合ったまま、芯のある声で言った。

「——兄様、僕この人の弟子になりたい」

兄は天使から目を逸らす。そしていじけた声で、

「……まだサリアが何させられるか、聞いてない」

どうやら魔法使いに言っているらしい。
だが魔法使いの代わりに王子が唇を噛みながら前に出た。

「サリアが戦場に出ることになった場合——つまり俺が王であると
きだろうけど——、

後方で軍医たちの手伝いをしてもらおうと思っている。前線には、
出さない」

「……それって約束できるのか？」

「ああ、全国民に誓った方がいい」

さすがは勇氣アラシの神の名を持つ王子である。

引き締めた表情から、未来の国王が見えるような気がした。

「それと一つ言っておくことがあって……——」

この王子、どこまで覚悟が深いのだろう。

ただの少年と言っには無理があるほど、勇敢な発言が飛び出た。

「デイクセント王国のオークレッド・シャドナって知っ——」

——ガタツツ

ベッドの上にいた少年たちが激しく音を立てながら後退した。
どの顔も怯えおびきっている。特に、スパイ見習いの反応は顕著だ。

「…え？」

それを見た兄は純粋な疑問の声を出す。沸々とした怒りも、どこかへ飛んだようで。

「っあ……、悪いアラン、その人って有名人？」

「…もしかして知らない？」

これには王子も気抜けした声になる。すぐさま天使に顔を向けて、

「…サリアは知ってるよな？あいつ、有名人とかいうレベルじゃないし」

天使は可愛らしくうなずく。

「——はい。名前だけは」

「ええ??」

「父様の心を読んじやったときに、その人のこと考えてました…。
恐い人なんですっけ？」

「恐い？あああ、恐いとかって表現できる次元でもないんだ…」

王子は情けない表情になってしまい、少し考えてから口を開いた。

「…通称は『紅い剣』^(あか)。ヴェオの元友人にして地上最強の魔法使い
なわけで…」

「——地上最強お？」

「ウィル、信じてないだろ…」

立ち上がった魔法使いが、苦々しい表情で続ける。

「ジャンニアル王国の首都アルゼを灰にしたのは、あいつなのだ。
そして燃やすことはなくても、あいつの前では人の命など雑草の
ように無力…。

地上最悪は『闇使い』であるマーチ王国のラツェル・クロウ、
地上最強は『炎使い』であるオークレッド・シャドナ。これは一
般常識だ」

兄が首を傾げて、

「…初耳です。そのラなんとかって人も知りません」

魔法使いは右手で顔を覆い、深いため息をついた。

「——何を血迷ったか、ジョルジュのやつ…。息子に知識を与えな
かったのか…？」

少しのあいだ誰も発言せず、重々しい空気が立ち込める。
しかし兄が唐突に、王子の顔を見つめた。

「——で、その地上最強がどうしたって？」

「……ああ、そうそう……」

王子は一呼吸置いて、実に重苦しい表情を浮かべた。

「……そいつが宮廷魔法使いの命を狙ってくる可能性、高いんだ……」

兄はかなり大きな音を立てて立ち上がり、ずんずん歩み出て弟を引き寄せた。

「……じゃあ、やっぱり弟子入りの話はナシってことで」

「いや、ちよつとそれは困るなあ——」

「サリアに死ねって言うてるのか？」

「……話を聞いてくれ！」

王子は天使を引き戻すようにしながら言う。

戸惑う天使。ひたすら可愛い。

兄との対決を諦めた王子は、魔法使いの背中を叩いて高らかに発表する。

「——俺は門外漢なんで、あとは専門家からの説明をどうぞ！」

途端に魔法使いが顔をしかめる。

「殿下、それは途中放棄というのでは？」

「えへえ？宇宙ホウキ？なんだよ、その凄そうなアイテム。飛べそうだなあ！」

「…ふう…」

色々と悟ったのだろう、魔法使いは力が抜けたように語り出した。

「オークレッドが持つ『炎』の力…。唯一あいつの魔法が効かないのは『水』なのだ。

だから少なくとも『水』属性の者が、あいつの魔法で死ぬことはない」

天使が「へえ！」と感心する。

兄はまだ天使を放さない。それどころか魔法使いを睨んで、

「魔法で、死ぬことはない？魔法以外だったらジ・エンドなわけですか？」

「その可能性は否めない」

魔法使いが重々しく答えた。

兄は笑みすら浮かべながら席に戻る。

あきれた、そんな感じた。

「——どうする、サリア？もう好きにしていいいぞ？」

ここで絵を描きながら過ごすか、血生臭い戦場で兵士の手当をするか…。

おっと、後者には最悪の結末がオマケで付いてくるけど」

兄が言い終える前に、天使は握りしめていたタオルを兄めがけてブン投げた。

ほぼ直線を描いて宙を舞ったタオルは、怒りによるコントロールミスなのかベッドに座っていたメガネの少年を直撃する。

「——ウィリアムのほかあ！兄様なんて最低だ！無礼にも程があるよ——！」

渾身の罵倒は今度こそ兄に命中し、兄は拳を握って立ち上がった。

メガネが吹っ飛んでただのイケメンと化した少年からタオルを奪い取り、魔法使いの前にいる弟に向かって叫ぶ。

「誰が無礼だって！？人の弟を死地に送ろうとする奴らは無礼じゃないのか！？」

「今の兄様より無礼な人なんていないもん——！」

怒り心頭の兄を放っておき、天使は魔法使いのローブに掴みかかった。

「——弟子にしてください——！お願いだから僕の魔法を放置しないで——！」

僕、血を見るのはだめだけど頑張っただけ慣れます！医術の体系だつて修めます！

もちろん絵だっていっぱい描きます！こんな僕でも、誰かの役に立ちたいんです——！」

魔法使いは天使の頭を撫でながら微笑んで、

「私でよければ、力になろう」

「ありがとうございます！あとネコを譲るって話、忘れないでくださいね??」

「ああ。そなた本当に、猫が好きなのだな」

「大好きです!!」

兄はほのぼのし始めた二人から視線を逸らすように、王子を睨みつけた。

「——アランツッ」

「ふあ、ふあい!？」

メルヘンワールドに片足を突っ込んでいた王子は、突然呼ばれて驚愕する。

「つな、なにか用かな、ウィリアム君!？」

「俺は許可しないからな！どう考えても危険すぎるだろうが!」

「いや、うん、俺も初めはそう言っただぞ？でもヴェオのやつ聞いてくれないし……」

「不甲斐ない王子だな!？」

「——そこんとこ突っ込まないで欲しい!」

長身の少年を皮切りに、ベッドの三人組が笑いをこらえ始めた。誰かが「腹がよじれる」と言い、また別の誰かは「おい、笑っちゃ駄目だろ……ッ」と漏らす。

もう真剣な空気には戻せないと悟った兄は、天使に向かって宣言した。

「おいサリア！弟子をやめたくなったらすぐやめろ！我慢しないでいいから！」

あと猫の世話はきちんとしろ！エサを切らすな！」

天使は口をとがらせ、

「なんなの兄様、好きにしろって言ったじゃない！僕は勝手にするもん！」

心配性の兄様につきあってたらキリがないよ！」

、
何かがブツツンした兄はタオルを投げ捨て（白衣少年を直撃した）

「兄に向かって何という口のきき方を！？俺はそんな子に育てた覚えはないぞ！？」

「兄様にはずっと食べさせてもらったけど、育ててはもらってはいない！」

「恩を仇で返すというのか！？」
あた

「ただそのセリフが言いたかっただけでしょ！？」

——空腹に耐えかねた兄が力つきるまで、意味のない言い争いは続いた。

×

少年たちは昼食をとるために去り、王子、魔法使い、天使が扉の前で会話を続けている。

「では、弟子入りについての詳しい話はいずれするでしょう」

「はい！」

「ごめんなサリア、なんかいきなり意味不明な話を持ってきて…」

「いいんです。気にしないでください。あ、王妃様の絵をお渡ししておきますね」

「ああそうだった、ありがとな」

「王妃様ってお綺麗な方ですねえ。肌の色とか、塗るときに緊張しちゃいました」

「だろ？ジュライ三大貴婦人の筆頭だったし。確かサリアの母上もそうだったな？」

「はい。僕の母様も美人でした！。父様は母様に一目惚れだったそうです」

「いいねえ。男のロマンだねえ」

「殿下、あまりお喋りしていると公務の準備に間に合いませんぞ」

「げ！？もうそんな時間か！ウィルがぎゃあぎゃあ言ってたからな

…」

「ごめんなさい。兄様、昔に色々あったから神経質になって…」

「ま、無理言ったこっちが悪いんだし。サリアは気にするな」

「…は、はあ」

「じゃあそろそろ行くか。絵の報酬は、俺のポケットマネーも加えて五割り増しで払うよ」

「ありがとうございます」

「…あ、そなたに一つ聞きたいことが…——」

「はい？」

「そなた、未来を見たことはあるか？」

「……………何度も」

「そうか」

扉が閉まる。

螺旋階段を下りる音は次第に遠ざかり、アトリエには雨音と天使だけが残った。

第十四話 光、水を掬（すく）いて < 8・下 >（後書き）

…お、終わった…

このシリーズにおける目標は「意味分らない語句を入れまくろう！」でした。

うん、ひたすら意味分らないものが出来たな。よしよし上出来。ちなみにこのシリーズは本編でなく、本当のお話は次から動き出します。

じゃあこのシリーズって意味あったの？とか聞いたら駄目。

このシリーズをやった意味は……銀河系外ぐらいにあるんじゃないですかね。

探しに行かないください。PCやケータイの前に帰れなくなりますぞ。

わずかですがリピーター様が付いてくださっているようで嬉しいです。

本編が面白かったらコメントなりメッセージなりギブミー！もちろん、厳しい指摘やアドバイスもよろしく願います。

第十五話 入団二日前 <上> (前書き)

ダラダラとした日常をお送りいたします。

キーワードにもある通り、冒険モノではございません。

魔物も出ません。人がいっぱい出てきます(今回は控えめですけど)。

第十五話 入団二日前 <上>

<十五>

入団式は2日後に迫り、寮に戻ってくる新入り団員が多くなった。緊張のためか、寮内は全体的にザワツいている。

廊下を行き交う少年たちの声はどこか浮き立っていて、祭の直前を彷彿とさせた。

ウィリアムがいるのはそんな廊下のただ中で、彼は班長としての初の仕事をしていた。

仕事内容は、寮長の部屋へ班員分の制服を取りに行くこと。

制服と言っても戦闘・参謀・スパイ課のマント、医師課の白衣、と大したものではないが。

「くそう、班長と書いてパシリと読ませるんだな…？ 雑用絡みの予感^{バシリ}はしてたんだ…」

ちなみに騎士見習い（生徒）は軍服に袖を通すことはまず無い。持参のワイシャツにマントや白衣を重ね、課別のタイを結ぶことで超お手軽な正装となる。

「俺は四年間、あいつらの班長^{バシリ}なのか…。黙ってればいい奴らなんだけどなあ。

ヘルは論理的思考で言い負かしてくるし、キュリーは論外、エルは差が激しい…。

——うわ、めげそう」

寮長の部屋はエントランスホールの横にあるのでウィリアムでも迷うことはない。

同じ方向に向かう少年を見ると、班長としての共感が湧いてくるウィリアムだった。

目的地に近づくと、制服を山ほど抱えて部屋に戻っていく班長とすれ違った。

ウィリアムは積み上げられた制服を意識的に数えて、その枚数に驚愕する。

事前通達によるとマント・白衣ともに一人二着ずつで、ウィリアムは八着運ぶことになる。しかしその少年が運んでいたのは鼻の高さまで積み上げられた——その数、十二着。加えて、その半数以上が白衣だったりするので驚きはやまない。

つまり班員は六人で、四人は医師課というビックリな班構成である。

「… 適当に決めてるのか？ いや、それはないよな…」

情報通のキュリアス曰く、メンバー決定に関する比率は入団面接が六割、寮長の直感三割、そしてアランの悪趣味テストが一割、であるという。

入団面接を受けなかったウィリアムは、否応なしに一割の影響を受けたわけである。

人数がバラけたり課が偏ったりするのは仕方ない、とキュリアスは言っていた。

少年は1 - ? - Dと書かれた扉を膝でノックした。すると、すぐさま扉が開かれる。

「お帰りー。早かったな？」

「なんか先頭グループだったみたいで。ちょっと上半分、手伝って」
「ほいほい」

実にアットホームである。

それを見ていたウィリアムは、自分の班員ならどついう反応を示すかを考えた。

「ふ……きつと『ご苦労！』とか言っつて制服に群がるだろうな……」

安易に予想できてしまう。それが残念であり、しかし愉快でもあるかと思うウィリアム。

ハチャメチャな班員たちと出会つて、ウィリアムはプラス思考という術を身に付けたのだつた。

エントランスホールには数十名の班長が集結していて、なかなか混雑気味だ。

ウィリアムは唐突に『怖い怖い鬼寮長』の存在を思い出した。アランはその人物にトラウマのような信頼のような、微妙な感覚を持つていたようで。

「好き嫌いとか厳禁つて言つてたよな。俺のチーズ嫌いはどうなるんだろっ……」

惨状がいまいち想像しづらいのは、鬼寮長本人に会つていないからかもしれない。

それにウィリアムの生家には優秀なコックがいたので、美味しい美味しいと言つて食べていた料理の中にチーズやサリアの嫌いなトマトが紛れていることは多々あつた。

ウィリアムは嫌いな食べ物を目の前にして、叱咤されたことなどないのだ。

ウィリアムはてくてく歩いて集団に加わり前の様子を窺う。

前方は比較的整然としていて、中間はそれに倣うようになら一列に並ぼうとしていた。

一人ずつ寮長の部屋へ入り、しばらくして出てくる。もちろん制服を抱えてだ。

流れに身を任せることにしたウィリアムは、集団の中で大人しくしていた。

徐々に整列していく班長たち。さすがは騎士の卵、その中でも班長は動きが違う。

ウィリアムはどこか客観的視点で少年たちを眺めつつ、そんなことを思っていた。

班長の出入りがスムーズに行われる部屋の扉は、ずっと開かれたままだ。

その扉に羊皮紙が留められているのを見つけて、ウィリアムは目を凝らした。

室内 汚すべからず
心して入室されたし

- 寮長 -

それだけ。

それだけの語句が、かなりの達筆で書かれている。
ただの達筆なら問題はないのだが、ウィリアムはその字に殺意を
読みとった。

「私の部屋を汚す者には 死 あるのみ」そんな感じだ。

アランの言う『鬼寮長』の片鱗が見えた気がして、ウィリアムは
背筋を凍らせた。

「…字に殺意がこもるなんて、どっかヤバイ人なんだろうか？」

当たらずとも遠からずということを、ウィリアムはいずれ知るこ
とになる。

×

自分の順番がやってきて、ウィリアムは前の少年と入れ替わるよ
うに部屋へ足を踏み入れた。

部屋に入って右側は受付カウンターのある小部屋。寮長の部屋と
は腰までの高さがある仕切りで区切られている。仕切りの一番奥に
は小さな扉が付いていて、ここから出入りするようだ。

対する左側にはかなりの奥行きがあり（エントランスホール分だ）
、部屋の両側に本棚がズラッと並んでいた。

逆光になっていてよくわからないが、テラスへ続くガラス戸の前
に誰かいる。

デスクに座って何か書いているようだ。

「…あの…」

恐る恐る声をかけるウィリアム。『鬼寮長』の噂を聞いてこそその態度である。

歩みは止めていない。謎の人物の両脇に、制服が積まれているから。

その謎の人物が顔を上げずに声を放った。

「——入団どうも。班長は色々と大変だが、頑張ってくれ。班名を言いなさい」

ウィリアムの予想に反して若い声だ。

そのことに驚きつつも、ウィリアムは反射的に答えた。

「1 - ? - X 班です」

「…? - X?」

その男はピタツと手を止めて、ゆっくり顔を上げた。

開けられたガラス戸から心地よい風が吹き込む。

その拍子に男の手から書類らしきものが飛び、ウィリアムの足に当たって落ちた。

「? - Xの班長——シエリダンか？」

「……ええ、まあ」

なんとも曖昧な答えである。相手の意図が読めないため、ウィリアムは警戒し始めていた。

書類を拾って差し出そうとしたとき、男が書いていたものが目に入る。

——うさぎの、絵。

「……は……？」

「ちょ、まだ見るな！完成してない！」

男に書類……いや違う、落書き用紙を引ったくられたウィリアムはぼう然とするしかない。

ナイスタイミングで太陽に雲がかかり、ウィリアムは男の顔を把握することが出来た。

耳の下あたりでカットされた亜麻色の巻き毛。ビー玉みたいに澄んだアクアグリーンの瞳。絶対にかっこいい部類に入るだろう。結構モテそうな印象も受けるのだ。

しかし特徴的なことにこの男、童顔なのである……。

——二十五、六歳ぐらいかな？

「はああ……、相変わらず珍しい色だな」

焦りが薄れた童顔男が、ウィリアムの髪を凝視しながら言う。確かに濃紺の髪は珍しい。ウィリアムはシェリダンの直系にしか出ない色だと聞かされていた。光の加減によっては紺にも藍にも青にもなる髪だ。

「——って、私の髪について何か知っていらっしゃるのですか？」

ウィリアムは思わず問いかけた。制服のことなんてどうでもよかった、と言っても過言ではない。自分の知識があまりにも閉鎖的で話にならないことを、ウィリアムはこの数年間で学んでいる。キユリアスという『跳ねる情報バンク』に出会ってからにはさらに実感が深まった。

なので、ささいなことも拾っておきたいのである。

「お前の髪って言うか……先輩の髪だな」

「は？先輩？」

「お前の父君だ」

そう言つて男は優しく微笑んだ。

長いまつげが強調されてますます幼く見える。少年と間違えてもおかしくないほどに。

「お前の父君は、俺の一学年上の先輩だったんだ。いやあしかし、あの人は凄かったねえ」

男は腕を組んでウンウンうなずく。

展開についていけず、ウィリアムは驚きを混ぜつつ問う。

「…あなたもしかして、いま三十五歳ですか」

「おう」

屈託のない微笑みからはどう考えても推定できない年齢である。ウィリアムの疑問は尽きず、

「えっ、じゃあ、あなたは寮長でない？」

「寮長！？ちよつと待てよ、あの人は生きてる次元が違つて」

笑いを引きつらせた男は椅子から立ち上がる。
そして遠い目をしながら、

「寮長、今は四年生の寮じゃないか？長期休暇明けでフヤフヤしてる奴等に火を噴いてるかも」

「は！？火！？」

「例えだよ例え。親子でも、中身はあんまり似ないのかな？」

そう言いつつ、男はデスクの引き出しから小箱を取り出した。
木で作られたそれには、蓋の部分に1-?-Xと彫り込まれている。

「1-?-X班のための、リボンタイ式だ。あと制服はどっからでもいいから取って行け」

「あ、はい」

ウィリアムはギクシャクした動作で紺のマントを六着、白衣を二着抱えた。

結構、いや、かなりの重みである。そして分厚さである。

男はウィリアムが抱える制服のてっぺんに小箱を置いて、ウィリアムの背を押す。

「自分の部屋に帰るまでが仕事だからな」

どこかで聞いたことのあるようなセリフを吐き、少年じみた男はウィリアムを笑顔で見送った。

第十六話 入団二日前 <下> (前書き)

PCで読まないと読みづらいです。ホントに。
設定の説明くさいところは見逃してください；

第十六話 入団二日前 <下>

<十六>

部屋の前まで辿り着いたウィリアムは、？ - D班の班長と同じく膝で扉をノックしてみた。

すると聞こえたのはキュリアスの声。

「——合い言葉を確認するぞ。『山』？」

「は……？」

なぜか合い言葉を問われ、ウィリアムは絶句するしかない。そんなもの決めていないのである。しかも『山』ってどういうこと。

「答えるよ。それともお前、1 - ? - X班員じゃないのか？」

明らかにウィリアムだと分かっている上での発言。

ウィリアムはそのことに気付きながらも、一応言ってみる。

「…俺、ウィリアム・シェリダンんだけど」

するとキュリアスは間髪入れずに、

「ああ？ウィルの名を騙^{かた}る強盗かもしれないだろ。ほれほれ合い言葉！『山』？」

マントを二着、廊下に捨てたくなるウィリアム。
キュリアスがあまりにも『山』を連呼するので、呆れたウィリア

ムは適当に言い放った。

「——『ハイキング』」

途端に扉が開く。

部屋の中では少年三人が大爆笑しており、ウィリアムは制服全てを投げ捨てようかと思う。

キュリアスが机を叩きながら叫んだ。

「——ハイキング！ハイキングだって！『山』と言えば『川』だろ！？」

「……キュリアス・トールの制服は燃やしていいかな？」
「いいわけないだろウィル！早く中に入ってこいよ！」

——これはパシリ以上に大変な生活になるかも知れない。

ウィリアムはそう落胆せざるを得なかった。

×

ウィリアムの指示で六人掛けテーブルの上が片付いていく。
物が全てなくなったところで、ウィリアムはやつと荷物をおろすことが出来た。

すぐさまキュリアスがマントに手を伸ばす。

しかしウィリアムはそれを許さず、キュリアスの手をがっしりと掴んだ。

「…キュリアス君？ 班長にお礼は？」

「おう！ ありがとな班長」

「…なーんか気に食わねえ…」

ウィリアムはしぶしぶといった様子で制服への道を開放する。

ヘルベルトとエラールが同時に群がったので、キュリアスは後方に吹っ飛ばされていた。

「ありがとうウィル！ やっぱお前が班長で正解だった！ なあエラール？」

「そうそう！ キュリーが班長だったら俺たちの制服は今ごろ木の上だ」

「あー、それは言えてるかも…」

後ろでキュリアスが非難の声を上げるも、耳を貸す者はいない。どう考えても自業自得であるが。

「一人二着ずつで、リボンタイはこの箱に入ってる」

ウィリアムの発言に従ったヘルベルトが小箱を開けると、小物の上に一枚の羊皮紙が入っていた。

「…なんだこれ？」

ヘルベルトがそう言い、ウィリアムが羊皮紙を取り出した。二つ折りの羊皮紙を開くと中にはビッシリ文字が書いてある。端にディ

フォルメされた兎の落書きがあるところを見ると、さっきの青年が書いたものらしい。

「えーと、『説明書』…」

ウィリアムがゆっくり読み上げ始める。

彼を含めた四人は自然と席について、羊皮紙の内容に注意を向けた。

「―正装、通常着、及び制服を扱う際の注意点について―」

説明書の内容は、以下の通りである。

『説明書 ―正装、普段着、及び制服を扱う際の注意点について―
正装：全課とも、白いシャツに黒色系または茶色系のズボン。灰色は可。青色系は不可。

シャツはズボンに入れ、ベルトはズボンと同色または近色をつけること。

戦闘・参謀・スパイ課はマントを表（背中に刺繍が入っている方）にして羽織り、

医師課は白衣左胸にエンブレムを留めて着ること。着衣イメージは掲示板を参照。

戦闘課は青色のリボンタイ（縦結び不可）、参謀課はワインレッドのクロスタイ、

スパイ課はループタイ（襟元までしめる）、医師課は紺色のリボンタイ。

入団式、その他諸々の式にはこの服装で出席すること。服装違反者は地獄送り。

通常：戦闘・参謀・スパイ課は上記のマントを裏（刺繍のない方）にして羽織り、

医師課はエンブレムをはずす。言うまでもなく着崩し厳禁。城内移動を考慮せよ。

注意：制服破損等の困り事は寮長室へ修復願いを出すこと。刺繍のほつれ、タイの紛失、

盛大なる汚れも同様。全て寮長がやってのけるから、恐くても機嫌取っておけよ。

地獄送りとは寮長の科す罰則のことで、一週間は笑えない日々が続くぞ。

せいぜい気を付けるように。

副団長フィリ

ップ・ストルージュ』

「…フクダンチヨウ？」

説明書を読み終えたウィリアムが機械のように読み返す。

他の三人は制服に一生懸命で、ウィリアムの発言には気付かない。

「…あれが…、あの童顔が…副団長？団長の次にエライ人？」

父親の後輩。現在、三十五歳。ウサギの落書き癖がある童顔。

——うそだ。

そんなことあっていいのか。

確かにフィリップ・ストルージュって副団長がいたような気がするけど、あれが？

「…やばい、騎士団の中身が心配になってきた」

ウィリアムはテンション急上昇の三人を見ながら、前途多難な未来を予想する。

入団二日前は、一抹の不安と共に過ぎ去っていった。

第十六話 入団二日前 <下>（後書き）

マントは『ロードオブザ・キング』の主人公たちを想像していただけ
れば幸い。

設定が独創的すぎてやたら凝っているのは作者の趣味です。リボン
タイは正義だ。

スパイ課がループタイなのは、緊急時にヒモが役に立つから。

ケータイでこの物語を読むとめちやくちや読みにくいことが判明。
ケータイで読んでくださっている方々、本当に申し訳ありません；

第十七話 入団前日 <上> (前書き)

いいかげん、上下モノから抜け出したい。

第十七話 入団前日 <上>

<十七>

嵐の前は非常に静かである。

入団前日。生徒たちは自室にこもり制服の最終点検に勤しんでいた。

入団式で粗相があつては、例の『地獄送り』とやらが待っているからだ。

1-?-X班も例外ではない。

いち早く正装を身に着けたキュリアスが、ウィリアムに向かって問いかける。

「どうよコレ？」

そう言つて彼はぐるっと一回転した。

マントの背に施された刺繍、ユリと剣をモチーフにした騎士団の紋章が何とも凛々しい。

それを羽織っているのがトラブルメーカーだということすら忘れさせてくれる一品だ。

問われたウィリアムは含み笑いしながら、

「めっちゃカッコイイぞ、マントが。あと髪は結べ。刺繍が隠れてたら怒られる」

「ひどくねえ！？ウィルだつてフードで刺繍が隠れてるじゃんか！」

「俺はまだ調整中なんだ。ループタイも、ちゃんと上までしめろよ」

「お前は姑か!？」
「いや班長だ」

ウィリアムがキュリアスを軽くあしらっている一方、お坊ちゃん
とメガネ少年は…

「エル、エンブレムは左胸に付けるんじゃないか？」
「ええ？左胸ってどっちだよ？」

「いや、だから左だろ??」
「こっちは左だぞ??」

「そりゃ俺から見たら左だけど、お前から見たら右だろ？」
「え？自分から見て左ってこと??じゃあヘルから見たら俺の右胸
ってことか？」

「いやいや、お前の左胸は俺から見たってお前の左胸だよ」
「意味わかんないけど？」

「俺から見たらお前の右側だけど…、つまり、お前の左胸だ」
「は？結局どっちだ??」

「…。えーと、心臓のあるほう」
「ああ、それなら分かるぞ！最初からそう言ってくれ」

天才頭脳と天然人格は噛み合わない。
さつきからずっとこの調子で、リボンが縦結びだの、クロスタイ
は左右どちらを上にして留めるかだの、議論してばかりいる。

「おしつ、これでどうだ！」

やっと身なりを整え終わったエラールが立ち上がり、ヘルベルトに挑戦的な視線を投げた。

白衣は常に着ているので変わり映えしないが、結ばれた紺のリボンと騎士団のエンブレムはなかなかイカしている。

ヘルベルトはなぜ感心したようにうなずいて、

「エル、ちよつと黙ってる。いますつげえ男前だぞ」

「え、まじで??」

「あ、ごめん。崩れた」

「崩れた」とはひどい形容であるが、あながち間違いでもない。エラールの表情はふとした瞬間（笑ったり泣いたりしたとき）、ふにやりと崩れるのである。

ショックで座り込んだエラールと入れ替わりでヘルベルトが立ち上がると、机を挟んだ向かい側でキュリアスが声を上げる。

「ちょ、参謀課だけなんか違うね!？」

キュリアスが指摘したとおり参謀課だけ制服の雰囲気が違う。

紺のマントにワインレッドのクロスタイがよく映えて、知的な雰囲気を出しているのだ。

しかもそれを着ているのは上品かつ安定感抜群のヘルベルトなので、さらにエクセレント。

誇らしそくに胸を張ったヘルベルトは、髪をいじっているキュリアスを見据えた。

「おお、キュリーもいいじゃん。ついでにポニーテールとかやってみたら？」

「いやあ、それはちよつと…。まんま女子に見えるし」

「ぶふっ…。そりゃ残念」

そう言いつつも、ヘルベルトは優雅な身のこなしでキュリアスに近づいてきた。

キュリアスが怪訝そうに、

「…え、なに？」

スタスタと近寄ってキュリアスの前にしゃがみ込んだヘルベルトは、何気ない動作でキュリアスの金髪をひとつさ一房手に取った。

特に反応を返さないキュリアス。

それを眺めていたヘルベルトは苦笑いをしながら言う。

「…キュリーってマジで男なんだな。女の子だったらさ、自分の髪に触れられたら

頬を朱に染めるとかドキマガジするとか、そういう反応見せるだろ？」

「なんだそれ。恋愛小説の読み過ぎじゃね？」

「俺はそんなの読んだことないから。うわ、絹糸みたいな髪だな！結ってみていいか？」

「別にいいけど、終わったら元に戻せよー」

エラールが机の向こうからツインテールを注文する。ウィリアムは呆れ顔ながらも、「ロングなら三つ編みだろ」などと自分の好みを押しつけてきた。

ヘルベルトがエラールに注文されたツインテールを結いながら、

「うーん、あんまりメチャクチャやったら形が残りそうで悪いなあ」

自分に注目が集まっていることに気をよくしているキュリアスは、不敵な笑みを浮かべる。

「何やつても型はつかないから安心していい。サラッサラのビューティーヘアだから」

「すげえ自信だな。型がつかないなんて、世のご婦人方が泣くぞ？頭、交換してやったら？」

ヘルベルトの無茶な提案に、ウィリアムがマントを引きずりながら飛び込んできた。

「…っ、ちょい待ち。ご婦人が木登りし始めそうで恐い。交換するなら髪だけで」

「ははっ、冗談冗談。それよりウィル、早くお前の正装見せ——」

——ドカツ

扉が目にもとまらぬ速さで開かれた。扉が吹っ飛んだかのような破壊音付きだ。

疾風の如く部屋に入ってきたのは……

「――よう、1 - ? - X班！緊張してるか？してるよな！」

この国の破天荒王子、アラン・ジェミニだった。

第十七話 入団前日 <上> (後書き)

お約束のヘタレ王子登場。

謎の黒王子は出てきません。

第十八話 入団前日 <中> (前書き)

長すぎたので上中下に変更しましたorz
意味不明な会話ばかりしてるのは、お年頃だからです。

第十八話 入団前日 <中>

<十八>

アランは実に格好いい服装で登場した。

パリッとして硬そうな軍服は白が基調で、所々に付いている飾りは深い青色。凛々しい紺色マントには騎士団員より上等な生地を使っているらしくツヤツヤだ。マントを留めるバッジは金ピカで、ジューン王国の国旗にもなっている双子座の彫刻入り。

知る人ぞ知る、これはジューン王国第一王子の正装である。

彼が入団式に向けて気合いを入れているということに他ならないのだが、残念なことに、この空間でそれを知るのは国内出身のキュリアスとエラーしかいない。

「誰だよ、俺のこと破天荒王子とか呼んだの。誉め言葉じゃないみたいだな」

扉のあった位置で仁王立ちしたアランが、拗ね顔で言う。
ぼう然としている班員を氣遣ったウィリアムが口を開いて、

「…いや、誰もそんなこと言っていないぞ」

「そうか？確かに聞こえたんだけどな…」

アランはぶつぶつ言いながら部屋の中央、机の前まで歩み出た。
そして机の横にいたキュリアスとヘルベルトを見つめて泣きそうになり、

「…お前ら…、そういう趣味あったのか…？」

アランが見つけたのは『ツインテールキュリアス』である。

こめかみより高く結われた金髪。ウィリアムとエラールのリボンタイ（予備）によって結ばれ、キュリアスのフェミニンルックが変な方向に強化されている。

アランは机にもたれかかって、さめざめと泣き出した。

「俺さ、同年齢の友人ができたと思って喜んでたのに…！お前ら変態だったんだな…！？」

ヘルベルトがその嘆きを軽く流して微笑む。

「キ…ュ…リーが変態だったのは、わかってたことだろ？」

「っだ、誰が変態だ！？ツインテールを注文したのはエルじゃんか！」

「エルが変人だったのは言うまでもない」

結った自分は決して変態でないと主張するヘルベルト。
堂々と言つてのけた姿は反論を許してくれない。

アランが上等な軍服の袖口で涙を拭いながら、悟るように目を閉じた。

「…そうさ。わかってたんだよ、キュリーとエルが変態だったことくらい…」

ツインテールとメガネが同時に怒り出すが、ウィリアムとヘルベ

ルトは吹き出してしまった。

アランはさらに続けて、

「騎士団の上層部だって意味不明なのばっかだし…、この国にいるとおかしくなるのか？」

自分の異常行動も含めての発言である。
トランス

しかしX班員には、アランが自分のことを棚上げしているようにしか聞こえない。

キュリアスが完成したツインテールを梳きながら爆弾発言を投下する。

「けっ、ロリコン王子が何を言うか」

場が凍り付いた。

アランは驚愕の発言に、やや遅れて反応を示す。

「はい？誰がロリコン王子だって？」

顔が引きつっている。

侮辱や屈辱を通り越して、「コイツは何を言っているんだ？」と疑問の表情だ。

口元にシニカルな笑みを作ったキュリアスは猫撫で声で、

「あらあら？つい半年前の孤児院訪問を忘れたのか？」

エラールが「ああ、あれ」と呟いて、崩れていないハンサムスマイルを浮かべる。

アランに怪訝そうな視線を向けられ、エラールは顔をふにやりと崩して言った。

「新聞で読んだぞ。見出しは確か…『アラン王子 孤児院を電撃訪問！』とかだっけ？」

「それがどうしたよ？」

ますます疑問が深まった様子のアラン。キュリアスがニヤリと笑って、

「子どもたちにキヤーキヤー言われて、さぞかしご満悦だったんだろうなあ？」

「…別に、あれはただの神聖なる慈善事業だ。何が言いたい？」

アランの表情は険しくなっていく。

それとは反対に、エラールは合点がいったように満面の笑みで手を叩いた。

「そのときにアランが言ったコメントだろ？」

「おう！今日のエルは察しがいいな！」

「コメントお？俺、なんか変なこと言っただけ？」

キュリアスは得意の流し目でアランを一瞥すると靴を脱いで、側にあった椅子に飛び乗った。

何をするのかと思えば彼は声の調子を整えて、

「首都アルヘナの聖ファリア孤児院を訪れたアラン王子！職員・児童の大歓迎を受けた彼は

始終笑みを絶やさず、駆けつけた記者に対しコメントを残した！」

演説だろうかと皆が認識しようとした瞬間、キュリアスはアランの声で語り出した。

「く素直な子たちばかりで可愛いね！みんな俺の子どもにしたいよ！>」

まだアランの顔から疑問が消えない。そんなことにせず、キュリアスは声を元に戻した。

「来年度からの社会福祉事業は今年度より五割増の予定！アラン王子による貧民・孤児

支援策はさらに充実する見込みである！……とまあ御託はどうだっというんだ」

どうやら語り終わったらしい。最後のほうなんか、かなり適当だ。アランは頭を抱えながらため息をつく。

「……で？どこの誰がロリコンなんですか？」

「アラン君……。先生の説明を聞いてから質問しなさい」

「ツインテールのせいで、いつもの三倍はウザいな」

キュリアスは苛立つ王子を椅子に座らせ、自らもその向かいに座った。

確かに、キュリアスが動くたびに揺れるツインテールはウザイの一言に尽きる。

そのウザイ髪の毛を揺らしながらキュリアスは身を乗り出して、

「先生は常々思っていたんだ……アラン君は問題発言が多すぎる、と」

「はあ」

いまいち理解していないアラン。

もっと詳しく言えば、アランだけが先の再現芝居に問題点を見出せないでいる。

ウィリアムもヘルベルトも、キュリアスが何を言いたいのかは大体見当がついた。

「ふ、先生はあの記事を読んだときに高笑いしてしまったものだ……。子どもに囲まれてウハウハの人気爆発王子が、ついに本性現したかと」

「誰もウハウハなんてしてないから。つーか俺、このあと用事あるんだけど」

「この部屋を脱出できるかどうかはアラン君の理解力にかかっているよ」

キュリアスのウザイ度が増す。

アランのウンザリ度も増す。

ヘルベルトとエラールは流れのわかりきった話に飽きたのか、また議論し始める。

入団前日ぐらい落ち着いて過ごしたいウィリアムは、先生と生徒の会話に割り込んだ。

「あー、キュリアス先生」

「なんだねウィリアム君」

「アラン君が困っているの、ちゃちゃっと済ませてやったらどうですか」

「ほう。ならウィリアム君から説明するというイベントを取り入れよう」

「え、いや、俺は別にそんな…」

キュリアスから急に腕を引っ張られ、ウィリアムの着終わっていないマントがずり落ちる。

無理やり立たされたウィリアムはキュリアスの横に配置され、

「——さあウィリアム君。キミからアラン君に一言ぶちかましてやってくれ」

「先生、無茶振りは良くないと思います」

「性悪王子の根性を叩き直すためには、キミからの説得が必要なんだよ」

アランが「ぜひ聞かせてくれ」と開き直った。足を机の上にのせそうな勢いだ。

「っあー…、だからつまり、その……」

「ウィリアム君、しっかりしなさい」

「そうだぞウィル、はっきり言ってみろ」

ウィリアムはアランとキュリアスへ交互に視線を送り、控えめに切り出した。

頭を抱えながら、だ。

「えーと、『お持ち帰り願望』満載のコメントが、先生は気に食わなかったんだと思う」

「『お持ち帰り願望』??」

「よしよし。ウィリアム君、満点だ」

キュリアスは的確な造語でもって説明を試みたウィリアムを労う。アランに意味が浸透していないことはスルーらしい。

ウィリアムを隣に座らせ、キュリアスはニヤリと笑った。

「先生は思ったね…。国民からの支持率百パーセントの王子には、何かあると…」

「何かあるって？先生、ズバツとお答えください」

キュリアスが立ち上がる。足音を立てずに王子の後ろに回り、その両肩に手を置いた。

「子どもたちを城に連れ帰った王子は――女の子に好きなドレス着せたり、

男の子に自分のお下がり着せたり、そりゃもう好き勝手やるつもりだったんだろ？

否定の言葉は聞きたくないよ、アラン君」

「……とりあえず一発殴っていいか？」

「ふん、認めたな」

「いや認めてねえよ！」

王子の鉄拳を避けるためにツインテールが後ろに飛び退く。

ガルルルと猛獣の如くうなる王子は、マントの下から一枚の羊皮紙を取り出した。

そして薄暗く笑って、

「…これ、いらないのか？1-?-X班の分は焼き捨ててもいいんだぞ？」

「出たな横暴王子め！テストの内容表なんて隣の班から盗めばいいんだ！」

「窃盗か…。エッフェルの罰則規定第十五号に該当する行為だな」

アランが今にも羊皮紙を握りつぶそうとする。
が、しかし。

「…テストの内容表？」

王子の背後で、班長が間の抜けた声を上げた。
天才も天然も議論をやめて、王子の手元に注目する。

「…テストって、テストか？成績良ければ給料もらえるアレか？」

金髪二人以外の人物には羊皮紙が宝物のように見えてきた。

アランが得意げに笑って、

「そうそう、ウィルは理解が早くて助かるよ。欲しいだろ？欲しいよな？」

俺はこれを全班に配る途中でね。こんなところで足止め食らわされたら困るんだ」

ウィリアムはジリジリと王子に近寄りつつ言う。

「早くそれを置いて行ってくれ。ツインテールアホはこっちで処理しておくから」

「そうか。それは助かる」

キュリアスが絶望的な表情で跳ね出した。

「ウィル！？なに権力に屈してるんだ！テストなんてどうにかなる

「だろ！」

「ハハハ！勝負あつたな！王子の力をなめるなよ！」

「いやだ！俺は絶対に負けない！」

なおも駄々をこねるキュリアス。

アランはさらに笑みを深くし、懷から白い封筒を取り出した。

「…これ、お前宛の手紙なんだけど。読み上げるぞ？」

「オレ宛？？誰からだよ？」

アランはマントの下に隠し持っていた大量の羊皮紙を机の上に置き、封筒を開く。

中に入っていたのは小さな紙切れ。適当に千切りましたという風体だ。

アランは仰々しく胸に手を当て、

「『兄者へ。食費足りない。給料取ってこい。カイルより』」

『兄者』の時点でキュリアスの表情が固まった。

アランが勝ち誇った笑みを浮かべるのを見て、キュリアスは両手を差し出す。

「申し訳ありませんでした。テストの内容表ください」

「よく言っ たな。先生は嬉しいぞ」

これぞ立場逆転である。

先生と生徒のスイッチが切り替わったのを目撃して、ウィリアム

は王子の手腕に舌を巻く。

ヘルベルトが吹き出すのをこらえながら、

「…キュリーって、弟いたんだ…」

しかもかなり上から目線の、だ。
もう笑うしかない。

アランは賞状でも授与するかのようにテスト内容表と手紙をキュリアスに渡した。

そして大量のテスト内容表を左腕に抱え、右手で軽く手を振る。

「ちゃんと内容表に目え通しておけよ！じゃあな！」

マントを軽く払って、嵐^{アラン}は部屋から駆け出ていった。

第十八話 入団前日 <中> (後書き)

もちろん王子はノーマルです。

ツインテールはセーラー・ーンを想像していただけると幸い。

制服の洗濯やサイズについての質問は承っておりません；

第十九話 入団前日 <下> (前書き)

くそう、<中>で無駄話ばかりさせすぎたな；
前日<ときで、こんなにノロノロするはずじゃなかった！

第十九話 入団前日 <下>

<十九>

アランが立ち去ったあと、しばらく誰も動かずにいた。

空気を切って動いたのはキュリアスで、彼はテスト内容表に釘付け状態のまま座り込んだ。

その顔からは血の気が失せている。

班長として正義感の湧いたウィリアムが、心配して声をかけた。

「キュリー？どうしたんだ？」

「…………た」

「は？」

キュリアスはカクカクと人形のような動作でウィリアムを見上げる。

クイ、クイとウィリアムを手招きし自分の横にしゃがみ込ませて、

「…テストあした」

それだけつぶやくと、キュリアスはテスト内容表をウィリアムに押しつけ、泣き出す。

異変を感じ取った天才と天然が班長に詰め寄り、テスト内容表を覗き込んだ。

『・記念すべき初回テスト・（実施日：九月一日）』

「…アシタ」

「アシタダナ」

「ナニコレ」

「ワカラナイ」

「…二人とも落ち着け」

ウィリアムが二人の会話を止めた。彼自身も青ざめているのだが、必死に冷静を装っている。

「これは…他の班も今日配られたのであって、心配いらな——」

ウィリアムは内容に目を通しながら喋っていたのだが、途中でフリーズした。

険しくなる天才と天然の表情。響くすすり泣き。

ウィリアムが内容表に一通り目を通していく。顔をしかめながらも、懸命に。

読み終わった彼は一呼吸おいて、震える声を発した。

「…読み、上げます」

その声を聞いた班員は静かに立ち上がった班長に注目する。

彼らは椅子に座る元気もなく、ゆかにへたり込んだままであった。

彼が読み上げた内容は、以下の通りである。

『・記念すべき初回テスト・（実施日：九月一日）

＜戦闘課＞剣術・弓術の試合。いずれもトーナメント方式。本日の日没までに、希望の

テストを紙に書いて寮長室に提出すること。なお、未提出者は欠席とみなす。剣や盾、

弓具は持参可。不所持の場合は貸し出しとする。必要な道具名も記入しておくこと。

集合場所は全員、騎士団本部前の闘技場。初給料支給は剣・弓それぞれ上位八名。

＜参謀課＞チェスのトーナメント試合。場所はカストル城第二広間。時計の持ち込み可。

初給料支給は上位三名。優勝者は参謀長との特別試合あり。

＜スパイ課＞カストル城のメイドに変装している二年生スパイ課所属員、総勢八十九名

の搜索。五人発見時点で初給料支給。集合場所は城門前。城の下見は本日午後四時まで。

＜医師課＞筆記試験。本日の日没までに、希望の科（外科または内科）を紙に書いて寮長室

に提出すること。なお、未提出者は欠席とみなす。ペン・インク・時計を持参すること。

場所は双葉医療棟、第三丁五会議室。九十五点以上で初給料支給。三十点以下は落第。

入団式終了後、全員十時までに集合しておくこと。遅刻者は退団の可能性あり。以上』

×

羊皮紙を手にウィリアムは廊下を歩いている。午前中と違い、廊下はかなり混雑していた。

ウィリアムの隣にはエラール。彼もまた内ポケットに羊皮紙を忍ばせ、寮長室を目指す。

ちなみに現在のエラールは笑い上戸仕様で、些細なことにも笑みを絶やさない。ウィリアムが床につまずこうものなら大爆笑は必至だ。

「アハハッ、寮長室、なんて遠いんだ！」

「そこ笑うところじゃないけど」

ウィリアムの淡泊な指摘に、エラールは満面の笑みを返す。

「それで？ウィルはどうして剣術にしたんだ？」

——会話が成り立っていない。

ウィリアムの表情が引きつり、それを見たエラールの唇がさらにつり上がる。

エラールが笑い出す前にウィリアムが口を開いて、

「弓に触れたことがないからだよ」

「そうかそうか！そりゃウケるな！」

「……」

スルーしかない、と覚悟を決めたウィリアム。
エラールを良いヤツ状態に戻してくださいと天に祈りながら、ウイリアムは歩み続けた。

×

二人がようやく階段付近にさしかかった時である。
ウィリアムは、階段の上から雷のような音が降ってくるのを聞いた。

不意に階段へ目をやった二人が目にしたのは、音を立てつつ転げ落ちてくる少年の姿。

「「だあああああああ——ッ！」」

二人が後ろに飛び退いたため、哀れな少年は階段が終了すると同時に廊下の端から端まで転がって会議室の扉に衝突した。バゴンと空間に衝撃が走り、少年は仰向け状態のまま動かなくなる。

後ろでちょびつと結んだ金髪に白い頬。着ているのはエラールと同じ白衣。小柄。

色々と乱れてはいるが、外傷はないようだ。

「シーク！」

さっきまでの笑い上戸はどこへやら、エラールが深刻な表情で少年に駆け寄った。

驚きのあまり動くことができないウィリアムは二人分の叫び声を感知する。

「シーク！大丈夫か！？」

「だから走るなって言っただじゃん…っ！」

階段から駆け下りてきたのは戦闘課の制服を身にまとった少年たちで、一人は黒髪黒目、もう一人は赤毛にオレンジ色の瞳。手に羊皮紙を握っているのも、ここにいる目的はウィリアムたちと同じである。

彼らは、傍らに佇むウィリアムと少年を介抱しているエラールが目に入っていないらしい。

シークと呼ばれた白衣少年に真っ直ぐ駆け寄って、そこでようやくエラールの存在に気付く。

赤毛の少年が焦ったようにエラールを見て、

「ええと、コイツどんな感じ？生きてる？あんた医師課だよな？」

言うまでもなく質問攻めである。

ウィリアムがエラールに目をやると、彼はいつになく真剣な顔で質問を無視した。

「おい聞いているのか！？」

「デール、静かに」

黒髪の少年が赤毛をいさめる。察するに、この黒髪少年が班長のようだ。

状況判断のためか彼は辺りを見回して、黒曜石の瞳にウィリアムを映した。

その少年を見たウィリアムの第一印象は「綺麗なやつ」であった。目の上で切り揃えられた前髪は整った顔を際立たせており、宝石のような瞳は強い意志を秘めている。白衣少年と同じく小柄だが、ウィリアムは鋭い瞳から狼に似た野性味を感じた。オオカミ

彼は形の良い唇を少しだけ動かし、

「…この人は、あなたの班員ですか？」

十六歳にしては高い声。もしかしたら変声期がまだなのかもしれない。

この人、とはエラールのことだ。ウィリアムが肯定すると、少年はさらに続けた。

「…信用するに足る医者ですか？そうでなければ先輩方を呼ぶなりしますが」

「え…、信用？」

ウィリアムは失神している少年の額に手を当てていたエラールに目をやって、先週あたりにキュリアスから仕入れた情報を口にした。

「えーと、こいつ、五子爵ペンタの血筋らしいけど？」

実はペンタという語句、ジューン国内でしか使われない。

大昔に王立医師団——これにもセンチ・ルシアという呼び方があるらしいのだが——を構成していた貴族の総称で、その名の通り五つの子爵家から成る医師の家系である。

ジューン国内においては伝説級の話らしいが、ジュライで生まれ育ったウィリアムには未知の存在。もちろん、詳細なんて全く知らない。

恐れていたことに黒髪少年は国外出身者のようで、首を傾げている。

その横から赤毛の少年が詳しい説明を加えた。彼はジューン出身のようだ。

「つまり、超一流の医者の家系ってことなんだ。信用しても良いと思うけど」

ウィリアムが弱々しく言うと、黒髪少年は「わかりました」と呟いて立ち上がった。

そして、ウィリアムに右手を差し出す。ウィリアムが突然の行動に戸惑っていると彼は、

「…あなたたちは、彼——シーク・ミラージュの側にいてもらえませんか？」

お二人のテスト希望用紙、僕たちが提出しに行きますから」

つまりは羊皮紙を出せという意味だったのだ。

すぐに理解したウィリアムが自分の羊皮紙を手渡し、エラールのポケットをまさぐって、見つけたそれも黒髪少年に託す。

「えーと…、じゃあ俺たちここにいるから、提出よろしく」

「はい。すぐに戻ってきます」

ちよつとした野次馬をかき分けて、二人の少年が寮長室を目指して歩み去った。

手持ち無沙汰になったウィリアムは恐る恐るエラールに目をやり、

「…エル？」

「……………」

声をかけてみたが、エラールは一切返事をしない。振り向くことすらない。

それだけに真剣なのかもしれないが、手際よく脈を取ったり瞳孔を確認したりしている彼はいつものエラールと違いすぎて、トランプタワーとのギャップが混乱を誘う。

不気味、ではないが、ウィリアムは知らない人を見ている気分になった。

野次馬が固唾を呑んで見守っているのは、エラールから発せられる鋭利な雰囲気のせいだ。

騒いでいるのはエントランスホールにいる少年たちで、会議室の前に集まった者達が声を発することはない。そういう軽い雰囲気ではないのだ。

ウィリアムが大人しくエラールの背中を見つめると、

「——ウィリアム」

「はい」

エラールに突然名前を呼ばれて、ウィリアムは反射的に返事をしてしまった。

「マントを貸せ」

「…はい」

この医者はこの誰だよ！？と叫びたくなるウィリアムだが、もちろんそんなマネはしない。

黙ってマントを脱ぎ、エラールが差し出している左手にそれをのせる。

エラールは受け取ったマントをたたみながら、

「シワがついてもいいか？」

「…ああ、好きに使いえ」

ウィリアムが返事をし終わると同時にエラールもマントをたたみ終えた。

それをどうするのかと思えばエラールはシークという少年の頭を少し持ち上げ、その下にマントを滑り込ませて枕にしてしまう。

エラールとの接触の機会を逃すまいと、ウィリアムは彼の後ろから声をかけた。

「…そいつ、大丈夫そう？」

「問題ない。気を失ってるだけだ」

安堵したウィリアムだが、エラールの次なる言葉に凍り付いた。

「…水でもぶっかければ、すぐ目を覚ますんだが」

「……っ」

エラールが周囲に目をやりながら水入りバケツを探しているので、ウィリアムは閉口した。

水をかけたと想定してみるなら、少年もマントも廊下も会議室の扉もびしょ濡れとなり、もっと悪ければ寮長の雷が落ちる可能性もある。

それは何としても避けたい。穏便に済ませてくれ、と心の中で懇願するウィリアム。

そんな時、再び野次馬が割れて二人の少年が姿を見せた。

黒髪少年が冷静な声色で問いかけて、

「シークの容態はどうですか？」

仲介役のようになってしまったウィリアムがエラールに視線を送る。

エラールはまだバケツを探しながら片手間に答えた。

「頬をぺちぺちしたら起きる。やってみれば」

さっきと言ってること違うじゃん！ぺちぺちって何だよ！？とウィリアムが内心で叫んでいると、エラールの言葉に赤毛の少年が素直に従った。

しゃがみ込んで、両手で白衣少年の白い頬を三回……ぺちぺちぺち。

「……っ」

まぶたに反応があった。ただし、少し震えるほどの弱々しい変化、それを見ていたエラールが飄々と、

「やっぱ水か」

「——ッ！」

黒髪少年が「水…？」と怪訝そうな視線を向けてきた。首を横に振りまくるウィリアムを脇へ押しやって、エラールが口を開く。

「水かけたら起きる」

「……」

眉をわずかにひそめ、黒髪少年は突飛な案について思案している。そんな班長を気遣うように赤毛少年が立ち上がって、

「水は…ちょっとなあ？カティを呼んできて、三人で部屋に担ぎ込むってのはどうだ？」

「……。そうしよう」

黒髪少年がうなずくと、デールという赤毛少年は階段を駆け上がっていった。

『水ぶっかけ案』が消滅したので、穏便に済んだ感激を天に述べるウィリアム。

そんなウィリアムの内面には全く気付いた様子もなく、黒髪少年が右手を差し出した。

今度は、どうやら握手のようだ。

「…ありがとうございます。僕はリユート・ナヴィエ。1 - ? - H班の班長をしています。」

さっきの彼はデイルーン・イルナ。我が班、二人目の戦闘課です」

ウィリアムはリユートの綺麗な手を握り返す。

途端に感じた剣ダコ。自分と同じくらい厚い、掌てのひらの皮。

ウィリアムの表情をうかがっていたリユートは微笑んで、

「僕たち二人も、あなたと同じ…剣術です。1 - ? - X班、ウィリアム・シェリダン」

深青と漆黒の視線がぶつかる。

挑戦的な瞳をまっすぐ見つめたウィリアムは、言い知れぬ興奮が湧き上がるのを感じた。

「テスト希望用紙、見たんだ？」

「…すみません。好奇心に負けて」

苦笑いするリユート。その瞳に宿る闘志は、出陣に備えている戦士のような。

廊下で騒ぐ生徒たちとは意気込みが違う。底知れぬ力が、ウィリアムの精神を揺さぶった。

ウィリアムは握る手に力を込めながら、

「…明日は、よろしく」

そう強がるだけで、精一杯だった。

第十九話 入団前日 <下>（後書き）

入団式はもっともつと長くなります。きっと「光…」の二、三倍ぐらい。

プロット練り練りしてますが、登場人物と語句の数が半端ではない；そのうち人名・用語辞典でも作るのかな…

第二〇話 NO TITLE

第二章<序>

夕日が海に落ちて、一刻ほどが過ぎた。朱色^{あか}に染まっていた世界には夜の訪れが告げられ、淡い火を灯した^{とも}蠟燭も、心許ない長さになっっている。少し、話しすぎたか。

「…ねえ、おとうさん」

それまで受け身だった息子が声をかけてきた。その青い瞳には好奇心が見て取れる。

「それって、ほんとうにあった話なんだよね？」

「……」

私は恐らく微笑んでしまったのだろう。息子が怪訝そうな表情になったのが分かる。

「…本当だよ。信じられない？」

「…だって、騎士はきいたことあるけど…魔法とか精霊とか、そんなのないでしょう」

幼い頃の自分を見ているようだ。私も以前、そう言って父を困らせた覚えがある。

顔が綻んでしまうのは仕方ない。不可抗力、というやつだ。

「…明日、お父さんの実家に行けばわかるよ」

「おじいちゃんたちのお家につれてってくれるの!？」

「ああ。大きくなったエミルに会いたいそうだな。お話の続きも聞かせてもらえるぞ」

「ほんとう!? あさから行こうね! ぜったい!」

はしゃぐ息子エミルを抱き上げ、私はキッチンで夕食の支度をしている妻の元へ向かった。

今日、七月二十日はエミル五歳の誕生日。妻はたくさんの料理と格闘している。

「一週間前には献立を考え終わっていた」と豪語していた気もするが、実際に作るとなると、献立どおりにはいかないようだ。今の彼女はフライパンと踊っているようにも見える。

「フローラ、手伝わなくて大丈夫かい」

思わず声をかけてしまった。これも不可抗力というやつに違いない。きっとそうだ。

沸騰してはいけないものが沸騰していたり、水を吸ってはいけないものがふやけていたり。

妻一人の手には負えない有様なのに、この惨状を見て見ぬふりをするのは夫の名折れだ。

「…あなたあ…」

妻は今にも泣き出しそうな目で私を見つめた。「お願いします、手伝ってください」と言わんばかりの視線だ。

「チキン…チキンだけでいいの…。目を離さないで…っ」

この港町で、メインディッシュが魚ではなく鶏とは。ふんぱつしたな。

なるほどそれを焦がすわけにはいかない。見張り、引き受けた。

「ねー、おかあさん！ケーキは？ケーキはできてるの？」

私の腕の中でエミルが叫んだ。

料理がこの状態なら、ケーキはまだだろうと思うのだが。

妻は恥ずかしそうに微笑んで、エミルの頭を撫でに来た。

「氷室に置いてあるわ。ケーキを最初に作ったら料理が間に合わなくなっちゃって…」

——そういうことか。八時を回ってもディナーが始まらないわけは。

「フローラ、…レタスたちが温野菜になりつつあるよ」

「えっ？ああ！大変！！」

妻のフローラはどこか抜けている。天然、という部類に入るのだろう。

そういうところが気に入っているので問題はないのだが、初めて出会った頃はこんなにネジが取れた感じではなかった気がする。

あれか、失敗しないように細心の注意を払っていたのか。

「…なんだそれ、可愛すぎるな…」

「なあに、あなた？チキン出来上がったの？」

「…い、いや、そんなことは言っていない…」

私はエミルを食卓の椅子に座らせ、キッチンに入ってかまどの中を覗いてみる。

どうやら鶏の丸焼きにしたらしいのだが、見たところ、まだ生肉だ。

「フローラ…。これ、さっき入れたんじゃないかい？」
「そうよ？」

「なんか、あんまり見張ってなくてもよさそうだ」
「えっ、本当？？でも万が一焦げたら悲しいじゃない！ここにいて！」

「…あと少ししてから、また見に来るよ」
「そんなあ！？あなた、私とチキンを見捨てないで！」

半泣きでフライ返しと戯れる妻。肩まで伸びたふわふわの栗毛が男心を直撃する。

——が、ここは手出し無用だ。見捨てるのではない、放置するのだ。

ボロボロの母親を見た息子が、なぜか楽しそうに口を開いた。

「おかあさん、かわいいね」
「おっ、エミルもそう思うか？」

我ながらよくできた息子だ。ちゃんと母親の良さを理解している。妻は…、全然嬉しくなさそうだが。

「二人とも！おだてたって料理は美味しくないのよ！？」
「ははは」

「あなた！『ははは』じゃないわよ！助けて！」

「エミルに九月一日の話を聞かせてからな」

「あの話は長すぎるわ！夜が明けちゃう！」

「まさか」

「チキン！高かったの！お財布からお札がいっぱい出て行ったんだから！」

「ああ、見れば分かるよ。でかい鶏だな。火が通るまで時間たっぷり」

「あなた――」

「ははは」

食卓にどっかり腰を下ろし、私は横に座っていた息子を自分の膝に乗せた。

息子は瞳をランランと輝かせて私を見上げてくる。

「おはなしのつづき!？」

「ああ、ちょっと長いけどな」

妻がキッチンで何か叫んでいるが、聞こえないふりだ。

西の窓に向かって椅子をずらし、すっかり暗くなった海に目を向けさせる。

西を向いて話すのは祖父がそうしていたから。

西向きの部屋があるのは父がそう設計したから。

西。太陽の沈む海。曾祖父が生まれ育った世界。
限りなく禁忌を押し付けられた方角…。

「——忘れてはいけないよ。あの海の向こうで、立派に生きた人々のことを——」

息子の中に言葉を染み込ませるように、私はつぶやいた。

第二話 九月一日 - A・M・7:00 - (前書き)

改行ごとに一文字あけるようにしました。

今までの話も、少しずつ修正していききたいと思います。

第二話 九月一日 - A・M・7:00 -

<—>

——父上

早く帰ってきてね

僕、待ってるから

ずっとずっと

待ってるから

「——ル…、ウィル！ウィリアム！起きろ、朝だ！」

誰かにタオルケットをひっぺがされ、ウィリアムは跳ね起きた。聞き覚えのある深いバリトンの声はヘルベルトで、彼はまるで手慣れた母親のように続けた。

「エルもキュリーも早く起きろ！支度しろ！遅刻しても知らないぞ！」

覚醒しきつていない身体を無理に起こし、ウィリアムは懷中時計に手を伸ばす。

ヘルベルトがカーテンを勢いよく開け、差し込んだ朝日に目くらみそうになった。

「ヘル？俺さ…、寝言、口走ってなかったか？」

「ああ、何か言ってたけど聞こえなかったから安心しろ」

「…そっか。ならいい」

金の時計を片手で開くと、蓋の裏で両親が微笑みかけてくれる。この動作がウィリアムの日課となってから四年が経った。よつぱどことが無い限り、ウィリアムがこの動作を忘れることはない。その日その日を生き抜くために、毎朝活を入れるのだ。

内蓋に描かれているのは紺髪碧眼のハンサムな青年と、黒髪緑眼の美しい女性。両親は美男・美女である、と物心ついた時から自覚しているウィリアムだが、サリアはともかく自分がこの人たちの息子であるというのは自覚しにくい。父親と酷似した容姿が何よりの証拠だとはわかつている。しかしそうすると自分自身をハンサムだと認識するのと同じなので、そこから負のスパイラルが始まるのだ。自分はナルシストなのだろうか、と。

結局いつも、思考停止という終わりを迎える。それが一番手っ取

り早いからだ。

活を入れ終わったウィリアムは時計本体に視線を落とす。凝ったデザインの華針がキリのいい時間を指していた。

「……七時かあ」

入団式は八時から。あと少し寝ていたいなら危険を覚悟した方がいいな、とウィリアムは確信する。ヘルベルトも同じ考えなのか、タオルケットにへばりついて離れようとしないキュリアスをくすぐり回していた。ウィリアムたちが知る、キュリアス唯一の弱点である。その惨状たるや、筆舌に尽くしがたい。一言で片づけるなら、地獄絵図、と言ったところか。

「やめろお！た、たた頼むからやめてくれ！はひゃあひゃああああ」

「ほゝれほれ、さつさと起きろ」

「わかったよ！起きる！起きるからやめてえエエ——」

そんなことなどお構いなく、上階ではエラールがノロノロとメガネを探していた。彼の寝間着は真っ白で、それこそ「白衣で寝ているのかコイツは」と誤解されそうな出で立ちだ。サリアの天使部屋に入れても違和感が無さそうではある。間違っても、ウィリアムがそんな危険行為に及ぶことはないのだが。

手探りの末にようやくメガネを見つけ、彼は「にへら」と微笑んだ。イケメン台無し。その表情からは幼児仕様が疑われた。帰ってきてよエル、と叫んでしまいたいウィリアム。

「めがね、あつたあー」

「（おお！よしよし！えらいぞおっ！）」

ウィリアムは父親気取りで返答してやった。ただし、心の中で。しかし何故かエラールには通じてしまったようだ。にへら笑顔のまま、部屋の反対側にいるウィリアムに向かってメガネを差し出してくる。

「みてゝおとうさぁん！きょうのめがねゝ」

…なんで『今日の料理』みたいになっっているんだろう、とか突っ込んでいる場合ではない。エラールの幼児仕様を解除しなければ、入団式で酷いことになるそうである。

とは言え、ウィリアムはその術を知ら^{すべ}ない。自然の成り行きに任せるしかないさそうだ。

「こら！キュリー！タオルケットを離せ！」

「アヒヤハヤアハヤアア」

「きょうのめがねゝよくみえるゝ」

「…」

x

うわ、すげえ快適な目覚め。今はえーっと……七時か。

「ふわゝあ！」

大きく伸びをしている声を聞きつけたのか、扉の外からメイドが声をかけてきた。

「アラン様、お目覚めですか？」

「…ああ。朝食の用意を頼む。それと正装も出しておいでくれ」
「かしこまりました」

八時から入団式に出席して…俺の出番はない。ただ黙って、座っているだけ。新団員への国王挨拶はしっかり聞いておこう。俺も将来、言わなきゃならないだろうし。

十時半からは全貴族出席の国事会議。昼食会は国賓同席…か。なんで新年度早々、あいつの顔を見なきゃいけないんだ。苛々して食事どころじゃないかも。まじ勘弁して。

午後は雑務を終わらせて、ウィルたちのテストでも見に行こうか。夕食が済んだら二十時からまた国事会議。たぶん、騎士団上層部のお喋り会になるんだろうけど。

——なんというハードスケジュールなんだ。十六歳になったら、扱いが『ただの王子』から『世継ぎ』に変わった気がする。急すぎるぞ。

×

試す？あの国を？
シューン

「ああ、ディクセント政府からの命令だ。マーチにも通達したはずだが？」

このところ城に戻っていない。だから、連絡も聞いていない。

「…相変わらずだな。まだフェブラルを彷徨^{さまよ}っているのか？」

目的の記憶がなかなか手に入らないんだ。やはり、第二王子から直接入手するしかない。

「その第二王子だが、…ジューンにいるかもしれないぞ」

…本当か？

「マーチの手が及ぶエイプルには留まるはずがない。メイは地方分権国家で、余所者^{よそもの}は

見つけられやすいはずだ。騎士団という隠れ蓑のあるジューンが最適だろう」

…見つけたら、オークレッドは彼を殺すのか？

「いや、ヴェオラムの勢力下で事を起こすのは面倒だ。奴は『水』を隠し持っている」

…その情報はマーチにも届いた。これで、光と闇だけでなく、炎と水が揃ったことになる。

我々とジューンの力は互角になった…。振り出しに戻ったということか？

「それは『水』のレベルを確かめてからだ。その確認も命令には含まれている」

…私が、ジューンの要を突けばいいんだな？

「ああ。そのスキに私は『水』に接触を試みる。ヴェオラム『光』を抑えられ
るような手があるなら、

どんな事態になっても構わない」

人が死んでも？

「それはラツエル、君の良心に任せる」

そうか。適当に混乱させて、私は第二王子を探すぞ。

「それも君の自由だ。ヴェオラムを封じ込める自信があるなら、派
手に動いてもいい」

…わかった。それと、計画のために頼みたいことがあるんだが。

「…何だ？」

——手に入れてくれ。純度の高い、薔薇毒を。

第二話 九月一日 - A・M・7:00 - (後書き)

もしかしたら読みにくいでしょうか？

修正と言えば、近々、初話を大幅に書き換えるつもりです。

中学生の時に書いたものをそのまま投稿するなんてドアホウですよ
ね；

お目汚し、失礼しました←←

第三話 九月一日 - A・M・7:45 - (前書き)

場面がポンポン変わります。

<二>

カーテンによつて陽光の遮られた薄暗い一室。昨日まで無人だった、西塔天文台だ。

蒸し暑い空気に辟易しながら、サリアは難解な魔導書と格闘していた。古代語で書かれたそれは難しい以前に読むことすら出来ず、サリアには地獄の書と化している。

「……古代語、読めないんですけど」

「文字は今と同じだろう？ エルフ語よりマシではないか」

軽く返事をし、ヴェオラムはロープの下から白いチョークを取り出した。木の床に積もっていた埃を無視して、フリーハンドで綺麗な円を描く。

その手慣れた様子に自信を無くしたサリアは、分厚すぎる魔導書を閉じた。

魔法陣には次々に複雑な線が加わる。ヴェオラムは迷うことなく文字も入れ始めた。

「サリア、暑いのはわかるが我慢なさい。先程教えた一文は覚えたのか？」

「……はい、一応」

「発声してみなさい」

サリアが椅子から立ち上がる。ヴェオラムは手を止めて、小さな絵描きを見上げた。

「——エグレデエレ コーラム ミー・エゴ スム エレクトウス——」

「——待て。ミーンじゃない、メだ」

「メっ、メー！」

頭を抱えるヴェオラム。サリアは宙を見つめて「メ、メ」と発声練習を開始した。

焦る弟子を見かねた師匠がサラリと、

「Egr edere cor am me・Ego sum qui electus est ad a quam——」

「……先生のは速すぎて聞き取れません。しかも、文の意味を聞いてないんですけど」

不満そうな声を出したサリアを尻目に、ヴェオラムは魔法陣描きを再開する。

「意味など理解せずとも、正しく唱えれば精霊には伝わる。発音第一だ」

「えええ？」

観測器具で遊びたい衝動をぐっと抑えて、サリアは精霊を呼び出す呪文に向かうのだった。

×

「——ラ、ラツェル様ッ！」

暗く湿った地下牢に響いた声。囚われ人達に動揺が広がった。

牢屋番と思しき兵士が怯えながら出迎えたのは一人の青年。彼が一步足を踏み出すごとに、空間の闇が深まる。漆黒の姿が蠟燭の炎を揺らめかせ、囚人達は先を争うように鉄柵から離れた。

青年は人々にとつて恐怖そのものだった。誰もが抱える心の闇――『記憶』を操るのだ。

当代屈指の闇使いは恐れおののく囚人達を一瞥し、兵士に向き直った。

そして闇に溶けそうな深い声で、

「……移動魔法の使える『光』を一人、貸して欲しい。手枷はいらない」

「っは、はい！」

囚人達の視線が一人の少年に集まった。兵士が震える手で牢の鍵を開け、半泣きの少年を引きずり出す。牢に残された者達は同情の目で見送るが、恐怖の方が勝るのか、誰も動こうとしない。

目の前に出された十四、五歳の少年を一通り眺め、青年は黒い目を細めた。

「……『光』は、いつ見ても眩しいな」

謎の発言に困惑した表情を浮かべる少年。兵士も青年から遠ざかりつつ、戸惑っていた。

青年は灰色の髪を揺らして出口に向かう。少しの間ぼうつ然としていた少年が弾かれたように後を追いかけると、地上に出る階段の所で青年が待っていた。

少年はすぐに謝罪の言葉を述べる。それを無視して、青年は顔色一つ変えずに口を開いた。

「名前は何だ」

「えっ、あのっ、レイです」

少しの沈黙が流れる。青年の視線に射竦められたのか、少年は動かない。

「レイか」と呟いて、青年はまた問いかけた。

「呼ばれた理由はわかるか？」

「……ぼ、僕以外の『光』に、見つからないようにするため……？」

弱々しく答えた少年をおいて、青年は階段を上る。

「わかってるならいい。黙ってついてこい、レイ」

「あ、はいッ」

×

『王立騎士団本部』

堅苦しいネーミングの建物はカストル城の南西に位置している。

レンガ造りの二階建てで、威厳と威圧感は抜群だ。各課の長や副長の執務室が入っており、他にも様々な機能を備えているという。

新入生達が集まっているのは騎士団本部の前庭。庭と言っても花などは一切生えていない。言うなれば闘技場だ。事実、戦闘課の初回テストはここで行われる。

新入生よりやや軽い雰囲気を持つ上級生達も集まってきた。彼らの新学期テストは一週間後にあるので、緊張のくき>の字もないの

だった。ガチガチに強張る新入生を見ては、懐かしそうな顔をしている。俺たちにもあんな時代があったなあ、という感じだ。

二十歳以上のいわゆる「団員」は、特別な役職に就いている者しか出席しない。宿舎で簡単な新年度挨拶があったあと、すぐに通常訓練開始となる。

「なあウィル、入団式まで時間余ったぞ」

「文句言うなキュリー。十五分前行動って言葉知らないのか？」

「知るわけないだろ。スパイは自由人だからな！」

「……国家の束縛は無視なのかよ」

長髪をきつちり結ったキュリアスは、『キュリー』と言うより『キュリアス姉さん』といった趣がある。性根は全く変わっていないので、アンバランスこの上ないのだが。

エラールの幼児仕様は無事に解除された。彼は今、昨日介抱したシーク・ミラージュと話している。二人はどうやら顔見知りらしく、親しげな会話内容だ。

「医師養成学校での失敗体験が活かせてないみたいだな。普通、階段でこけるかねえ？」

「ぼつ、僕だつて一生懸命やってるんだよ！？」

「それは知ってるけどさ……」

「僕をただのドジっ子だと思って甘く見ないでよね！いつかエルを抜いてやるんだから！」

「意気込みだけは買うけど、色々と気を付けた方がよくないか？」

「ムキーンッ」

ヘルベルトは集まりつつある新入生達を見回して、何かを探している。「何してるんだ」とウィリアムが問いかけると、彼は腕を組

んで首を傾げた。

「……参謀課のやつ探してるんだけど、かなり希少価値が高いみたいだ。全然いない」

「あああ、確かに……」

ワインレッドのクロスタイはなかなか見つからない。キュリアスによると今年の新入生は四四五人で、参謀課は三十人にも満たないそうだ。ウィリアムは任命制の凄さを改めて思い知る。

ヘルベルトが寂しそうな声で、ポツリと呟いた。

「……全体の六パーセントか」

「計算するなよ」

即座に突っ込んでしまったウィリアム。？ - X班のツッコミ担当になってしまった彼は、瞬時の判断が求められるようになった。ツッコミ要素満載のキュリアスにはスルー攻撃だが。

ヘルベルトは貴族に似合わぬ情けない形相でウィリアムに詰め寄った。

「だって六パーセントだぞ？参謀課、まじアウェーじゃん」

「……スパイ課だって四、五十人しかないだろ」

「あいつらは論外だよ。なんか目立つもん」

「それは否定しないけどさ……」

暇潰しに出かけていったキュリアスを筆頭に、目の端々でループタイが跳ねている。スパイ志望なら空気のように振る舞えるはずだが、好奇心旺盛な彼らには何を言っても無駄のようだ。彼らを追いかける班長らしき生徒たちが、哀れでならない。ウィリアムも班長としての責任を自覚し、足音を忍ばせてキュリアスのフードを捕ま

えた。

「ちょ！？何するんだよウィル！首が絞まる！」

「少しは落ち着け！つか、もう整列開始しないとヤバイだろうが！」

「せっかちな、班長ってやつは！」

「協調性ないな、スパイってやつは！」

キュリアスがぎゃあぎゃあ騒ぐのを全て無視し、ウィリアムは彼を拘束するのだった。

第三話 九月一日 - A・M・7:45 - (後書き)

続話のストックは溜まってない、

初話は改稿できてない。

ここ半月、私は一体何をしていたんだorz

受験生やめたいです；

第三話 九月一日 - A・M・7:50 - (前書き)

うおおおお

やっと更新できました！

第二十話のローストチキン丸焦げに違いない(^ω^ ;)

<三>

「……さて、描けたぞ」

コンコンと響いていたチョークの音が止み、ヴェオラムがゆつくりと立ち上がった。

床には三つの魔法陣が描かれている。サイズは手の平より一回り大きく、子猫ぐらいなら入るかもしれない、とサリアは適当に目測した。

ヴェオラムは床に置いていた燭台を手に、サリアの様子を窺う。

「精霊の勢力図は覚えたか？ 図入りの書を選んでおいたから大丈夫だと思うが」

「あー、炎と水は仲が悪い……光と闇も同じく……みたいな感じでいいんでしょうか？」

自信のかけらも感じられないサリアの言葉を聞いて、ヴェオラムはしばし固まる。

「……間違いではないが……。すまぬ、あまりの簡略化に驚きを隠せない」

「ええっと、誉められてるんですかね？」

少し嬉しそうに微笑んだサリア。

反応に困るボケだたと戸惑うヴェオラム。

敢えて空気を読まずに笑う弟子。

ああ冗談ではないのかと理解する師匠。

授業はなかなか進まない。

「そなたの能力の偏りには気付いていた。……なるほど、読図力に期待するのはやめよう」

「ちよつと！僕を見放さないでくださいね！？」

両手に抱えている巨大な魔導書のせいでサリアがますます小さく見えた。

ヴェオラムは思案するような顔になって、

「見放したりはしない。だが図だけでは理解できないとなると、古代語は必須だな……」

明らかに拒否反応を示すサリア。萎縮していく様はなかなか哀れだった。

「僕、古代語を見ているだけで目が回りますっ」

「……だからと言って、安易に翻訳版は渡せない。今の言葉に魔力は宿らないからだ」

半泣き状態のサリアを見つめたあと、ヴェオラムはゆっくり口を開いた。

「兄殿のルームメイトにカーター家の者がいただろう。古代語は彼に習うというのもありかもしれぬ」

「……え、ヘルって古代語できるんですか？どうしてそれを？」

好奇心を含んだサリアの声。ヴェオラムは遠い目で天井を見上げた。

「彼の父親が、騎士団の生徒としてジューンにいたことがあるのだ。古代語の知識は私の恩師をも上回っていた覚えがある。きっと息子も相当な語学力を持っているだろう」

「へえ、じゃあ今夜あたりに聞いてみようかな。あれ……生徒として？」

「契約退団生クアントだったということだ。それにしても息子はなぜ一般生徒なのだ？領地は一体どうするつもりなのか……」

首を傾げたヴェオラムはしばらく思索に耽り続けた。

×

早足にならなければ、目の前の青年に追いつけない。

少年——レイは、自分がどれだけぼろの服を着ているかなどと気にしている暇もなく、先行する青年のあとを追っていた。

地下牢から地上に出て初めに感じたのは、時間の感覚が狂っていたことだ。陽光など決して差すことのない地下牢では、今が昼なのか夜なのか見当もつかない。幽閉された当初は食事の間隔や見張り交代時間を利用して昼夜を認識していたが、それは遙か昔のこととなっていた。

少し強すぎる陽光が視界を奪うため、レイは黒いローブを追うのだけで精一杯だ。

床石が上等なものに変わった。壁には装飾が施されており、花のような香りが漂う。壁に掛けられた鏡をちらりと見て、レイは自分の茶髪がいかにボサボサであるかを知った。

どうやら城の廊下を進んでいるようで、すれ違う人々の視線が痛

い。みすばらしい少年が宮廷魔法使いのあとを追っているのだ、周囲も混乱しているのだろっ、とレイは思った。

「あ、あの、ラツエル様、……どこまで……行くんですか？」

恐る恐る聞いてみたが、青年は返事をしない。レイの存在を無視しているような態度で黙々と進み続ける。奴隷に口はいらない、という圧倒的な拒絶だった。

今なら逃げられるだろうか——と出来もしないことを考えてしまい、レイは苦笑した。

移動魔法が使えると言っても、行ったことがある場所や目印となる物がある場所にしか安全な移動は出来ないのだ。適当に魔法を発動しようものなら、海の真上に移動してしまう可能性だってあり得る。最悪、集中不足で身体がバラバラになるという事例もあった。

（家に帰ったって……どうせまた捕まるんだろっな）

光のない地下牢に逆戻り、という可能性を考えただけで、レイの目頭が熱くなった。

（今は何年の何月何日なんだろう。家に帰りたい。母さんたちに会いたい……）

「——帰ってもいいが仕事を終えてからにしろ」

突然、前方から感情のない声を浴びせられた。

心を読まれた驚きと帰宅許可の衝撃で、レイは足を止めてしまう。青年も足を止め、ゆっくりと振り返った。無表情ながらも何故か恐ろしいとは思わない。

「お前の故郷は『アルゼの戦い』以降、エイプリル領だ。家に帰っても捕まることはない」

灰色がかった前髪の奥で切れ長の瞳が揺れている。『世界最悪の魔法使い』を目の前にしていることなど忘れ、レイは思わずさがるような声で言った。

「か……帰ってもいいんですか？」

「帰りたいのなら帰ればいい。『光』や『風』にとってあの地下牢は拷問にも等しいだろう。光は入らず、空気は流れることを知らない。あんな所に戻ってどうするつもりだ」

信じられないという面持ちのレイは無表情の青年を凝視した。

青年は大きなフードの下から庭の陽光に顔を向け、眩しそうに目を細めている。

「失礼ですが……あ、あなたは本当に、ラッセル・クロウ……ですか？」

レイの口から思わず飛び出た疑問。しまった、と思ったときにはもう遅かった。

この青年があまりにも噂とかけ離れているので、問わずにはいられなかったのだ。

レイを捉えた青年の瞳は暗かったが、その顔にはわずかな驚きが見て取れた。

「——なぜ皆同じ質問をする？」

「えっ……」

返答に困るレイ。目を伏せた直後に聞いたのは、青年が再び歩き出す音だった。

第三話 九月一日 - A・M・7:50 - (後書き)

やっと受験戦争から離脱することが出来ました……涙
なんだこの解放感！今なら昇天できるッ

更新できないにも関わらず何故か少しずつ回る
アクセスカウンターを見ては、力を頂いていました^^
感謝感謝です！

入学準備の合間にドカドカ更新できたらいいなあww

第二四話 九月一日 - A・M・7:55 - (前書き)

魔法使いサイド多めです。

<四>

太陽が少しずつ高くなる。

八時を待ちながら、生徒たちは緊張の面持ちで直立していた。

ウィリアムたち？組は前のほうに並ぶため、騎士団本部前に組み上げられた演壇がよく見える。王族や騎士団上層部が、生徒より一段高い位置に陣取るわけだ。

X班は？組の中でも右側に並んでいて、すぐそばには三年生が迫っている。ウィリアムは、三年生の隣に並ばなければならないM班やZ班を気の毒に思った。

「うっ、顔が焼ける……」

後方からキュリアスのうめきが聞こえてきた。女装専門と言っているだけあって、彼は美容に余念がない。日焼けは極力避けたいようだった。

キュリアスの後ろからエラールが、

「肌は再生するから気にするなよ。それよりさ、お前の金髪が眩しすぎるんだけど」

「え、何？俺が美しすぎて輝いてるって？」

「ああ、ウザいくらいにな。目がイカレそうだからフード被ってくれないかな？」

「やだよ、なんで初^{しよ}端^{はな}から服装違反しなきゃならないんだ」

緊張感の欠片もない会話を聞き、ウィリアムは思わずため息をつく。

「あ！ いま気付いたんだけど、ヘルのせいで前が見えない！」

「そんなこと言われたってなあ…… 給料入ったら厚底ブーツでも買えば？」

「眩しい……。 班長、キュリーをどうにかしてくれ」

周囲の緊張などお構いなしの三人。 全力で他人のふりをしたくなるウィリアムだった。

「とりあえずお前ら、黙ろうか」

×

「ここで待っている。 何があっても動くな」

豪華な扉の前に独り残され、レイは急に心細くなった。 城の奥深くまで入り込んだためか、人々の視線は先程より格段に厳しい。

（……ここはあの人の部屋なんだろうか……？）

どうであるにせよ、ひどく場違いであることは言うまでもない。 扉と反対側の壁を背にしながら、レイはひたすら時が過ぎるのを待った。

（あの人、本当にラツェル・クロウなのかな。 『アルゼの戦い』で南方諸国を震え上がらせた闇使いが、奴隷を簡単に逃がすなんて考

えられない。でも……嘘をついているようには見えなかったな……)

垢抜けない自分を隠すように、レイは身を小さくした。視線を足元に落とせば、擦り切れてぼろぼろの靴が目に入る。やせ細った手足は野兔を連想させた。

(家に帰れる……？ 本当に？ もう二度と、マーチで働かされることはない？)

孤独の上で不安と期待が入り混じる。

ぎゅっと握りしめた拳は情けないほどに小さくて、レイは自分の非力さを感じた。

(みんなはまだ牢の中だというのに、僕は一人で逃げようとしている。僕は、……僕は弱い人間だな……)

悔し涙が流れ落ちるのと同時に、目の前でハスキーな声が響いた。

「——ここで何をしている？」

ビクツと身を震わせ、レイはとっさに顔を上げた。

いつの間に現れたのか、扉の前には黒いローブをまとった壮年の男が立っていた。目深にかぶったフードから、赤みがかった茶色の髪がのぞく。前髪の奥にある深紅の瞳に射竦められて、レイは言葉を失った。

闇使いと対峙した時とは別種の、恐怖。

「……っ」

謎の男はレイを上から下まで観察した後、おもむろに口を開いた。

「なるほど、『光』か。マーチの地下牢は品揃えが豊富だな。『光』自体が珍しいのに、こんなに汚れた者まで揃えているとは」

レイの恐怖などお構いなしに、男は一步前進した。反射的に後ずさるうとしたレイだが、背後の壁に阻まれて思考が停止する。

男がさらに一步踏み出した。いよいよ身動きが取れなくなったレイを見て、男は嘲笑するかのようにつぶやいた。

「身を守る術すべを持たない『光』は、見ていて憐れでしかないな。どうだ、暗闇が支配する地下牢生活は楽しかったか？」

あまりの言われように、レイは拳を握りしめる。自分だけでなく光使い全体を馬鹿にされた気がして、たまらなく悔しかった。

震える瞳で、思わず男を睨みつけたレイ。その様子に男は気分を害したようだった。

「大人しく『光ラテリスの森』に籠こもっていればいいものを……、光エーテルの精霊は何を考えているのやら。正義感にあふれた忌々しい人間が増えるばかり——」

レイは、男の言葉を最後まで聞くことができなかった。男の右手がレイの細い首を捕らえ、壁に押し付けたからだ。一瞬意識が飛びそうになり、レイは目に涙をにじませた。

「……お前がラツェルの使役でなければ、消し炭にしているところだ。ヴェオラムと同じような目で私を見るな。不愉快以外の何物でもない」

男が低くかすれた声でうなった。憎悪の感情をむき出しにして、

レイの首をつかむ右手に力を込める。その手の甲には、血のようなもので魔法陣が描かれていた。

恐怖と苦痛に支配されながらも、レイは男の言葉を頭に入れようと懸命に耐えた。

（——ヴェオラムって……、ジューンの……？）

全身から力が抜けていく。レイの体は男の腕一本によって支えられているも同然だった。

火のように熱い手のひらを首元に感じながら、レイは冷や汗をかいた。

（この人は……まさか——！）

「——オークレッド、もういいだろう。レイが死んでしまう」

妙に落ち着き払った声が聞こえた刹那、レイは支えを失って足元から床に崩れ落ちた。激しく咳き込んで、自制できない涙があふれ出す。恐ろしさで目も開けられない。

自分を救ってくれた声の主が「地上最悪」の魔法使いであることなど、今のレイにとってはどうでもよかった。それよりも「地上最強」の逆鱗に触れてしまった後悔が、焼け付くように熱い首元が、死の恐怖が、レイの全てを支配していた。

「『光』を見るとすぐに手を上げる……。あなたの悪い癖だ、オークレッド」

開きつぱなしだった扉を後ろ手に閉め、闇使いの青年は「『光』は貴重なんだぞ」と付け加えた。咳き込み続けるレイの傍らに膝をつき、その背中をさすってやる。

オークレッドと呼ばれた男は自嘲的な笑みをもらし、

「そうだな……、私の悪い癖だ」

独特のしわがれ声でそう言って、ラツエルに一瞥をくれた。

「……本来なら、『闇』である君が『光』を嫌うのが自然なのだがな」

それを聞いたレイが激しくビクついたが、当のラツエルは無表情のまま言い放つ。

「闇の精霊^{デューカス}が光の精霊^{エーテル}を嫌っているだけだ。私は別にどうとも思っていない」

言いながら、ラツエルはレイに小さめの黒ローブを差し出した。涙目のレイが困惑した様子で受け取ると、ラツエルはゆっくりと立ち上がった。

「仕事が終わるまで、それを着ている。嫌ってはいないが……『光』は眩しいんだ」

×

「——左の魔法陣に光の精霊^{エーテル}、真ん中に炎、右に闇の並びで召喚する」

暑さでボーっとしながら説明を聞いているサリア。

古代語が全く発音できなかったため、本日の練習は取り止めとなった。「見学」というところまでレベルを下げられ、泣きたい気持ちになるのを必死にこらえる。

「……えーと、精霊の種類と並びに意味はあるんですか？」

どうせなら水か氷の精霊を呼び出して、ウフアハハと涼みたいサラアだった。そんなサラアの心情を汲む様子もなく、ヴェオラムは一番右の魔法陣に向かう。

「光と闇の精霊を呼び出すのは、『光』属性である私への態度を対比するため。炎を呼び出すのは、『水』属性であるそなたへの態度を見るためだ。並びの意味は召喚すればわかる」

「水の精霊は召喚しないんですか？」
オンディーヌ

サラアの問いかけに、ヴェオラムは振り向かないまま沈黙した。考え事かなとサラアが眺めていると、

「——それは呪文を覚えてから、自分で呼び出さない」

まるで突き放すようにピシャリと言い渡された。怒っている声ではないものの、ヴェオラムの表情がわからないためサラアは少々不安になってしまう。

ヴェオラムは魔法陣のそばに置いていた燭台をどけ、真面目な顔でクルリと振り向いた。

「百聞は一見に如かず、だ。さっそく呼び出すぞ」

「は、はい！」

ヴェオラムの投げた言葉がサラアの不安を吹き飛ばした。

暗い中で黒ローブを着ていながらも、なぜか姿が浮かび上がるヴェオラム。そんなフアンタスティック師匠が、サリアには頼もしく思えて仕方がない。

ヴェオラムはローブの裾を正して魔法陣の正面に立ち、左手をかざした。

「Spiritus tenebrarum, egredere
coram me. Ego sum qui electus
est ad lumine——」

全く理解できない言葉が流れていく。右の魔法陣に向かっているのだから「闇の精霊さんおいでなさい」的な意味だろうと、サリアは自分なりに解釈した。

ヴェオラムの左手から生み出された白い光が魔法陣に注がれ、チヨークで描かれた外縁が輝きだす。外縁からはやがて筒状の光が立ち上り、天井まで達した。

しかし意外なことに……——何も現れない。

(……し、失敗!?)

サリアの焦りに気づいていないらしく、ヴェオラムは何事も無かったかのように中央の魔法陣に向かった。同じようにペラペーラと古代語を唱え、魔法陣に魔力を注ぐ。

筒状の光が天井に達した瞬間、目もくらむような光が部屋中に満ちた。思わず目をつぶってしまったサリアが恐る恐る目を開けると、透明な筒の中には赤い……何かが浮いていた。

『——よう！ 俺になんか用か?』

よくよく見れば、それは赤い肌の少年だった。やんちゃ、と形容

するには目つきが悪すぎる。文字通り手のひらサイズで、ツンツン尖がった赤い髪と長い耳が印象的だ。全身に真っ赤な布をグルグル巻いているが、お世辞にも衣装とは呼べないクオリティだった。

『いつ精霊師マスターに呼ばれるか分かんねえから、さっさと用件言ってくれ！』

どうやら急いでいるらしい。「マスター？」とサリアがつぶやいた途端、炎の精霊サフランデルは矢のような視線をサリアに向けてきた。

『はああっ！？　なんで水がいるんだよ！！　やる気が一瞬にして失せたぜ！！！！』

「えっ……！　な、なに？　なんで？」

『しかも無駄に魔力強えし！　だああ忌々しい！　せっかく暑くて過ごしやすい部屋だったのに、お前のせいで台無しだ！』

悪魔の形相で全くいわれのない暴言を吐かれ、サリアは戸惑うしかない。

救いを求めて師匠に視線を送ると、ヴェオラムは涼しい顔で言った。

「——つまり、そういうことだ」

さらに混乱したサリアを放っておき、ヴェオラムは最後の魔法陣に向かった。しかしなぜか少しだけ動きを止め、左手を開いたり握ったりしている。

「……せ、先生？」
「……」

サラマンデルの暴言を聞き流しつつ、サリアは震える声で呼びかけた。サリアの呼びかけに応え何かを決心したように、ヴェオラムは左手をぐっと握りしめる。

ゆっくりと魔法陣に手をかざし、大きく息を吸い込んだ。

「Spiritus lumine, egredere cor
am me. Ego sum qui electus est
ad lumine——」

「——うわあっ!？」

ヴェオラムが呪文を唱え終える前に、魔法陣から強烈な光が放たれた。サリアは前回以上の不意打ちに畏縮し、サラマンデルは何やら非難の声を上げる。

ヴェオラムが平然と見下ろす光の中から聞こえたのは、穏やかな男性の声だった。

『——お呼びでしょうか、マスター』

サリアは現れた精霊を正視することができなかった。暗い部屋の中で、光の精霊は眩しすぎたのだ。

ヴェオラムは目を細めることもなく、淡々と口を開いた。

「……少し光度を下げなさい」

「かしこまりました、マスター」

光が徐々に弱まり、サリアはやっと精霊の姿を確認することができた。

足元まで伸びる見事な銀髪。驚くほど整った若々しい顔は、エルフを連想させる。白く重厚な衣装は格調高く、彼を荘厳たらしめていた。

「……以前呼び出した者にも言ったが、私をマスターと呼ぶのはやめてくれないか」

ヴェオラムが困った顔でそういうと、光の精霊はエーテル恭しく腰を折る。

『申し訳ありません。ですが、貴方が我々のマスターであるのは明白です』

「……身に覚えがないな」
『御冗談を……。思い当たる節はいくらでもおありでしょう』

謎の会話に気を取られていたサリアは、右の魔法陣が光り始めていることに気付かなかった。閃光と共に塔の空気が震え、サリアは三度、視界を奪われる。

「ちょっともう、なんなの!？」

誰に言うでもなく悪態をついたサリア。涙のにじむ瞳で最初の魔法陣を見やると、エーテルにそっくりな姿の青年がいた。ただし、エーテルが白ならばこちらは黒だ。周りを囲むヴェオラムの魔法陣がなければ、闇に溶けていきそうな風体だった。その顔に表情というものは見られない。

『——用件だけ言え。余計な言葉を発するな』

無礼極まりない発言に、ヴェオラムでなくエーテルが反応した。

『おや、デューカス。あなたが一番最初に呼ばれたのでは？ 今頃到着ですか？』

『……黙れエーテル。フライングをした貴様に言われる筋合いはな

い
』

『ちよつとお前ら！ 俺を挟んでケンカするのはやめようぜ！？』

精霊の並びの意味が、何となく理解できたサリアだった。対極の精霊を隣同士にすると色々面倒なのだろう。今回はワンクッションとして、炎の精霊が犠牲になったのだ。

『サラマンデル、あなたはもう少し言葉遣いに気を付けてはいかがです？』

『説教はやめろって！ 俺たちはこの喋り方じゃないと気が狂いそうなんだ！』

『……ふん、おせっかいエーテル。いつまでもエルフから親離れできない腰抜けが』

『何かおっしゃいましたか？ さつさと家出して路頭に迷っている誰かさん』

サリアはハラハラしながら精霊たちのやり取りを見守る。
焦る弟子に向かって、ヴェオラムは飄々と言い放った。

「——つまり、そういうことだ」

第二四話 九月一日 - A・M・7:55 - (後書き)

言い訳するのもあれなのですが…

忙しさとスランプに襲われておりました。

決して作品を放棄していたわけではないのです？

冬休みに入って時間ができたので、とりあえず更新してみました。

続きの妄想は膨らんでいます、それを文章化できるかは謎です（

滝汗

第二五話 九月一日 - A・M・8:00 - (前書き)

場面ごとの温度差があります。

<五>

カストル城の鐘楼が八時の鐘を鳴らし始め、騎士団本部の重厚な扉がおもむろに開いた。中から何者かが出てきたようだが、目の前にある演壇のせいで見えない。

キュリアスがピョンピョン跳ねている気配を無視し、ウィリアムは登場した何者かが演壇に登るのを待った。

数秒後、演壇から皆を見下ろしたのは。

「（……かわいい）」

ヘルベルトが、百パーセント空気を読まないつぶやきを漏らす。演壇に登ってきたのはなんと、三頭の大型犬。白や黒、小麦色のフサフサな毛は何とも可愛らしく、キリツと引き締まった表情とのバランスが絶妙だ。ウィリアムは記憶の引き出しを探り、彼らが牧羊に使われるコリーという犬種であることを思い出した。

「（あいつら団長の犬で、左からウィンディー、サニー、レイニーって名前なんだぞ！）」

聞かれてもいない情報を自信たっぷり吐き出したキュリアス。とりあえず跳ねるのをやめてくれ、と念じるウィリアム。犬の可愛さに絆^{ほだ}されたらしいヘルベルト。恐らく何も見えていないであろうエラー。

頭の中が疑問符だらけになっている一年生。それを見て、にやにや笑う上級生。

そんな異様な空間を切り裂くように、サニーが天に向かって遠吠えした。

——ザッ

その瞬間、上級生たちが一斉に姿勢を正す。やや遅れ気味に反応した一年生は、とりあえず直立不動の姿勢を取った。

キュリアスが跳ねなくなったことに安堵したウィリアム。演壇に上がる複数人の足音に気付き、少し緊張する。今度は人間のような数人の騎士団員のあとに、近衛兵をつけたアレキスとアランが見えた。昨日と一系^{たが}違わぬ衣装を着ているアランを見て、一年生たちはネタバレ感を覚えずにはられない。

王族用の豪華な椅子を中心にして、演壇に並べられていた十脚ほどの椅子は徐々に埋まっていったが、最後の一人だけは席につかずの前に進んだ。目立つ亜麻色の巻き毛よりも、その童顔が印象的な……。

犬たちが退場するのと入れ替わりで前に出た副団長（仮）。数日前とは全く違う真剣な表情で凜々しいのだが、ウィリアムは「童顔と落書き癖さえ無ければなあ」と失礼極まりないことを思っていた。

「——ただ今より、ジューン国 王立騎士団、第六十一期入団式を開会する」

今度は一年生も反射的に敬礼をする。敬礼に関してはジューン式の敬礼をするよう事前に通達があったので、国外出身者も間違えることはなかった。右手を左肩に当て、左腕をまつすぐ下におろすだけのシンプルなものだが、指先を伸ばすとか右肘^{ひじ}を上げないとか、注意事項が満載だ。

副団長が席につくと同時に敬礼をやめる。お次はその隣に座っていた青年が立ちあがって、演壇の右脇に進んだ。どうやら司会進行

役を務めるようだ。副団長よりも緩くウェーブのかかったセミロングの茶髪を、首元で束ねている。

後ろで腕を組み、彼はよく通る声で言った。

「国王アレキス・リーベル・ヴェーナ・ジェミニ様、ならびに、第一王子アランフェルド・ローレム・ブルーヴィア・ジェミニ様よりお言葉をいただく」

「（……誰だつて？）」

ヘルベルトが敢えて問いかけ、「アランの本名って仰々しいよな」とキュリアスが不敬な発言をもって答えた。ヘルベルトは納得がいかない様子で続けて、

「（ローレム・ブルーヴィアって、古代語で『慈雨』って意味だぞ？ あいつが？）」

「（慈雨！？ 俺はてっきり『元気百倍』とかって意味だとばかり……）」

キュリアスの冗談（？）のせいで吹き出しそうになったウィリアムは、余計なことを言い出したヘルベルトに肘鉄砲をかまして黙らせた。

不敬罪で投獄なんてことになったら、それこそ『慈雨』様のお慈悲にすぎるしかない。

自分のミドルネームが噂されていることなど知らないアランは、なぜ名前を呼ばれたのかについて真剣に悩んでいた。

（あれ……俺って発言する予定じゃなかったよな？）

頭の中で入団式のスケジュールを確認するが、やはり王子挨拶なんて予定はない。国王挨拶をしっかり聞いて、将来に備えようと思っていたのだ。挨拶の文言など、一言も考えていないアランだった。

（おいおい、どうなってるんだ、ランス！）

司会進行役の副参謀長に詰問の視線を送る。相手から返ってきたのは、「挨拶ぐらい即興でできるよな？」という挑戦的な笑みだった。彼の後ろにいる生徒約二千人の視線も相まって、アランにプレッシャーをかける。

（うおおお、なんで嫌がらせされてるんだ俺？ いや、うん、心当たりしかないけど）

幼少の頃に迷惑かけまくった思い出が浮かんできて、意気消沈するアラン。

予定が変更されたにもかかわらず、団長をはじめ、他の重役たちは「まあ、挨拶ぐらいしてもいいんじゃないのか」という雰囲気である。救いなど、ない。

父王が演壇に進むのを視界に捉えながら、アランはフリーダムな騎士団上層部に辟易するしかなかった。

副参謀長はもう気持ちを仕事モードに切り替えて前を向いている。司会進行役は、演壇上の人物が襲われたとき身を呈してかばう役目を背負っているが、アランは「積年の恨み！」と言って彼に襲われても不思議じゃないな、と内心で沈んでいた。

生徒たちが父王に敬礼したのち「休め」のポーズをとったところで、やっと顔を上げる。アランには、生徒たちが父王の存在感到畏怖の念を抱いたのがわかった。

「——第二百二十期入団生の諸君、君たちの勇氣に感謝する。そしてその行動力に称賛を」

何の迷いもない口調。溢れ出る威厳。父の後ろ姿はいつも以上に立派で、アランはさらに自信喪失するのだった。光り輝く銀髪が格好良すぎて、思わず目を細める。

（俺も髪伸ばしてみたら、父上みたいな雰囲気出るかな？ いや、関係ないし……どう考えたって似合わないな）

形から真似る作戦を即座に却下する。

「諸君はこれからジューンの剣となり、また盾となる。それは、生半可な覚悟では到底乗り越え得ない苦難が諸君に降りかかることを意味している。『殺す』ことがいかに容易く、^{たやす}『守る』ことがいかに困難であるかを知るだろう。『再会』の儚さと、『別れ』の残酷さに触れるだろう」

神妙な顔で聞き入る生徒たち。そんな生徒の顔を見ながら、アランはアイデア不足に喘いでいた。序盤だというのに、予想以上に重い話が展開されているからだ。

「剣を振るうことをためらい、後ずさる時もあるだろう。自分の任務に疑問を抱き、進むべき道に迷う時もあるだろう。しかし……」

国王は一度間を置いて、

「各々が守りたいものを胸に秘め、今この場に立っているのなら、歩みを止めてはいけない。下を向いて、立ち止まっていけない。……停滞が生むのは、逃げと諦めだ。数年前、私は何度も立ち止まりかけた……『アルゼ』は長かった——」

場が、水を打ったように静まり返った。

×

『おいその老いぼれ、用件が無いなら私は帰るぞ』

『デューカス！ 我々のマスターに向かって何という口のきき方を！』

『——少し黙っているエーテル。貴様らはいつもいつも……』

『なあ、じーさん！ 俺も帰っていいか！？』

精霊たちのやり取りを眺めていたサリアは、彼らの様子を絵に描きたくてうずうずしていた。炎の精霊サラマンデルに悪態をつかれることなど、とつくに慣れてしまっている。

「スケッチブック、持ってきてないよお」

涙交じりにつぶやくと、お約束のようにサラマンデルから茶々が入った。

『うるさいぞ！ ガキは黙って昼寝してろ！』

「君だって子どもじゃないか！」

『はああああ！？ 俺達が世界の創成期から存在してるって知って

て言っ てんのか?!」

「え、それって凄くない!？」

『ほら見るやつぱり知らねーじゃんかよお！ うわこっちに近づいて来んなああ!』

何だかんだで愉快的な組み合わせだ、と含み笑いするヴェオラム。
闇の精霊^{デューカス}が色々と文句を言っているが、勝手に逃げられる心配はないので完全に無視だ。

サラマンデルに近寄って行くサリアに、優しく声をかける。

「サリア、それ以上近寄らないであげなさい。炎と水が触れ合えば、両者とも消滅してしまう。そなたに宿る水の精霊^{オンディーヌ}はそなたの魂に守られるから、そのサラマンデルだけ消えることになるぞ」

「そうなんですか？ 別に触るつもりはありませんよ？」

『——馬鹿かくそガキ！ 近づいたらそれだけ接触の可能性が高まるだろうが!』

サラマンデルが文字通り火を噴いた。彼を捕らえている透明な筒の中が、大炎上する。

明らかに室温が高くなって、サリアは萎びた植物のように床にへたりと座り込んだ。机の上から魔導書を引きずり下ろし、精霊の相関図のページを開く。

【SALAMANDER ↓ × ↑ ONDINE】

両者の間に記されている「×」は「消滅」の意味だと理解し、疲れた顔でうなずくサリア。と同時に、別の記号にも目を向ける。

【ETHER DUCASSE】

「あのお……、これってどういう意味なんですか？」

おずおずと差し出された魔導書に目を通し、ヴェオラムは微笑んだ。腕を組んで、デューカスを見遣る。デューカスが身構えたのは言うまでもない。

「エーテルとデューカスが接触するとどうなるか、この子に説明しなさい」

デューカスは即座に背を向けた。が、足元の魔法陣が一瞬輝き、デューカスはあっけなく召喚者に向き合わされた。ちよつと気の毒だな、と思うサリア。

エーテルはヴェオラムと同じように腕を組んで、監視体制に入っている。そんな様子にちらと視線をやったあと、デューカスはサリアの背後の壁に向かって話し始めた。

『……我々が接触したらどうなるのか……。レベルの低い方が、レベルの高い方になるだけだ』

「——え、ごめんよくわからない……」

『理解できないなら、今ここで実践してもいい』

そう言つて、デューカスはエーテルに挑発の視線を投げた。エーテルはその視線を受け流して冷静に言い返す。

『あなたに下された命令は実践ではなく、説明では？』

『頭の固い奴は面倒だな。実践が一番の説明になるとは思わないのか？……なるほど、自信が無いのか』

『——まさか。マスターの御前で、闇に与する^{くみ}ようなマネは致しません』

両者の間に火花が散る。サラマンデルが『またかよ……』と嘆いて、

『ついにお前ら、そこから出られねーじゃん？　くどっちになるでSHOW？>は開催できないぜ？』

至極まともな意見を口にした。デューカスはエーテルから目をそらさずに、ふんと鼻を鳴らす。エーテルは余裕の表情を崩さない。

「……えーと、つまりどういうこと？」

サリアはエーテルに向かって声をかけたが、デューカスの魔法陣が反応し、デューカスはサリアの方へ強制的に回転させられた。

「あ、ごめん……」

一応謝っておくサリア。自分が理解しなければデューカスが命令から解放されないことに気づき、申し訳なさそうな表情も添えておいた。

『貴様……まだ理解していなかったのか？』

デューカスの無表情が無駄に恐ろしくて、サリアは師匠に救いを求めた。ヴェオラムはちよつと思案したあと、三つの魔法陣の手前にもう一つ別の円を描きだす。他のよりも一回り大きいそれに複雑な線が加わることはなく、外縁だけが二重に補強された。

「何をするんですか？」

ヴェオラムの背後から覗き込んだサリアが問う。ヴェオラムはチ

ヨークを床に置いて振り向いた。

「簡単な移動魔法だ。エーテルとデューカスはこの円に転移させて、接触を図る。……そうだ、そなた、移動魔法は使えるのであったな」

そう言えばそうだったな……とサリアが呑気に構えていると、ヴェオラムは突然立ち上がってサリアを見下ろした。

「そなたがやってみるか」
「えっ」

エーテルが提案に対して『おお!』と感心する。しかしデューカスは、『大丈夫なのか』と怪訝そうに首を傾げた。

『その少年の腕は確かなのだろうか？ 私は身体が二分割されるのはごめんだぞ』

「え、何それ!？」

サリアの驚愕にエーテルが答えて、

『術者の集中やイメージが不十分だった場合、被召喚者は——術者自体が移動する場合も同様ですが——身体がバラバラになってしまったり、あらぬ場所に出現したりするので。サークルを描けば、到着点のイメージが固まりやすいので成功率も上がりますが……。ですからサリア様、どこか適当な場所へ飛ばうとなさるのはお控えくださいね』

寝耳に水であつたらしく、サリアは青い顔をして口をぱくぱくさせていた。五体満足であることを確かめるように両手を見つめて、精霊たちに向き直る。

「――僕がやらない方がいいかも……？」

最後の方はヴェオラムへの確認でもあった。だがヴェオラムは涼しい顔で腕を組んでいる。無言で「やれ」と言っているようだった。

「うつうつ……」

暑さなど吹き飛んでしまったサリアは、半泣きでサークルに向かう。

『おい少年、大丈夫か』

『サリア様、大丈夫ですよ』

精霊たちの声が重なり、両者は例によって視線をぶつけ合う。エーテルが微笑みさえして、デューカスに言い放った。

『随分と余裕が無いんですね。光に与する覚悟ができていないのですか？』

『その優等生面、闇に堕ちたら控えてもらっぞ』

『――お、おれ、どっちが増えるのもやだぜ！？』

サラマンデルの悲鳴が、塔に空しく響いた。

×

レイが与えられた黒いローブを羽織って立ち上がると、ラツェルの表情が和らいだような気がした。

その理由を理解できずにいるレイ。そんな二人の様子を見た炎使いが、ラツエルに問う。

「……『闇』にとって、『光』はどんな風に見えているのだ？」

え、とレイが身構える。ラツエルは例によって無表情のまま、「朝起きてカーテンを開けた時のようだ」と口を開いた。

「とりあえず眩しい。直視はしたくないな」

レイは羽織った黒ローブに視線を落としてから、遠慮がちに顔を上げた。

「……暗い色の服を着ていれば、少しはマシになりますか……？」

「できればフードもかぶっていて欲しいが」

「あ、はいっ」

それはボサボサの頭を隠すためにも好都合であり、レイは急いでフードをかぶった。外では多少暑いかもしれないが、我慢しようと決める。よく見れば、与えられたローブは比較的薄手であった。

（……気を遣ってもらったのかな？ やっぱり、悪い人には思えない……）

レイがラツエルへの評価を固めようとしていた矢先のことだった。オークレッドが懐から何かを取りだし、ラツエルに差し出す。白い粉の入った、小瓶。

「——頼まれていた品だ。最後の一瓶だったが、使い切っても構わない。私が何とかする」

受け取ったラツエルは小瓶を軽く振って、ローブの内にしまった。

「やはりあったか。公爵の記憶を読んだときには、まさかと思ったが……。よくもまあ、今の今まで残していたものだな」

「地下倉庫の片隅に眠っていた」
「なるほど」

二人の唐突なやり取りに、置いてきぼりを食らったレイ。
——何が、起こったのか。

「……あの、今は……」

思わず問うてしまった自分を呪いなくなったレイだが、もう遅い。
振り向くラツエルの視線を、嫌な予感と共に受け止める。

「——古の毒だ。^{いにしえ}三日で死に至る」

説明は終わったようだ。ラツエルが何事もなかったかのように歩き出す。

呆然と突っ立っているレイは、自分が拳を握りしめていることに気付かなかった。

「……何に」

使うのですか、と。つぶやいた声は意外なほど低い。
横からオークレッドのため息が聞こえたが、気にしてはいられない。
い。

ラツエルが前方で立ち止まって、何を考えているのか読めない瞳を振り向けてくる。

「ジューンを混乱に陥れる。宮廷魔法使いリグラリアを城から遠ざけ、あの国の『核』をあぶりだす」

「ジューン……！」

顔を殴られた時のような衝撃がレイを襲う。聞き間違いではない。

「他には特に使う必要はないが……死にたくなったら飲めばいい。苦しいのは最初の一日だけだ。あとは気づかぬ間に死んでいる」

今まさに、死んでしまいたい衝動に駆られるレイ。目の前が真っ暗だった。

——憧れてやまないジューン。ずっと師事したいと思っていた、リグラリア。

——それなのに。

「……また戦争でも、始める気なのですか」

涙のにじむ瞳でラツエルを睨みつけると、彼は眩しそうに目を細めて、何も言わない。

代わりに、オークレッドが呆れたように身を翻した。

「面倒な手駒を持ったな、ラツエル。私は先に行っておくぞ」
「ああ」

言うが早いか、オークレッドは一陣の風と共に姿を消す。
静まり返った廊下にラツエルと二人で残され、レイは言いようのない不安に駆られた。

「……」

もし『光』が朝の煌めきであるなら、『闇』は真夜中の静けさだな、とレイは思う。

時が止まったかのような静寂に、押し潰されそうだ。

（僕は、ジューンの敵になるのか。初めて行くジューンで、僕は人殺しの手伝いを……）

絶望感がレイの胸を締め付ける。家に帰るといっささやかな夢は、いとも簡単に打ち砕かれた。人を殺しておいて、平穩に暮らせるわけがない。

「……仕事が終わったら解放してやる。だからそれまで、我慢している」

宵闇の瞳は、レイの内面を容易に見透かした。

気遣われていることに気付いた様子もなく、レイはつぶやく。

「……あなたはやっぱり、ラッセル・クロウなのですね」

そのつぶやきにラッセルは何も答えず、背を向けて歩き出すのだった。

「行くぞ、レイ」

——ジューンへ。

登場人物紹介（前書き）

マークの所は本編が進むに従って更新予定。

登場人物紹介

● ウィリアム・シェリダン（16） 1 - ? - X班（班長）。戦闘課。紺髪碧眼。

愛称ウィル。ジュライ王国出身で、伯爵家の現当主（イマイチ自覚が無い）。

特技は父親から教わった剣術。料理も得意だが、騎士団では活かす機会がない。

班員の強い個性に振り回されることもしばしば。悩み多き班長である。

班員からはブラコンと認識されているが、実のところはファミコン。暗い過去あり。

短所は方向音痴であること。単独行動は危険。本人曰く、母親譲りであるとか。

そうは見えないけど努力家。負けず嫌い。負けたら「あああああ」ってなる。

ペットを飼うなら絶対に犬。弟の猫好きは理解できないし、理解する気もない。

野球をするなら3番ファースト。きつと一塁ベースを死守してる。踏ませてくれない。

● ヘルベルト・カーター（16） 1 - ? - X班（副班長）。参謀課。茶の巻毛に茶眼。

愛称ヘル。メイ王国出身で、伯爵家の現当主（ ）。

長身スタイリッシュ。安定感あり。特技はチェス、弓術、馬術など。古代語ペラペラ。

冷静かつ論理的思考の持ち主。X班のブレイン的存在だが変な方向に突っ走ることも。

班の中では一番まともな人間だと自負（班員CとEからは否定の声が上がっている）。

お坊ちゃんな雰囲気全開。シャツとかズボンとかちよっとシヤレてる。しかも似合う。

猫も悪くないけど飼うなら犬。大型犬欲しい。でもって広い庭園で一緒に遊びたい。

野球をするなら5番キャッチャー。第2の監督とは自分のことだと思ってる。

●キュリアス・ツール（16） 1-?-X班。スパイ課。金の長髪に茶眼。

愛称キュリー。ジューン王国出身で、子爵家の現当主（ ）。

とにかく身軽。情報通。どうでもいいけど服が女の子っぽい。女装専門だそうだ。

木登りや隠れんぼが得意。異常に正確な体内時計を持つが、利用価値は不明。

いつもハイテンション。付いたあだ名は『跳ねる情報バンク』。歩いていると不気味。

班員に関して多くの情報を握っている節あり。自分の情報は晒さないのでアンフェア。

X班のムードメーカーであると同時にトラブルメーカー。毎日を楽しんでいる。

弟には頭が上がらないらしい。ペットと言えば、自分専用の伝書鳩を飼ってみたい。

野球をするなら1番ライト。誰よりも楽しんでもるはず。センターまで守備に行きそう。

●エラル・ジュピター（16） 1 - ? - X班。医師課。黒髪碧眼。

愛称エル。ジューン王国出身で、子爵家の長男（ ）。

謎に包まれた多重人格者。変人。白衣を私服のように着こなす根っからのお医者さん。

トレードマークは黒縁メガネ。素顔はかなりのイケメンだが、本人に自覚は無い。

トランプタワーが得意。寮のベッドにはトランプが4セットほど隠してあるらしい。

班員W曰く「基本的にはどこにでも居そうな良い奴」。その他人格は少々厄介である。

ペットを飼うなら淡水魚。寮で飼うことを目論んでいるが実現はいつになることやら。

野球をするなら9番ショート。日によってプレーが違う、扱いにくい選手だと思う。

●アラン・ジェミニ（16） ジューン王国王太子。金髪碧眼。

上記は略称で、本名はかなり長い。国民から愛される、気さくで明るい王子様。

ウィリアムたち同年齢の友人ができたことを喜んでいる。嘘がつけない正直者。

父王と話すときは丁寧語を使う。その他には基本的にフレンドリー口調。

威厳が足りないことと記憶が飛ぶことについて、真剣に悩んでいる。ちよつと気の毒。

ヒヨコを何匹も育ててみたいと思っている。そしてニワトリへ↓
野球をするならエースで4番。当然。ここしか考えられない。直

球勝負を挑んでくる。

●サリア・シエリダン（11） 宮廷画家。宮廷魔法使い見習い。
紺髪碧眼。

可愛らしい笑顔が特徴の絵描き少年。人物画が得意。水属性の魔法使いでもある。

カストル城の東塔アトリエ在住。標準服は純白の作業着で、天使に見えてしまう。

完全なる癒し系。アトリエが『お悩み相談室』になる日はそう遠くないだろう。

兄には依存していないつもり。ときどき「ウィル兄様命！」の行動を取ることもある。

ペットは絶対に猫。もう飼ってる。父親の名前を付けちゃった。
野球をするなら記録員。スコアラ記録用紙が高クオリティな絵で埋まってる。そう。

●アレキス・ジェミニ（36） ジューン国王。銀の長髪（結）に碧眼。

上記は（ry。愛称アル。世界一豊かな国を18歳の時から治めている名君。文武両道。

芸術とか結構好き。サリアだけは手放したくない。音楽家も欲しいと思っている。

妃を病気で亡くしてから独り身。側室いない。口には出さないけど息子が一番大切。

本人曰く「息子を人質に取られている」らしい。黒王子に指図されることもしばしば。

ペットと言えば、小動物に興味がある。妻や息子によく似た「金

色の何か」がいい。

野球をするなら監督。真剣にサイン送ってると思う。バントの指示は出さない派。

●ヴェオラム・J・チェスト（55） ジューン王国宮廷魔法使い。白髪紺眼。

愛称ヴェオ。ハイレベルの光使い。十八番は探索魔法。ジューンでは国宝級の存在。

魔法使いがいないメイやジュライに出張することもある。南方諸国最大の砦。

無自覚の苦勞性。黒王子の正体やサリアの能力について何か知っているご様子。

世界最強の炎使いから命を狙われているのに、そこは何故か悠長に構えている。

鳥の扱いが上手いけど飼っているのは黒猫♀。子猫の引き取り手を探している。

野球をするなら解説員。お茶と煎餅があれば丸一日解説できるが、酷い雑音が入る。

●オークレッド・シャドナ（55） デイクセント王国宮廷魔法使い。赤茶の髪に朱眼。

愛称オーク。『地上最強の魔法使い』と名高い。ハスキーボイスが自慢らしい。

ヴェオラムとは魔法学校での友人だったが、今は彼の命を狙っている。

●ラツエル・クロウ（23） マーチ王国宮廷魔法使い。灰髪黒眼。

『地上最悪の魔法使い』として恐れられる青年。人の記憶を探ることに傾倒している。

放浪癖があり、いつもジャーニユアルやフェブラルを彷徨っているらしい。詳細不明。

●レイ・ファビッツ（14） エイプリル王国市民。茶髪に茶眼。細身。

マーチ王国に囚われていた『光』属性の魔法使い。レベルはやや高い方である。

仲間を大切に思っており、一人だけ牢を出られたことを悔やんでいる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2476i/>

仮初め伝説

2011年11月16日18時02分発行